

八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 34

- I 久宝寺遺跡（第10次調査）
- II 久宝寺遺跡（第11次調査）
- III 久宝寺遺跡（第12次調査）
- IV 恩智遺跡（第5次調査）
- V 恩智遺跡（第6次調査）
- VI 中田遺跡（第7次調査）
- VII 中田遺跡（第9次調査）
- VIII 水越遺跡（第4次調査）
- IX 豊振遺跡（第11次調査）
- X 大竹西遺跡（第2次調査）
- XI 東郷遺跡（第38次調査）
- XII 竜華寺跡（第2次調査）
- XIII 跡部遺跡（第6次調査）
- XIV 木の本遺跡（第5次調査）

1992年

八尾市埋蔵文化財発掘調査報告

- I 久宝寺遺跡（第10次調査）
- II 久宝寺遺跡（第11次調査）
- III 久宝寺遺跡（第12次調査）
- IV 恩智遺跡（第5次調査）
- V 恩智遺跡（第6次調査）
- VI 中田遺跡（第7次調査）
- VII 中田遺跡（第9次調査）
- VIII 水越遺跡（第4次調査）
- IX 萱振遺跡（第11次調査）
- X 大竹西遺跡（第2次調査）
- XI 東郷遺跡（第38次調査）
- XII 竜華寺跡（第2次調査）
- XIII 跡部遺跡（第6次調査）
- XIV 木の本遺跡（第5次調査）

1992年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は信貴牛駒山系高安山の西麓部と西に広がる平野部から成っていますが、この高安山麓一帯は高安古墳群として全国的にも知られた多くの古墳が遺存している地域であります。また、西に広がる河内平野は古来より幾度となくIH大和川の氾濫を受けながら豊かな自然環境に恵まれ、また難波と大和を結ぶ交通の要衝として歴史的にも重要な舞台となつたところであります。

しかしながら、現在の八尾市は大都市圏の一角を占め近代都市へと大きく飛躍しつつあります。誠にすばらしいことですが反面地下に眠る重要な文化財にとっては、これが破壊され消滅する危険にさらされています。そこで私共では、これらの文化遺産を後世に長く伝えるため事業者の協力を頂き、事前に発掘調査を行いその記録保存に務めている次第であります。

今回、平成3年度に実施しました久宝寺遺跡（第10次～第12次）、恩智遺跡（第5次・第6次）、中田遺跡（第7次・第9次）、水越遺跡（第4次）、菅振遺跡（第11次）、大竹西遺跡（第2次）、東郷遺跡（第38次）、竜華寺跡（第2次）、跡部遺跡（第6次）及び木の本遺跡（第6次）調査の整理が完了しましたのでこれをまとめて報告書として刊行することに致しました。

本書が学術研究の資料として活用いただきますと共に文化財の保護及び啓発普及などに広く役立てて頂ければ幸いです。

最後になりましたが、これらの発掘調査に際しご協力を賜りました関係者の皆様に心から厚くお礼申し上げます。

平成4年9月

財團法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 福島 孝

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成3年度に実施した発掘調査成果の報告を集録したもので、内業整理及び本著作成業務は各現地調査終了後に着手し、平成3年度をもって終了した。なお、報告書の末に八尾市教育委員会からの指示書を掲載した。
1. 本書に集録した報告は、下記の目次のとおりである。
 1. 本書の構成・編集は原田昌則が行い、文責などは各例言に明示した。
 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（昭和57年11月1日発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成3年4月1日改訂）をもとに作成した。
 1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面である。
 1. 本書で用いた方位は、磁北を示している。
 1. 遺構は下記の略号で表した。

竪穴住居	— S I	溝	— S D	井戸	— S E	上坑	— S K
小穴	— S P	自然河川	— N R				
1. 実測図の縮尺は、遺構が20分の1・40分の1・50分の1・100分の1を基調とし、遺物は大きいものは6分の1、小さいものは2分の1、他は4分の1に統一した。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した。
弥生土器・土師器・瓦器・瓦・埴輪・石類一白、須恵器一黒、木製品一斜線。
1. 各調査に際しては、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

目 次

はしがき

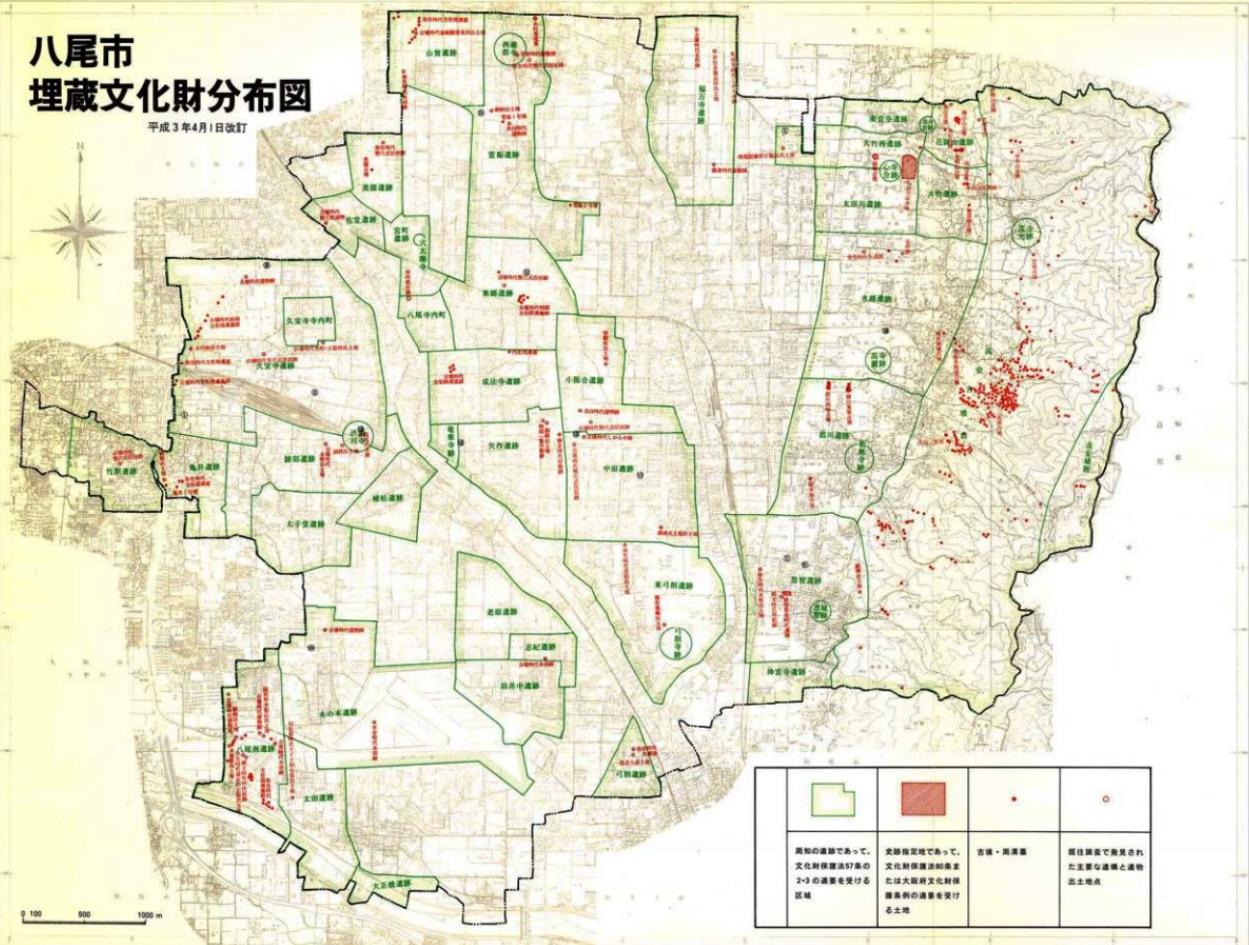
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I	久宝寺遺跡 第10次調査 (K H91-10)	1
II	久宝寺遺跡 第11次調査 (K H91-11)	5
III	久宝寺遺跡 第12次調査 (K H91-12)	17
IV	恩智遺跡 第5次調査 (O J91-5)	25
V	恩智遺跡 第6次調査 (O J91-6)	31
VI	中田遺跡 第7次調査 (N T91-7)	39
VII	中田遺跡 第9次調査 (N T91-9)	49
VIII	水越遺跡 第4次調査 (M K91-4)	57
IX	萱振遺跡 第11次調査 (K F91-11)	69
X	人竹西遺跡 第2次調査 (O T N91-2)	99
XI	東郷遺跡 第38次調査 (T G91-38)	111
XII	竜華寺跡 第2次調査 (R K91-2)	115
XIII	跡部遺跡 第6次調査 (A T91-6)	133
XIV	木の本遺跡 第5次調査 (S K91-5)	143
XV	指示書	159

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成3年4月1日改訂



I 久宝寺遺跡第10次調査(KH91-10)

例 言

1. 本書は、八尾市北龜井町2、3丁目地内で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第10次調査（KH91-10）の発掘調査の業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年10月2日から10月22日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積は70m²を測る。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成4年3月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、図面トレースは北原清子が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本 文 目 次

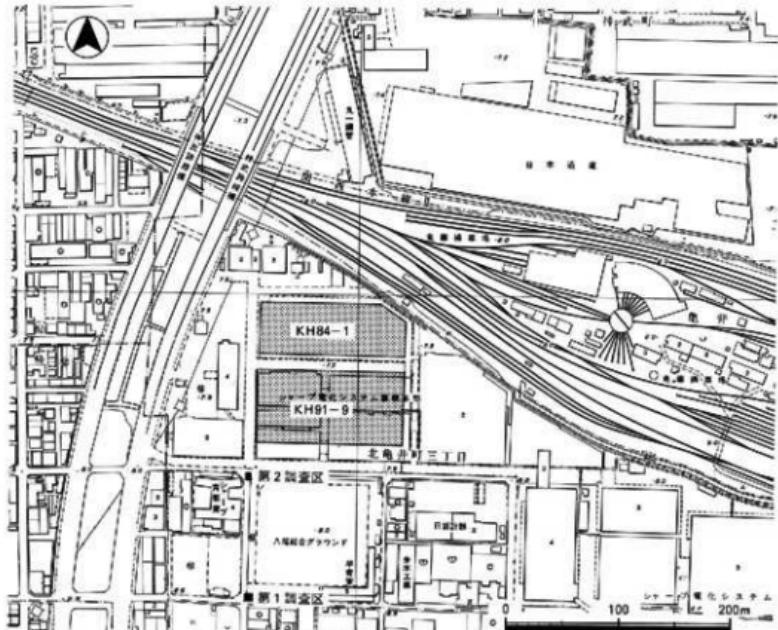
1	はじめ	1
2	調査概要	2
1)	調査方法と経過	2
2)	検出遺構と出土遺物	2
3	まとめ	3

I 久宝寺遺跡第10次調査 (KH91-10)

1 はじめに

久宝寺遺跡は八尾市の北西部、旧大和川の主流であった長瀬川の左岸に位置する。当遺跡の西側には大阪市の加美遺跡、北側に東大阪市の弥刀遺跡、南側には龜井遺跡があり、弥生時代～古墳時代を中心とした複合遺跡群に囲まれた位置にある。

今回の発掘調査は公共下水道工事に伴う調査で、八尾市・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき(財)八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施した発掘調査である。現地発掘調査の期間は平成3年10月2日から10月22日までの5日間で、調査面積は約70m²を測る。また、報告書作成に係わる業務は現地調査終了後、平成4年3月31日まで実施した。



第1図 調査地周辺図

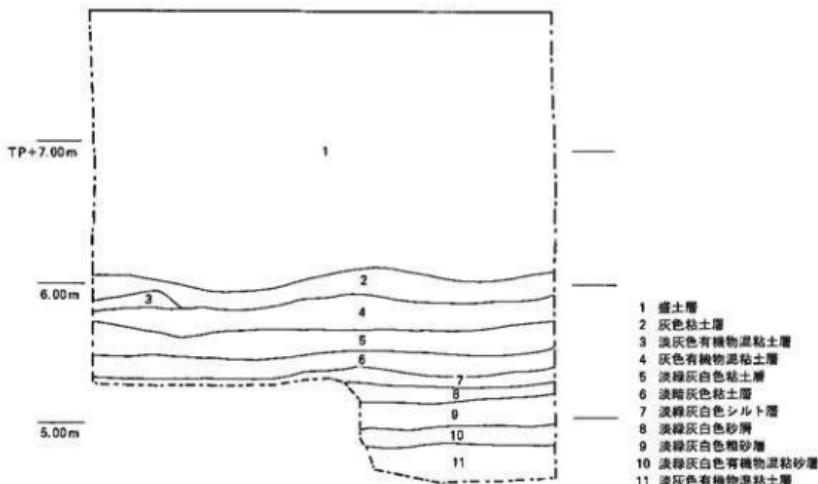
2 調査概要

1) 調査方法と経過

調査対象地は公共下水道の発進立坑（以下、第1調査区と呼称）と到着立坑（以下、第2調査区と呼称）で両者間の距離は110mを測る。第1調査区については、地表下1.8m付近までが盛土のため、重機による掘削を実施した。以下、地表下3.0mまでは編理に従って人力掘削と上面精査を繰り返した。さらに、下層確認のため調査区南側の一部について地表下4.2mまで重機による掘削を行った。第2調査区については夜間の掘削であり、調査範囲も狭いため工事に併行する立会調査を行った。

2) 検出遺構と出土遺物

第1調査区では、北東隅の断面の地表下2.0m前後（標高5.7m前後）で有機物を含んだ灰色粘土層が0.1m程度の高まりを持つことが確認された。駐畔の可能性をもつが、平面的には確認できなかった。この他には調査区の東側の地表下2.4m前後（標高5.6m前後）で自然流路状の堆積を確認したのみであり、明確な遺構・遺物は全く確認できなかった。第2調査区においては地表下1.5mまで盛土であり、これ以下は灰色粘土層が堆積し、さらにこの下には灰色シルト層等が堆積する状態であった。第1調査区と同様遺構・遺物は確認できなかった。



第2図 第1調査区南壁実測図（1/40）

3まとめ

当調査地の北側で当調査研究会が平成3年度に実施した第9次調査（KH91-9）では、標高^{註1}6.0m前後で古墳時代前期の集落・墓域が確認されている。しかし、当調査では低湿地状の堆積と自然流路を確認したのみであった。以上のことから、久宝寺遺跡における北龜井町2丁目を中心とした墓域、集落域は、南側の北龜井町3丁目付近までは広がらない可能性が指摘できよう。

註記

註1 （財）八尾市文化財調査研究会『平成3年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』1992



第1調査区全景（東から）



第1調査区南壁（北から）

II 久宝寺遺跡第11次調査（K H 91-11）

調査報告書

例　　言

1. 本書は、八尾市渋川町6丁目34、35番地で実施した診療所建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第11次調査（KH91-11）の発掘調査の業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が植田武氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年10月7日～10月18日にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は100m²を測る。なお、調査においては中西明美、垣内洋平、福島友香が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し、平成4年3月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測・遺物復元－中西、図面レイアウト・トレース・遺物写真－中西、西村が行った。
1. 本書の執筆は、西村が担当した。

本　文　目　次

1. はじめに.....	5
2. 調査概要.....	5
1) 調査方法と経過.....	5
2) 検出遺構と出土遺物.....	8
3. まとめ.....	11
4. 出土遺物観察表.....	12

II 久宝寺遺跡第11次調査 (KH91-11)

1. はじめに

久宝寺遺跡は、河内平野の中を北または北西方向に流れている長瀬川と平野川に挟まれた沖積地上に位置している。当遺跡は、八尾市の西部に位置し、現在の行政区間では八尾市の北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・龜井・龜井北町・渋川町・跡部北の町にあたる。

当遺跡内では、当調査研究会が10件の調査を行なっている他、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター・東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会により調査が実施されており、繩文時代晚期～近世に至る遺跡であることが確認されている。

2. 調査概要

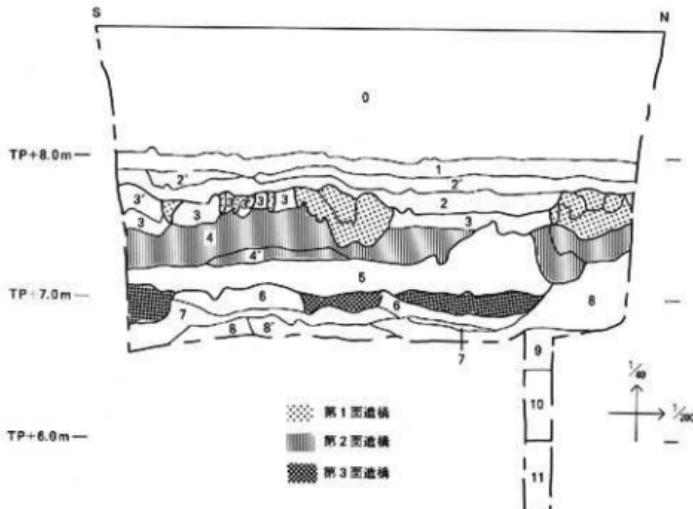
1) 調査の方法と経過

今回の調査は診療所建設に伴うもので、建物基礎部分を対象とした。調査では調査地の南側に基準の杭(任意)を打ち、そこから東に5m、西に5m、北に30mの範囲を地区割した。地区割には南東隅から北に5m毎にアラビア数字(1～5)・西に5m毎にアルファベット(a



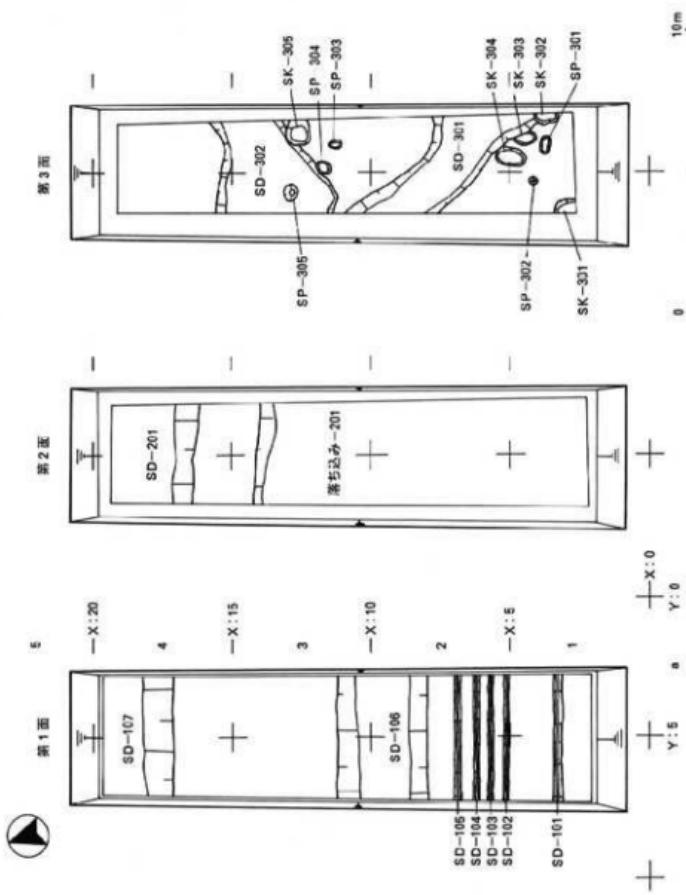
第1図 調査地周辺図

～b) を名付けた。1a……5b の範囲が今回の地区割である。地区割の南東隅にはX:0・Y:0を設け、その地点から北にX:0～X:30・西にY:0～Y:10を設定し、X・Yの交点を地区的名称とした。調査に当たっては、現地表下1.25m前後まで機械掘削を行い、以下0.5mについては人力掘削を行なった。



第0層	盛土	層厚1.0m前後
第1層	黒色(N 2/7)細砂混粘土	層厚0.1～0.15m 旧耕土
第2層	緑灰色(7.5 GY 5/1)シルト混粘土	層厚0.1～0.15m
2'層		細砂を多く含む。
第3層	暗緑灰色(5G 4/1)シルト混粘土	層厚0.15～0.2m 上面(TP+7.6～7.7m)は第1面である。
3'層	緑灰色(5G 5/1)	
第4層	黄褐色(10YR 5/8)細砂混粘土	層厚0.1～0.4m 落込み-201の埋土層である。
4'層	明黄褐色(10YR 6/8)	
第5層	褐色(10YR 4/4)細砂混粘土	層厚0.2～0.3m 上面(TP+7.2～7.5m)は第2面である。古墳時代中期～後期の遺物を含む。
第6層	黄褐色(2.5 Y 5/6)シルト混粘土	層厚0.2m 上面(TP+7.0m前後)は第3面である。
第7層	暗オリーブ色(7.5 Y 4/3)シルト	層厚0.1～0.2m
第8層	暗青灰色(5BG 4/1)粘土	層厚0.4m前後
8'層		シルトを多く含む。
第9層	青灰色(5B 5/1)シルト	層厚0.3m
第10層	暗青灰色(5B 3/1)粘土	層厚0.5m
第11層	暗青灰色(10SG 3/1)粘土	層厚0.5m以上

第2図 西壁面実測図



國學圖書

2) 検出遺構と出土遺物

調査を実施した結果、現在表下約1.35mの第3層上面（第1面）で平安時代後期の遺構（溝7条）を検出し、その面から0.2～0.3m下層の第5層上面（第2面）で古墳時代後期末の遺構（溝1条・落込み1箇所）を検出した。さらにその面から0.2～0.4m下層の第6層上面（第3面）で古墳時代中期～後期の遺構（上坑5基・小穴5個・溝2条）を検出した。

・第1面

溝（SD-101～107）

SD-101

2 a・b地区で検出した。検出長5m・幅0.3m・深さ0.06mを測る。埋土は灰色（N6／＼）シルト混粘土である。内部からは須恵器・土師器の破片が少量出土した。

SD-102

2 a・b地区で検出した。検出長5m・幅0.2m・深さ0.05mを測る。埋土は灰色（N6／＼）シルト混粘土である。内部からは須恵器の破片が少量出土した。

SD-103

2 a・b地区で検出した。検出長5m・幅0.2m・深さ0.06mを測る。埋土は灰色（N6／＼）シルト混粘土である。内部からは土師器・瓦器の破片が少量出土した。

SD-104

2 a・b地区で検出した。検出長5m・幅0.2m・深さ0.04mを測る。内部には灰色（N6／＼）シルト混粘土である。内部からは土師器の破片が少量出土した。

SD-105

2 a・b地区で検出した。検出長5m・幅0.3m・深さ0.04mを測る。内部には灰色（N6／＼）シルト混粘土である。内部からは土師器の塊（1）が出上した。

SD-106

2・3 a・b地区で検出した。検出長5m・幅3.2m・深さ0.3mを測る。埋土は上から灰色（7.5Y 6／1）細砂混粘土・灰色（7.5Y 4／1）粘土である。内部からは土師器の塊（2）のか須恵器・黒色土器の破片が少量出土した。

SD-107

4 a・b地区から北で検出した。検出長5m・幅2.7m以上・深さ0.4m以上を測る。埋土は上から褐色（7.5YR 4／4）微砂・明褐色（7.5YR 5／6）シルト混微砂・黒褐色（7.5YR 3／2）シルト・灰白色（7.5Y 7／1）シルト・暗緑灰色（5G 4／1）粗砂混粘土・暗オリーブ色（7.5Y 4／3）細砂混粗砂である。内部から須恵器・土師器の破片が少量出土した。

第3層包含層

第3層からは土師器の高杯（3）・須恵器の杯蓋（4）が出土した。

・第2面

溝（SD-201）

SD-201

4 a・b地区で検出した。検出長5.0m・幅3.3m以上・深さ0.3m以上を測る。埋土は上から
橙色（5YR 6/6）シルト混粗砂・オリーブ黄色（7.5Y 6/3）シルト混粘土である。内部から
らは古墳時代後期末の須恵器の杯身（5）が出土した。

落込み-201

1～3 a・b地区で検出した。検出長5.0m・幅12m以上・深さ0.4m以上を測る。埋土は黄
褐色（10YR 5/8）細砂混粘土である。内部からは古墳時代後期の土師器の（6）、須恵器の
杯身（8・10）杯蓋（7・9）、鉄製品（11）、磁石（12）が出土しており、この遺物は地形的
に西へ低くなる落込みの部分を埋めた時のものと思われる。

・第3面

土坑（SK-301～305）

SK-301

1 b地区で検出した。検出部での長径0.75m以上・短径0.6m以上・深さ0.1m以上を測る。
埋土は灰色（10Y 4/1）シルト混粘土である。内部からの遺物の出土はなかった。

SK-302

1 a地区で検出した。検出部での長径0.9m以上・短径0.4m以上・深さ0.1m以上を測る。埋
土は灰色（10Y 4/1）シルト混粘土である。内部からは須恵器の破片が少量出土した。

SK-303

1 a地区で検出した。平面の形状は橢円形で長径0.8m・短径0.5m・深さ0.15mを測る。埋
土は灰色（10Y 4/1）シルト混粘土である。内部からの遺物の出土はなかった。

SK-304

1・2 a地区で検出した。平面の形状は橢円形で長径1.1m・短径0.7m・深さ0.2mを測る。
埋土は暗青灰色（10BG 4/1）シルトである。内部からの遺物の出土はなかった。

SK-305

3 a地区で検出した。平面の形状は方形で長幅0.9m・短幅0.6m・深さ0.15mを測る。埋土
は暗灰色（N 3/）シルトである。内部からの遺物の出土はなかった。

小穴 (S P - 301~305)

S P - 301

1 a 地区で検出した。平面の形状は橢円形で長径0.7m・短径0.4m・深さ0.15mを測る。埋土は灰オリーブ色(7.5Y 4/2)シルト混粘土である。内部からの遺物の出土はなかった。

S P - 302

1 b 地区で検出した。平面の形状は円形で径0.3m・深さ0.2mを測る。埋土は灰オリーブ色(7.5Y 4/2)シルト混粘土である。内部からは土師器の破片が少量出土した。

S P - 303

3 a 地区で検出した。平面の形状は橢円形で長径0.5m・短径0.3m・深さ0.1mを測る。埋土は灰オリーブ色(7.5Y 4/2)シルト混粘土である。内部からは土師器の破片が少量出土した。

S P - 304

3 a 地区で検出した。平面の形状は橢円形で長径0.6m・短径0.4m・深さ0.15mを測る。埋土は灰オリーブ色(7.5Y 4/2)シルト混粘土である。内部からの遺物の出土はなかった。

S P - 305

3 b 地区で検出した。平面の形状は橢円形で長径0.6m・短径0.5m・深さ0.3mを測る。埋土は灰オリーブ色(7.5Y 4/2)シルト混粘土である。内部からの遺物の出土はなかった。

溝 (S D - 301・302)

S D - 301

1 ~ 3 a ~ c 地区で検出した。南東-北西方向に伸びる。検出長0.5m・幅2.0~2.6m・深さ0.2mを測る。埋土はオリーブ褐色(2.5Y 4/3)シルト混粘土である。古墳時代中期の須恵器の杯身(13)が出土した。

S D - 302

3・4 a・b 地区で検出した。東北-南西方向に伸びる。検出長5.0m・幅2.3~4.3m・深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色(10YR 3/4)シルト混粘土である。古墳時代中期末の土師器の壺(14)が出土した。

第5層包含層

第5層からは土師器の壺(15)高杯(16)壺(17・18)瓶(19)・須恵器の杯身(20~22)が出土した。

3. まとめ

今回の調査では古墳時代中期～後期【第3面】・古墳時代後期末【第2面】・平安時代後期【第1面】の三時期の遺構があることがわかった。

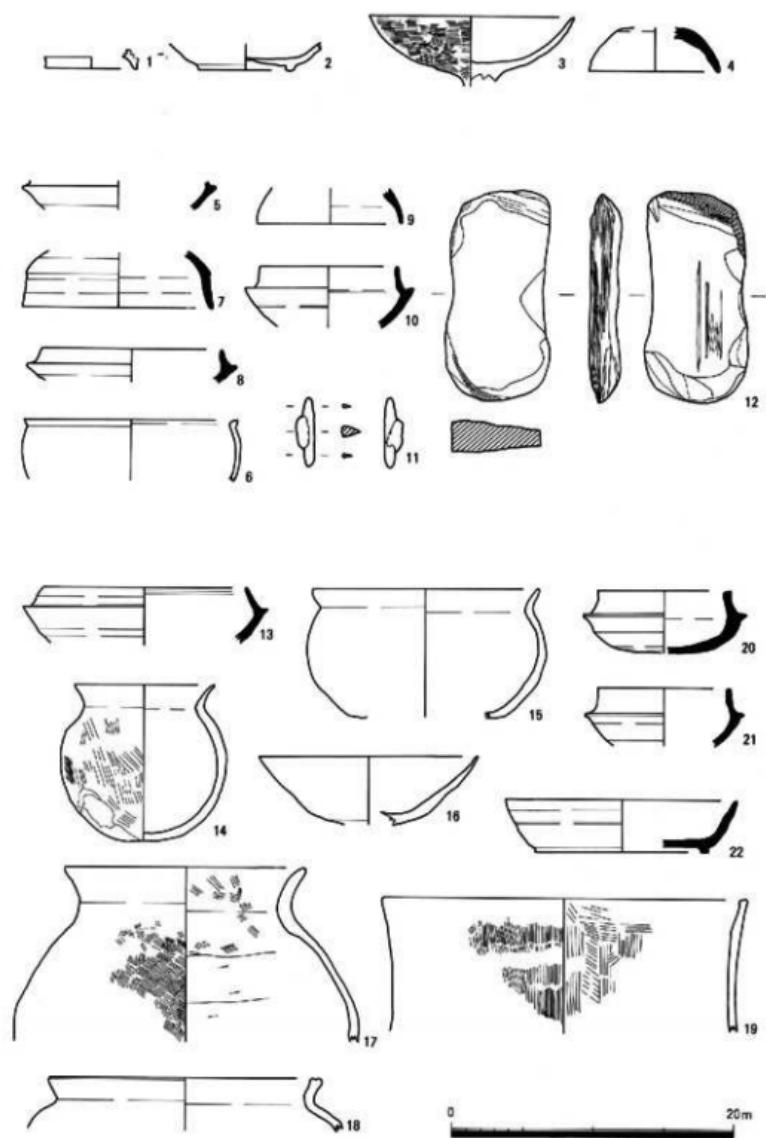
第1面では、素掘りの溝が東西方向に伸びており、この遺構は耕作に伴うものと思われる。

第2面では、調査地の中央から西は地形が低く落んでいることがわかった。この埋土内には須恵器・土師器の細片が多く含まれており、この時期の遺構が調査地周辺に存在していると思われる。

第3面では、上坑や小穴を検出しておらず、調査地が狭いため全容は知ることができなかったが、調査地一帯に集落があることがわかった。

4) 出土遺物観察表

実測図番号	器種	法量(cm) 口径、底部 最大径、器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
							内外面ナデ。	灰黄色 (2.5YR5/2)
1 SD-105	土師器 瓶	高台径 6.0	内外面ナデ。	灰黄色 (2.5YR5/2)	密	良好		
2 SD-106	土師器 瓶	高台径 6.6	内外面ナデ。	橙 (7.5YR5/4)	密	良好		
3 3層	土師器 高杯	口径 14.6	外面ヘラミガキ、内面ナデ。	灰黄褐色 (10YR5/4)	粗 1mm程度 砂粒含む	良好		
4 3層	須恵器 杯蓋	口径 9.2	内外面回転ナデ。	青灰色 (5PB5/4)	密	良好		
5 SD-201	須恵器 杯身	受部径 13.8	内外面回転ナデ。	灰色 (N61)	密	良好		
6 4層	黒色土器 甕	口径 15.2	体部内外面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	暗灰色 (N31)	密	良好		
7 4層	須恵器 杯蓋	口径 13.4	体部外表面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ。 口縁部内外面回転ナデ。	灰色 (N51)	密	良好		
8 4層	須恵器 杯身	口径 12.8	口縁削、受部内外面回転ナデ。	灰白色 (2.5YR5/4)	密	良好		
9 4層	須恵器 杯蓋	口径 10.2	口縁部内外面回転ナデ。	青灰色 (5B5/4)	密	良好		
10 4層	須恵器 杯身	口径 9.8	体部外表面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ、 受部口縁部内外面回転ナデ。	青灰色 (5PB5/4)	密	良好		
11 4層	鉄製品	-	破片であるため、全容は不明である。断面二角形をしており、刀子か、鐵の可能性が考えられる。	褐褐色 (2.5YR5/4)	-	-		
12 4層	磁石	-	両面使用。B面には、金属製品をおしつけてみがいた跡がみられる。	暗灰色 (N31)	-	-		
13 SD-301	須恵器 杯身	口径 14.4	体部外表面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ、 受部口縁部内外面回転ナデ。	青灰色 (5PB5/4)	密	良好		
14 SD-302	土師器 甕	口径 10.0 器高 11.1	体部外面ハケ、内面ナデ。口縁部内外面 ヨコナデ。体底下半に焼成後の空孔あり。	褐色 (7.5YR5/4)	粗 1~2mmの 砂粒含む	良好		
15 5層	土師器 甕	口径 16.0	内外面ナデ。	褐褐色 (7.5YR5/4)	密	良好		
16 5層	土師器 高杯	口径 15.4	内外面ナデ。	明黄褐色 (10YR5/4)	粗	良好		
17 5層	土師器 甕	口径 17.2	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ。口縁部 外表面ヨコナデ。内面ハケのチヨコナデ。	褐褐色 (10YR5/4)	1~3mmの 砂粒多く含む	良好		
18 5層	土師器 甕	口径 19.4	内面ヨコナデ。	褐色 (7.5YR5/4)	密	良好		
19 5層	土師器 甕	口径 26.2	口縁部、体部内外面ハケ。	浅黄褐色 (10YR5/4)	密	良好		
20	須恵器 杯身	口径 9.4 器高 4.5	体部外表面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ。 受部口縁部内外面回転ナデ。	暗青灰色 (5B5/4)	密	良好		
21	須恵器 杯身	口径 9.6	体部外表面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ。 受部口縁部内外面回転ナデ。	灰白色 (N71)	密	良好		
22	須恵器 杯身	口径 16.6 高台径 12.4 器高 3.1	内外面回転ナデ。	青灰色 (5B5/4)	密	良好		



第4図 出土遺物実測図



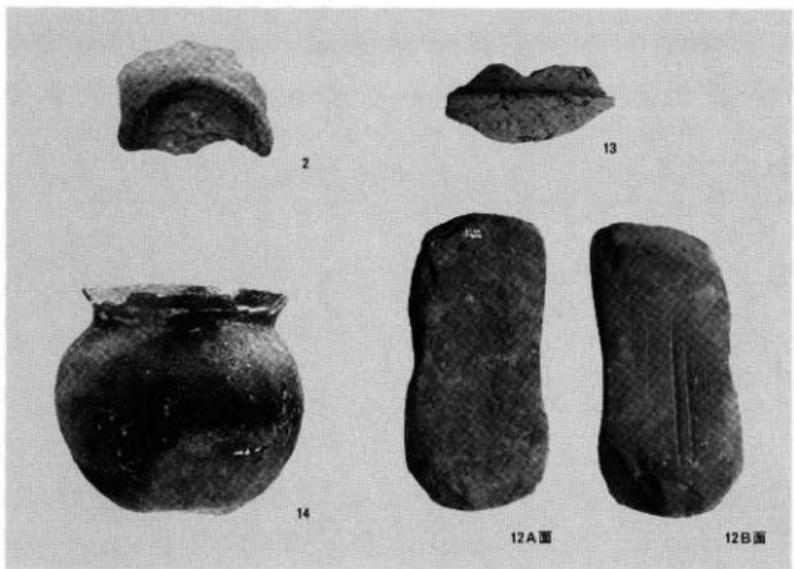
第1面全景（北から）



第2面全景（北から）



第3面全景（北から）



出土遺物



III 久宝寺遺跡第12次調査(KH91-12)

八 結 論

例　　言

1. 本書は、八尾市北久宝寺町3丁目地内で実施した電気管路新設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第12次調査（KH91-12）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が関西電力株式会社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年11月29日～12月2日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は24m²である。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1.はじめ	17
2.調査概要	17
1) 調査の方法と経過	17
2) 基本層序	18
3) 検出遺構と出土遺物	19
3.まとめ	21

III 久宝寺遺跡第12次調査 (KH91-12)

1. はじめに

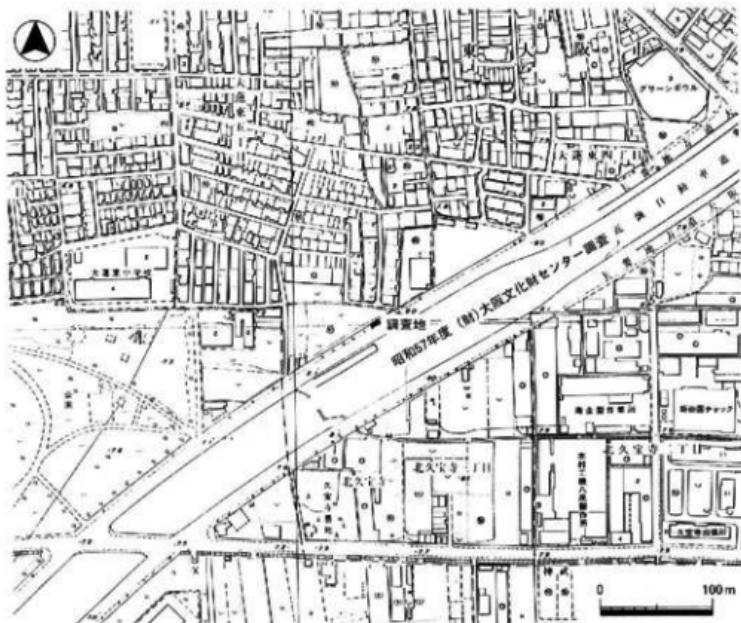
久宝寺遺跡は、八尾市の西部にあたる久宝寺の一帯に存在する弥生時代から近世に至る複合遺跡である。地形的には旧大和川の主流である長瀬川と平野川に挟まれた沖積地上に位置する。現在の標高は8~9mを測る。

周辺には当遺跡と同様、弥生時代から発展してきた遺跡が密集している。東南には跡部遺跡、南西には竹渕遺跡・加美遺跡、南には龜井遺跡、北には美國遺跡などが接している。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

調査地は久宝寺遺跡推定範囲内の北端部にあたり、東部約40mでは近畿自動車道建設に伴う



第1図 調査地位位置図

発掘調査が行われている。今回の調査は電気管路新設工事の立坑部分(2.9m×8.4m)で、現地表から1.8mまでの土層を機械で排除し、それより以下、約3.3mの土層については人力掘削及び機械掘削を併用して実施した。調査期間は平成3年11月29日～12月2日である。調査面積は約24m²を測る。今回の発掘調査は、当調査研究会が当遺跡で実施した第12次調査にあたる(第2図)。

2) 基本層序

調査区の基本層序は、第3図に示す第1層～第12層に分けられる。第13層～第23層は溝の堆積土である。

第1層 アスファルト・バラス・盛土・旧耕

土ほか。層厚1.8m。第1層として
いるが詳細は不明である。

第2層 淡褐色微砂。層厚20cm。土師器の小片1点を出土しているが時期は不明である。

第3層 茶褐色微砂。層厚5～10cm。礦化鉄を含み、層が堅く締まっている。

第4層 乳灰色シルト。層厚5～10cm。南東側でなく、北西側に拡がる層である。

第5層 灰色微砂混粘質土。層厚10cm。炭化物を少量含む。

第6層 淡灰茶色微砂。層厚15cm。色調が東側へ行くに従い青くなる。

第7層 灰青色シルト。層厚10cm。

第8層 灰青色粘質土。層厚15cm。

第9層 暗灰青色粘土。層厚5cm。炭化物を少量含む。

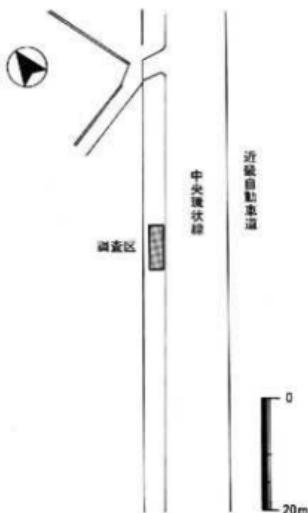
第10層 灰青色微砂。層厚20～50cm。

第11層 暗灰色粘質土と乳灰色微砂の互層。層厚40cm。下部付近には植物遺体が何層かの薄い層となっているのがみられる。

第12層 乳灰褐色細砂～粗砂。層厚1.5cm以上。部分的に灰青色粘質土層が互層している。

また砂層内の上部付近から弥生土器(V様式)の小片と流木片を少量出土している。

第1層は中世から今までの土層と思われるが、堆積状況を掴むことができなかった。第8層上面では古墳時代前期以降の溝を検出した。第12層は砂層を基調とする河川の堆積層である。



第2図 調査区位置図 (S = 1/1,000)

3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、弥生時代後期～古墳時代前期に至る遺構・遺物を検出した。遺構は弥生時代後期以降の自然河川1条（NR-1）、古墳時代前期（布留式）以降の溝1条（SD-1）を検出した。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期に至る遺物がごく少量出土した。

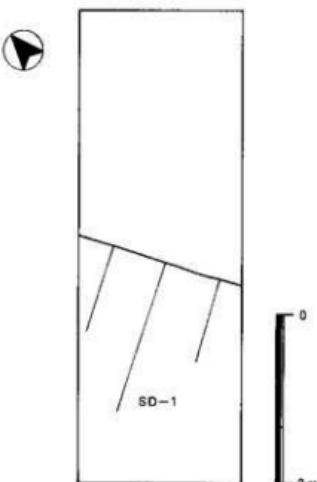
NR-1

調査区全体に堆積する第12層が河川の埋没層と考えられる。規模の全容は不明であるが、調査区で確認した限りでは幅8m以上、深さ2m以上を測る。遺物は上層から弥生時代後期のV様式甕1点（1）が出上している。（1）は口縁部分の破片である。形態は弥生時代後期のV様式の特徴をもつもので、径16cmを測る。調整は体部の外面に荒い叩き、内面に箆ナデを施している。胎土は良好で少量の砂礫粒が含まれている。色調は淡灰茶色である。

SD-1

調査区の南部で検出した溝である。方向は東～西方向に伸びるものと考えられる。規模は検出部で深さ1.2m、幅4.4m以上を測り、南肩は調査区外に至る。堆積土は粘質土層と微砂層が交互に堆積する層である。

層名は第3図に掲載している第13層～第23層がそれにあたる。遺物は溝底付近の第23層内から小枝や植物遺体とともに木製品2点を出土した。木製品の大きさは、2が長さ85cm、幅3～4cm、厚み2～3cm、3が長さ53cm、幅4～6cm、厚み1.5～2cmを測る板材である。面にはチヨンナのようなもので加Tした跡が一部にみられる。



第3図 遺構平面図 (S = 1/100)

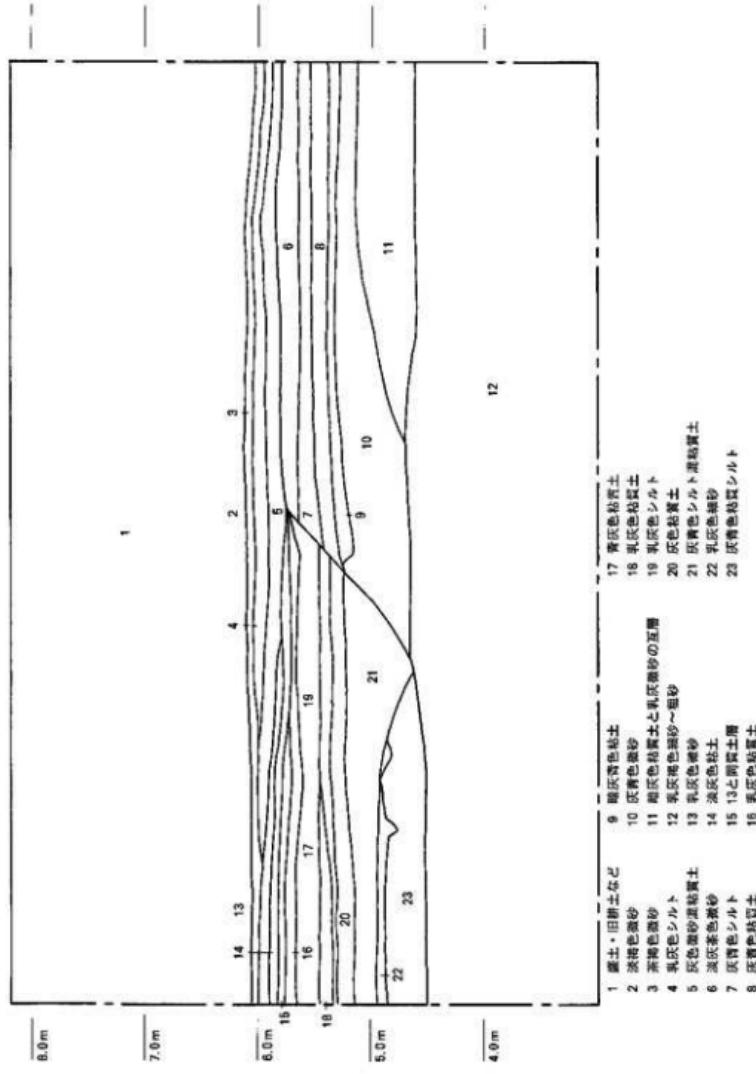
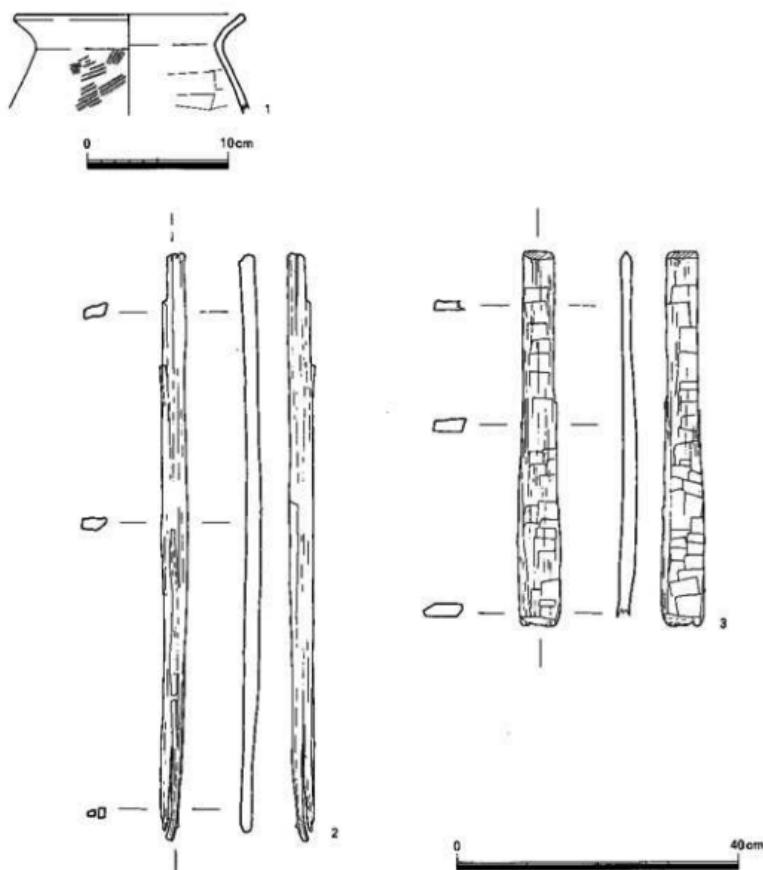


図4 西壁断面図 ($S = 1/50$)



第5図 遺構に伴わない出土遺物実測図

3.まとめ

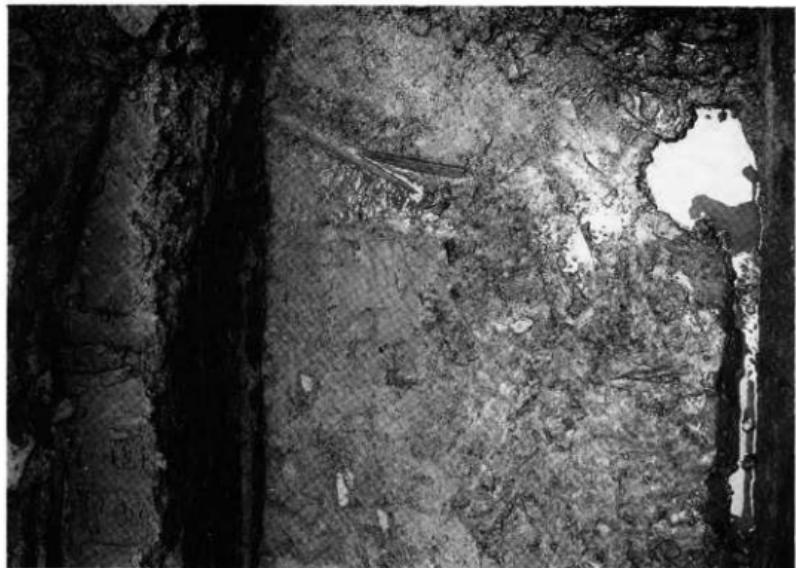
今回の発掘調査は現道路の敷面下で、しかも小面積であった。調査区は近畿自動車道に伴う調査に隣接することから、それに関する遺構が予想された。現地表下約1.8mまでの土層については、その状況を掴むことができなかったが、それより以下の調査では、古墳時代前期以降の溝と弥生時代後期以降に埋没した自然河川の堆積層を確認することができた。



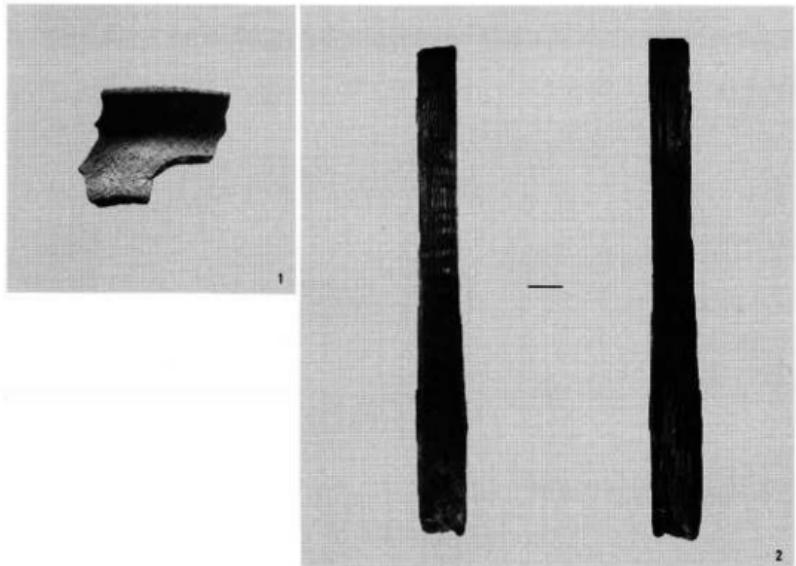
第1調査面北部（南から）



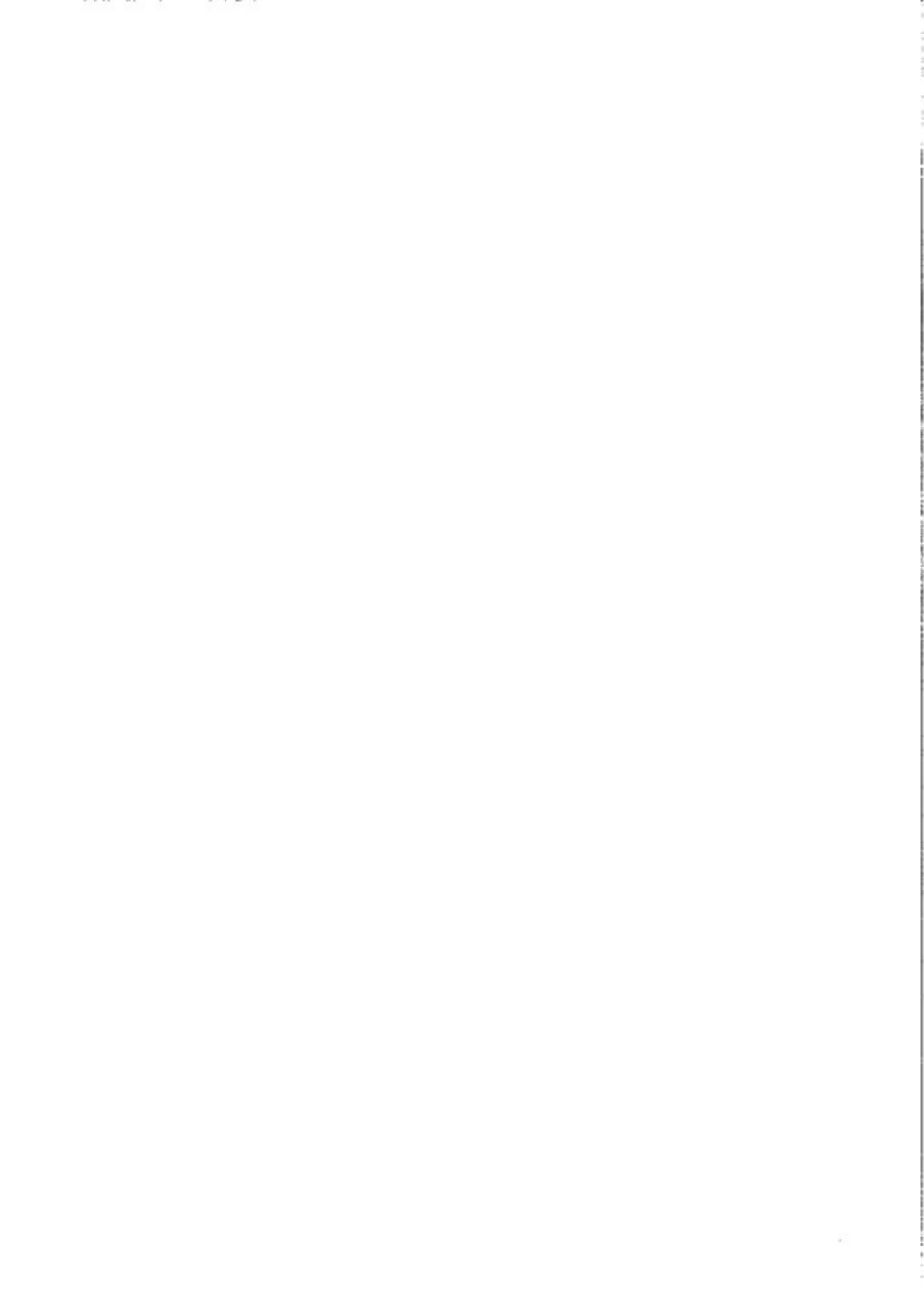
第1調査面南部（北から）



第1調査面Sロ-1（南から）



出土遺物



IV 恩智遺跡第5次調査（O J91-5）

第三回

例　　言

1. 本書は、八尾市恩智北町3丁目112～126、42番地先で実施した排水路改修工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する恩智遺跡第5次調査（OJ91-5）の発掘調査の業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年11月14日～11月16日にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は70m²を測る。なお、調査においては林成光が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し、平成4年3月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、西村が担当し、執筆・編集を行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	25
2.調査概要.....	25
1) 調査方法と経過.....	25
2) 検出遺構と出土遺物.....	25
3.まとめ.....	29

IV 恩智遺跡第5次調査 (OJ91-5)

1. はじめに

恩智遺跡は、生駒山地の西麓に形成された扇状地の末端から河内平野にかけて広がっている。当遺跡は八尾市の東部に位置し、現在の行政区画では八尾市恩智北町・恩智中町・恩智南町一帯にあたる。当遺跡内では、昭和50~53年にかけて瓜生堂遺跡調査会が恩智川改修工事に伴って調査を実施しており、その結果、弥生時代前期から古墳時代中期に至る遺構を検出している。そのほか大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会等により、多くの調査が実施されており、縄文時代前期から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが現在までわかっている。なお、当遺跡の周辺には、東に高安古墳群・南に神宮寺遺跡・西に東弓遺跡・北に郡川遺跡が存在している。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査地は、恩智北町3丁目112~126・42番地先で、当遺跡内の北部にあたる。調査は、排水路の会所部分（3×3m規模のグリッド8箇所 西からNo.1グリッド～8グリッドと名付ける）を対象に行なった。現地表下0.8mまで機械により掘削した後、以下約0.3mの土層について人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。

2) 検出遺構と出土遺物

No.1 グリッド

基本層序は、第0層 盛土・第1層 灰色細砂混粘土・第2層 灰褐色細砂混粘土・第3層 紫灰色細砂混粘土・第4層 灰黄色粗砂〔疊含む〕（地山）である。

第2層上面から切込む時期不明の溝1条（SD-1）検出した。SD-1は東西方向に伸びるもので、調査地内では両肩のみの検出で、本来の幅・深さは不明である。検出した幅は1.2m・深さ0.6mを測る。埋土は上から灰色微砂・灰褐色細砂混粘土で、内部からの遺物の出土はなかった。また、西壁には小穴状の窪みが見られたが、平面での検出はなかった。埋土は灰色粘土で内部からの遺物の出土はなく時期は不明である。第3層内からは、弥生時代と思われる壺の体部片が1点出土した。第4層からの遺構・遺物の検出はなかった。

No.2 グリッド

基本層序は、第0層 盛土・第1層 灰色細砂混粘土・第2層 灰褐色細砂混粘土・第3層 紫灰色細砂混粘土・第4層 灰黄色粗砂〔疊含む〕（地山）である。

第2層上面から切込む時期不明の溝1条（SD-1）検出した。SD-1は東西方向に伸び



第1回 調査地周辺図

るもので、調査地内では南肩のみの検出で、本来の幅・深さは不明である。検出した幅は1.5m・深さ0.6mを測る。粘土は上から灰色細砂・灰褐色細砂混粘土で、内部からの遺物の出土はなかった。第3層・第4層からの遺構・遺物の検出はなかった。

No.3 グリッド

基本層序は、第0層 盛土・第1層 褐灰色細砂混粘土・第2層 灰茶色シルト混粘土・第3層 灰褐色細砂粘土質 [疊合む] (地山) である。

第2層上面から切込む古墳時代前期 [布留式期] の上坑1基 (SK-1) を検出した。SK-1は、検出した東西幅は0.7m・南北幅は0.4m・深さは0.2mを測る。埋土は灰褐色粘土 (疊合む) で、土師器の壺の体部片が小量出土している。第3層からの遺構・遺物の検出はなかった。

No.4 グリッド

基本層序は、第0層 盛土・第1層 褐灰色細砂混粘土・第2層 灰茶色シルト混粘土・第3層 灰褐色細砂粘土質 [疊合む] (地山) である。

第3層上部から切込む時期不明の溝1条 (SD-2) を検出した。SD-2は東西方向に伸びるもので、調査地内では北肩のみの検出で、本来の幅・深さは不明である。検出した幅は0.5m・深さ0.3mである。埋土は上から茶褐色シルト・灰白色シルトで、内部からの遺物の出土はなかった。

No.5 グリッド

基本層序は、第0層 盛土・第1層 暗青灰色粘土・第2層 灰黄色細砂混粘土・第3層 黄褐色レキ混粗砂 (地山) である。遺構・遺物の検出はなかった。

No.6 グリッド

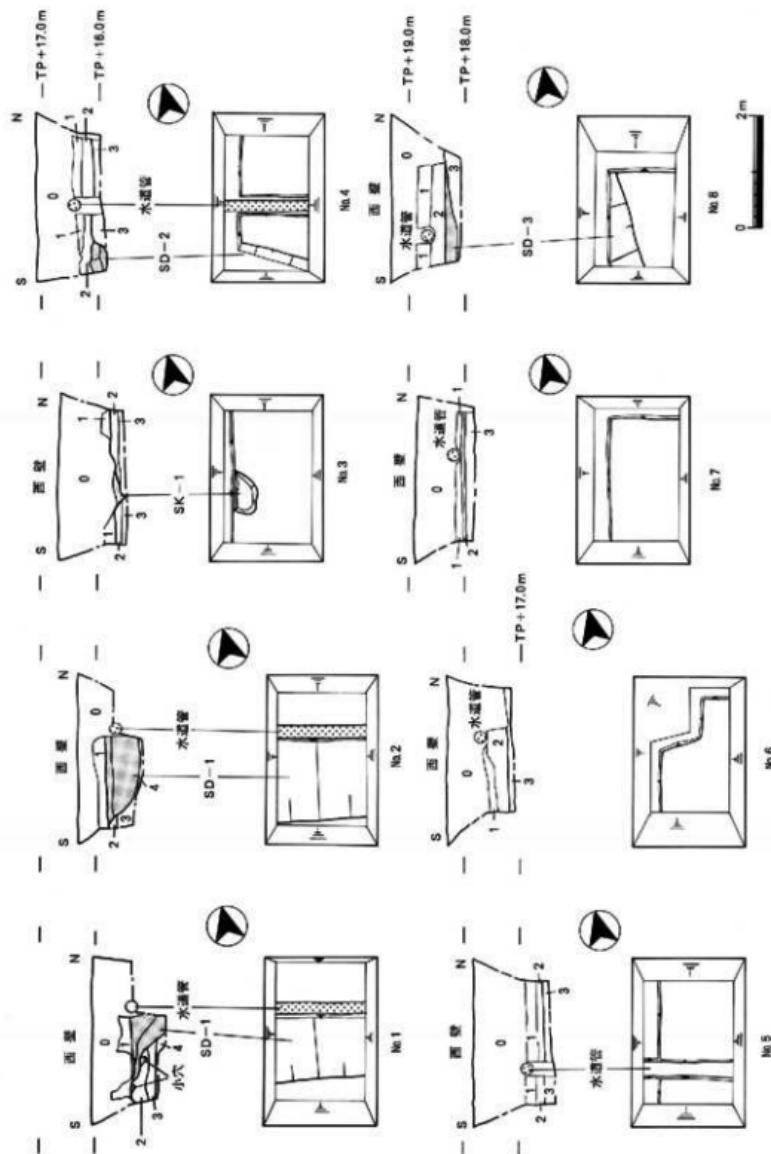
基本層序は、第0層 盛土・第1層 褐色細砂・第2層 灰褐色細砂・第3層 黄褐色疊混粗砂 (地山) である。遺構・遺物の検出はなかった。

No.7 グリッド

基本層序は、第0層 盛土・第1層 灰色粗砂混粘土・第2層 褐色細砂・第3層 灰褐色疊混細砂 (地山) である。遺構・遺物の検出はなかった。

No.8 グリッド

基本層序は、第0層 盛土・第1層 褐灰色細砂・第2層 灰褐色細砂混粘土・第3層 褐色疊混粗砂 (地山) である。第3層上面から切込む古墳時代中期の溝1条 SD-3を検出した。SD-3は南北方向に伸びるもので、調査地内では東肩のみの検出で、本来の幅・深さは不明である。検出した幅は0.6m・深さ0.2mを測る。埋土は灰褐色細砂混粘土で、内部からは須恵器の壺体部片が1点出土した。



第2図 掘出構造平面図

3. まとめ

今回の調査では、No.3で古墳時代前期〔布留式期〕の上坑、No.8で古墳時代中期の溝、No.1・No.2・No.4で時期不明の溝を検出した。

No.1とNo.2で検出した溝は、同一のものと思われ、遺構の時期は明確ではないが、No.1の第3層内の出土遺物から見ておそらく古墳時代～中世のものと思われる。

No.2～3にかけては第2層上面がTP+15.7～15.8mと平坦であり、No.3では、この面から切込む遺構を検出していることから、当調査地周辺に居住域が存在している可能性があると考えられる。

No.4で検出した溝の時期の確定は難しいが、地山面から切込んでいることや、No.1～No.3・No.5～No.8の層位をみて考えると、古墳時代以前のものであると思われる。

No.8で検出した古墳時代中期の溝は、東から西に低くなる斜面に平行しており、流れの方向は南から北である。No.1～7では古墳時代中期の遺構・遺物を検出していないことから、この溝の上流または東側にこの時期の遺構が存在している可能性が考えられる。



No. 1



No. 2



No. 3



No. 4



No. 5



No. 6



No. 7



No. 8

No. 1～No. 8 グリッド全景

V 恩智遺跡第6次調査(OJ91-6)

調査報告書

例　　言

1. 本書は、八尾市恩智北町2丁目169・170・172・173で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する恩智遺跡第6次調査(OJ91-6)の発掘調査の業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が高安孝氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年12月18日から12月21日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積は114m²を測る。なお、調査においては東秀之・垣内洋平・嶋村綾子・浜田千年・福島友香・山口久が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成4年3月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測は垣内・福島、図面トレースは北原清子が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本 文 目 次

1.はじめ	31
2.調査概要	32
1) 調査方法と経過	32
2) 基本層序	32
3) 検出構造と出土遺物	33
3.まとめ	35

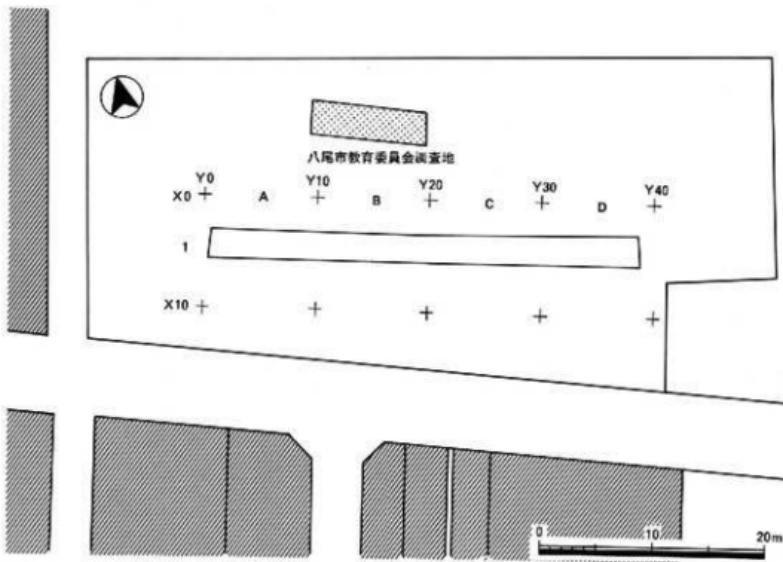
V 恩智遺跡第6次調査（O J91-6）

1. はじめに

恩智遺跡は、生駒山地西麓に形成された扇状地末端から河内低平地にかけて広がる旧石器時代から鎌倉時代に至る複合遺跡で、現在の行政区画では八尾市恩智北町・恩智中町・恩智南町一帯にあたる。

今回の調査地点である八尾市恩智北町2丁目169一帯は、恩智遺跡範囲の北部に位置しており、調査地の南側に隣接する道路部分では、当調査研究会が平成3年11月に排水路改修工事に伴って発掘調査（O J91-5）を実施しており、古墳時代前期から中期に比定される遺構・遺物が検出されている。

今回の発掘調査は、八尾市教育委員会が平成3年11月29日に実施された遺構確認調査で、弥生時代の遺物包含層を検出したことから、発掘調査を実施するに至ったもので、事業者と八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき（財）八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。現地での発掘調査期間は平成3年12月18日から12月21日までの4日間で、調査面積は114m²を測る。



第1図 調査区設定図

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、建物の建築予定地内に東西38m、南北3mのを測る調査区を設定した。調査区の地区割りについては、東西10m、南北10mにわたって設定した。設定した一区画の単位は10m四方で、北西隅を基準点として東西方向はアルファベット(西からA～D)、南北方向は算用数字(1)で示し、地点の表示は1 A区～1 D区と呼称した。掘削に際しては、現地表下0.5～0.7mまでは機械により排除した後、以下0.1～0.2mに付いては層理にしたがって人力掘削を実施した。その結果、現地表下0.7～1.0m(標高11.70～11.20m)付近に存在する第11層5Y8/2灰白色細粒砂～中粒砂層上面で、弥生時代中期前葉(畿内第Ⅱ様式)に比定される土坑5基(SK-1～SK-5)・溝1条(SD-1)・小穴1個(SP-1)を検出した。

2) 基本層序

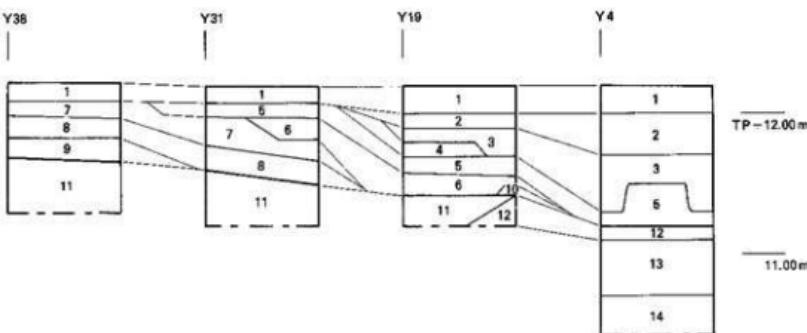
調査地の土層は、旧地形に影響されているためか、第1層が水平堆積である以外は、第2層から第12層にかけては東から西に向かって傾斜堆積しており、調査区内を通して観察できる土層は第1層のみであった。ここでは、14層を抽出して基本層序とした。

第1層 10BG5/1青灰色細粒砂。耕土。層厚0.15前後。

第2層 5Y8/3淡黄色粗粒砂。層厚0.1～0.3m。調査区の中央部から西部に存在する。西側に行くに従って層厚が漸増する。

第3層 5Y7/2灰白色細粒砂～中粒砂。層厚0.1～0.5m。調査区の中央部から西部に存在する。調査区の西部では第5層を切り込んでいる。

第4層 10YR6/1褐灰色細粒砂～中粒砂。層厚0.1m。調査区の中央部のみに存在する。



第2図 基本層序模式図

- 第5層 N4/6灰色細粒砂。層厚0.1~0.3m。東部から西部にかけて傾斜堆積している。弥生時代中期前葉の遺物を少量含んでいる。
- 第6層 2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂~小砾。層厚0.2m。調査区の中央部のみ存在する。
- 第7層 5Y8/1灰白色細粒砂~中粒砂。層厚0.1~0.5m。調査区の東部から中央部にかけて存在する。
- 第8層 2.5Y7/2灰黄色細粒砂。層厚0.1~0.2m。調査区の東部から中央部にかけて存在する。
- 第9層 5Y8/3淡黄色細粒砂。層厚0.1m前後。調査区の東部のみに存在する。
- 第10層 2.5Y7/1灰白色粘土。層厚0.1m。調査区西部のみに存在する。
- 第11層 5Y8/2灰白色細粒砂~中粒砂。層厚0.5m以上。調査区の東部から西部にかけて存在する。上面が遺構検出面。
- 第12層 10BG6/1青灰色粘質土。層厚0.1m前後。調査区の西部のみに存在する。
- 第13層 10BG5/1青灰色粘土。層厚0.4m。
- 第14層 N3/0暗灰色粘土。層厚0.3m以上。

3) 検出遺構と出土遺物

土坑（SK）

SK-1

調査区の東端で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.55m、南北幅0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は灰色極細粒砂である。遺物は弥生土器の小破片が2点出土しているが器種等は不明である。

SK-2

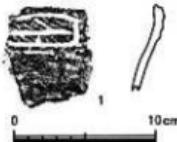
1C・D区で検出した。南部が調査区外のため全容は不明である。検出部分で東西幅2.2m、南北幅1.25m、深さ0.2mを測る。埋土は明青灰色粘質土である。遺物は弥生土器の小破片が5点出土しているが器種等は不明である。

SK-3

SK-2の北東部で検出した。北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.8m、南北幅0.4m、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰色極細粒砂（炭を多量に含む）である。遺物は弥生土器の小破片が4点出土しているが器種等は不明である。

SK-4

1C区の西部で検出した。上面の形状が橢円形を呈するもので、長径幅1.15m、短径幅0.6m、深さ0.07mを測



第3図 SK-4 出土縄文土器

る。埋土は灰色極細粒砂である。遺物は弥生時代中期前葉に比定される土器類が少量出土したほか、縄文時代後期前葉の中津式に比定される深鉢の小破片（1）が1点出土している。（1）は口縁部が内側に拡張する深鉢の口縁部片である。施文は、繩文を施した後、横位の直線と曲線を深い沈線で区画している。内面はナデ調整が施されている。焼成は良好で、色調は暗褐色である。生駒西麓産の土器である。

SK-5

1B区の東部で検出した。上面の形状が円形を呈するもので、径0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色極細粒砂である。遺物は出土しなかった。

溝（SD）

SD-1

1D区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出部分で幅1.6m、深さ0.5mを測る。埋土は灰色粘質シルトである。遺物は弥生時代中期前葉に比定される壺の小破片が4点と甕底部（9）が出土している。（9）は上げ底の底部から、体部が上外方に伸びるもので底径6.2cmを測る。調整は、底部外面および側面はナデ、底部内面は指頭圧痕が遺存している。体部外面はヘラミガキ、内面はナデを施す。焼成は良好で、色調は内面が灰褐色、外側が淡褐色である。生駒西麓産の土器である。

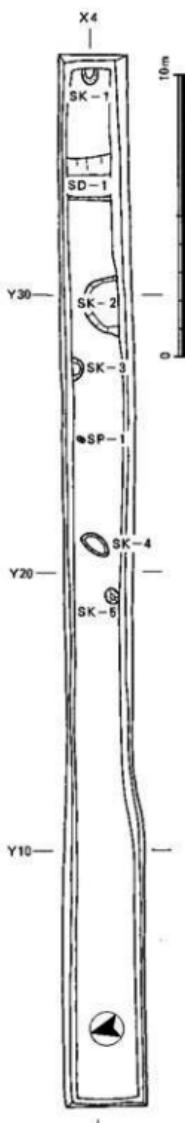
小穴（SP）

SP-1

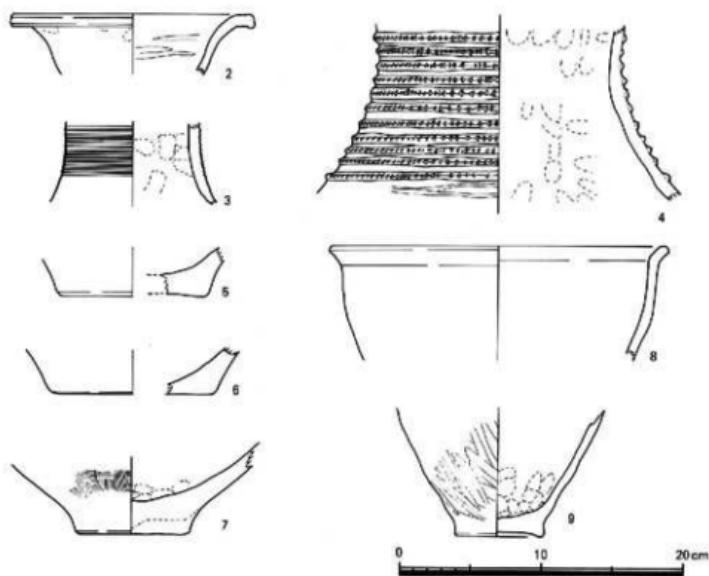
1C区で検出した。上面の形状が楕円形を呈するもので、長径0.25m、短径0.15m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色極細粒砂である。遺物は出土しなかった。

4) 遺構に伴わない出土遺物

遺構以外からの出土遺物としては、1B区の第5層から少量の土器類とサヌカイトの剥片が数点出土している。土器類は弥生時代中期前葉（畿内第II様式）に比定されるものが大半で、そのうち図示し得たものは7点（2～8）である。（2）はラッパ状に開く長頸の広口壺の口縁部片である。調整は口縁部内外面および頸部外面ヨ



第4図 検出遺構平面図



第5図 第5層出土遺物実測図

コナデ、頸部内面はヘラミガキを施す。焼成は良好で、色調は淡褐色である。(3)は(2)と同様、長頸の広口壺の頸部である。頸部外面に多數条のヘラ描沈線文を施文している。焼成は良好で、色調は褐色である。(4)は肩部から外反して伸びる頸部を持つ大型広口壺である。頸部外面に、端面に刻目を加えた貼付突帯を水平方向に付けるもので、11条が遺存していた。焼成は良好で、色調は明褐色である。(5・6)は壺の底部である。ともに、焼成は良好で、色調は(5)が淡褐色、(6)が淡灰褐色である。(7)は壺の底部で、底径7.2cmを測る。調整は体部下半の一部にハケナデが施されている。焼成は良好で、色調は明褐色である。(8)は内湾気味に伸びる体部から、上外方へ外折する口縁部が付く壺である。調整は口縁部内外面および体部内外面にナデを施す。焼成は良好で、色調は内面が淡黄褐色、外面が淡灰褐色である。(2～8)はいずれも、胎土中に長石、石英、黒雲母、角閃石が多量に含まれており生駒西麓部で生産されたものである。

3.まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代中期前葉（畿内第II様式）に比定される遺構・遺物が検出さ

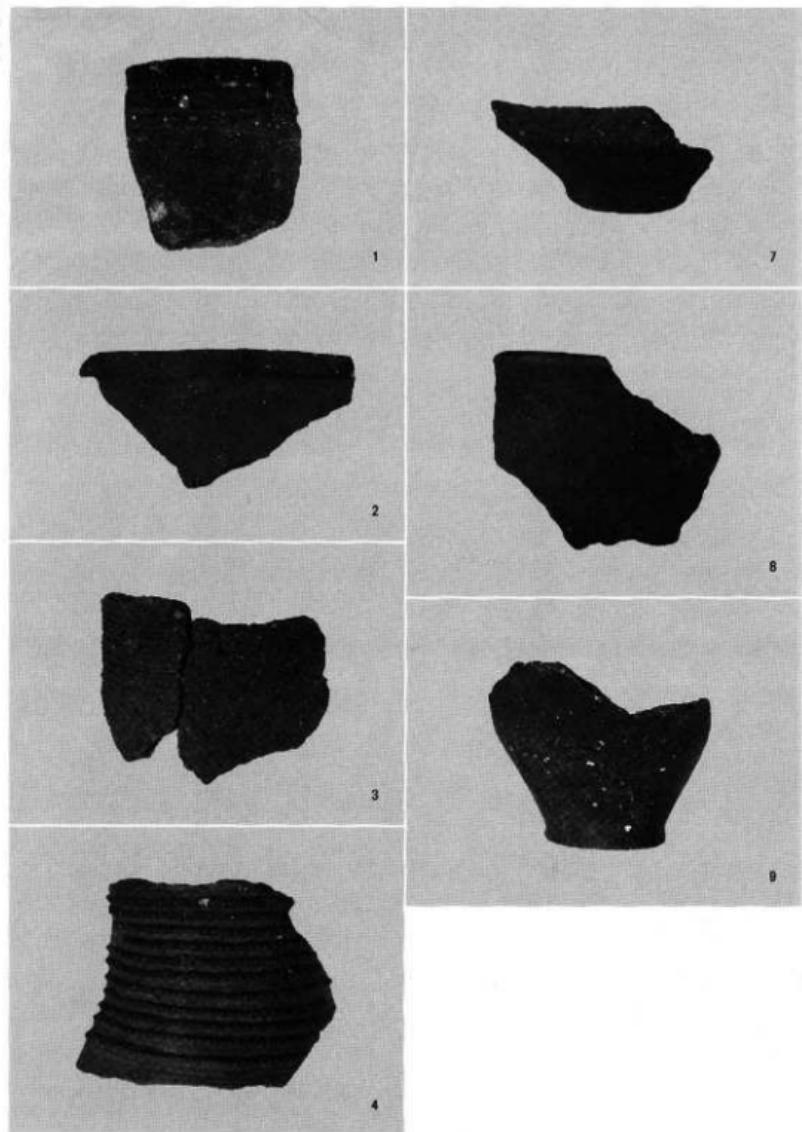
れたほか、近接する市教育委員会の調査地においては弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式—新段階）の遺構が検出されている。弥生時代前期と中期前葉の集落については、調査地の西約150mで昭和50年に瓜生堂遺跡調査会が恩智川改修工事に伴って実施された発掘調査^{註1}で検出されており、今回の調査成果を含めて、この時期の集落が広範囲にわたって存在することが確認された。また、1点のみではあるが縄文時代後期前葉に比定される中瀬瀬戸内地方の中津式の深鉢片が出土しており、付近に集落の存在が示唆されるとともに、当時の地域間の活発な交流がうかがわれる。

註記

- 註1 瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ』1980
瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡Ⅲ』1981



調査区全景（西から）



SK-1 (1)、第5層 (2~4・7・8)、SD-1 (9) 出土遺物

VI 中田遺跡第7次調査（N T91-7）

大西文子

例　　言

1. 本書は、八尾市八尾木北3丁目340番、341番地で実施した店舗付共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第7次調査（NT91-7）の発掘調査の業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が奥田秀夫氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地発掘調査は平成3年5月17日から5月27日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は90m²を測る。なお、調査においては真柄竜・垣内洋平・沖田純一が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成4年3月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測は北原清子・沢村妙子、図面トレースは北原が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	39
2. 調査概要.....	39
1) 調査方法と経過.....	39
2) 基本層序.....	41
3) 検出遺構と出土遺物.....	42
4) 遺構に伴わない遺物.....	45
3.まとめ.....	45

VI 中田遺跡第7次調査（NT91-7）

1. はじめに

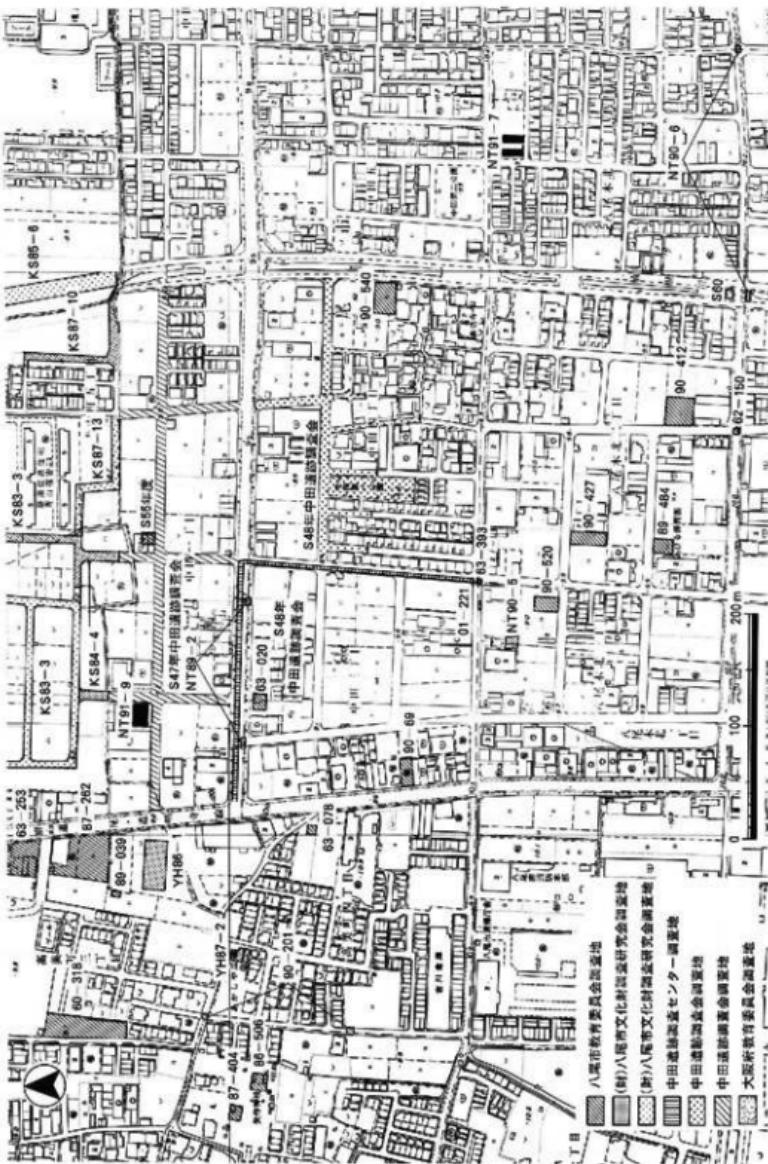
中田遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地に位置する弥生時代前期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では中田1～6丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目の東西約1.1m南北約0.8mがその範囲とされている。

今回の発掘調査は、八尾市教育委員会が平成2年11月5日に八尾市八尾木北3丁目340番・341番地で実施した遺構確認調査で、古墳時代の遺物を含む土層を確認したことから、発掘調査に至ったもので、事業者と八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会との間でとりかわした三者協定に基づき(財)八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。現地発掘調査の期間は平成3年5月17日から5月27日までの9日間で、調査面積は90畝を測る。内業に係る業務は、現地発掘調査終了後実施し、平成4年3月31日をもって終了した。

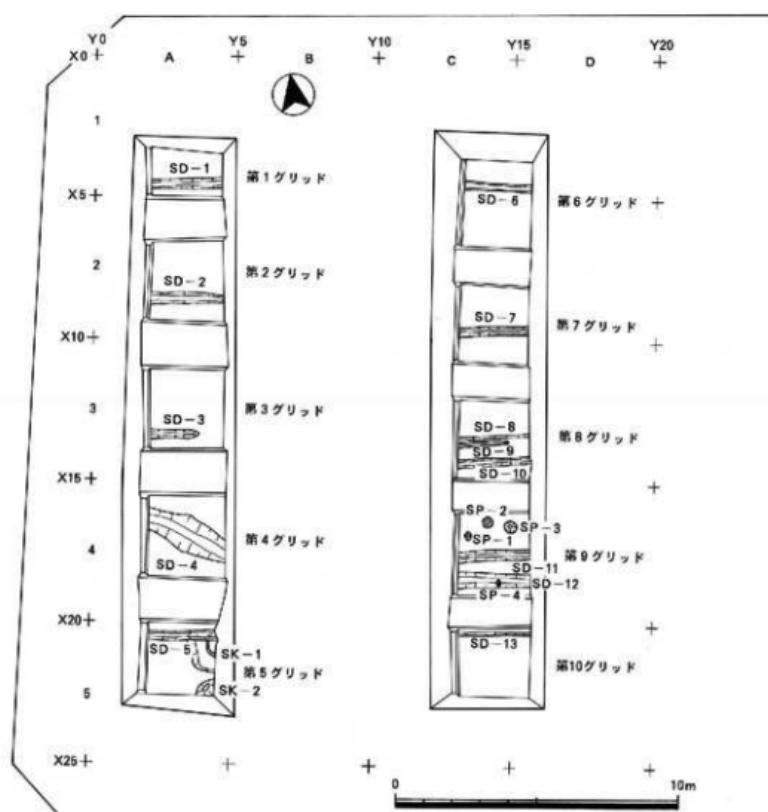
2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は店舗付共同住宅の建設に伴うもので、建物の基礎部分を調査対象とした。調査では、南北方向に4×20m規模のトレンチ2本（東トレンチ・西トレンチ）を設定した。両トレンチともに、重機により表下1.2～1.4m前後を掘削した後、基礎部分に合わせて3×3m規模のグリッドを10ヶ所（西トレンチ-第1グリッド～第5グリッド、東トレンチ-第6グリッド～第10グリッド）設定した。グリッド内は層理に従って人力掘削を実施し、遺構・遺物の検出に務めた。その結果、表上下1.4m前後（標高8.8m前後）付近に存在する第4層明吉灰色シルト上面で、古墳時代前期（布留式新相）に比定される遺構・遺物を検出した。検出した遺構は第1グリッド-溝1条（SD-1）、第2グリッド-溝1条（SD-2）、第3グリッド-溝1条（SD-3）、第4グリッド-溝1条（SD-4）、第5グリッド-溝1条（SD-5）・土坑2基（SK-1・SK-2）、第6グリッド-溝1条（SD-6）、第7グリッド-溝1条（SD-7）、第8グリッド-溝3条（SD-8～SD-10）、第9グリッド-溝2条（SD-11・SD-12）・小穴4個（SP-1～SP-4）、第10グリッド-溝1条（SD-13）である。遺物は遺構内および第3層から出土した。遺物の総量はコンテナ箱に1箱程度である。



第1図 調査地周辺図



第2図 調査区設定図および検出造構平面図

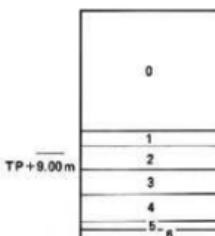
2) 基本層序

第0層 盛上。層厚1m前後。上面の標高はT.P.+10.20
m前後。

第1層 5B G 4／1 暗青灰色極細粒砂。旧耕土。層厚0.1
m前後。

第2層 10B G 6／1 青灰色極細粒砂。床土。層厚0.05～
0.25m。

第3層 5B G 7／1 明青灰色粘質シルト。層厚0.1～0.3



第3図 基本層序模式図

m。古墳時代前期から中世の遺物を少量含む。

第4層 10B G 7／1 明青灰色シルト。層厚0.15m前後。古墳時代前期（布留式新相）の遺構検出面。

第5層 N 7／6 灰白色粘質土。層厚0.1m前後。無遺物層。

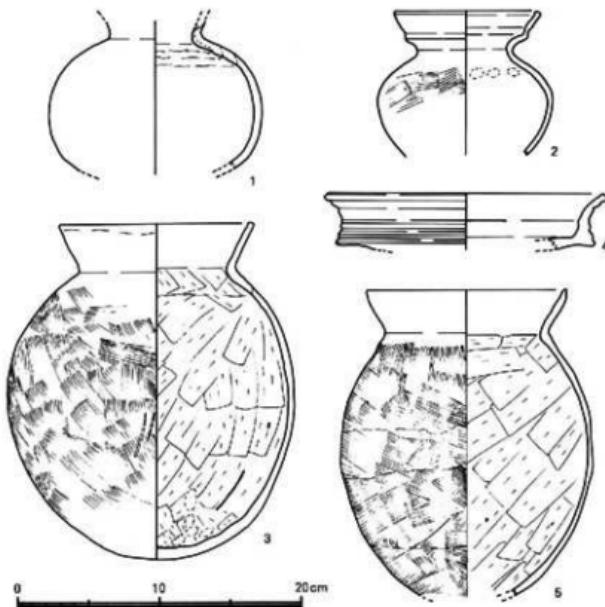
第6層 10Y R 7／4 にぶい黄橙色粘土。層厚0.1m以上。無遺物層。

3) 検出遺構と出土遺物

土坑（SK）

SK-1

第5グリッドの北東部で検出した。北部がSD-5に切られ、東部が調査区外のため全容は不明である。検出部分で東西幅1.4m、南北幅0.9m、深さ0.4mを測る。埋土は上層が褐灰色細粒混じり粘質土で、北東部で一段深くなる部分が灰色粘土である。遺物は灰色粘土から布留式新相に比定される壺2点（1・2）と完形の壺1点（3）が出土した。



第4図 SK-1 (1~3)・第3層 (4・5) 出土遺物実測図

(1) は球形の体部のみが遺存する中型の壺である。体部内外面ともに丁寧なナデが施されている。胎土は砂粒が微量に混じる程度の精良なものである。焼成は良好で、色調は灰白色～淡褐色である。(2) は球形の体部に一段に細曲する口縁部が付く中型の複合口縁壺である。口径10.1cm、体部最大幅12.6cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部外表面は中位に右上がりのハケナデを施す以外はナデ調整を行う。胎土には0.5～1mm人の長石が多量に含まれているほか、赤色酸化土粒・雲母が少量含まれている。焼成はやや不良で、表面の風化が顕著である。色調は黄褐色～赤褐色である。(3) は長胴形の体部を持つ壺である。口径14.0cm、器高23.8cm、体部最大幅20.5cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部外表面は上位から中位下部にかけては乱方向の密なハケナデ、体部下半はナデを施す。体部内面は全面にヘラケズリを施す。胎土には0.5mm人の長石・チャートを少量含む。焼成は良好で、色調は灰白色～淡灰褐色である。外表面全体に煤が付着している。

SK-2

第5グリッドの南東隅で検出した。東部および南部が調査区外のため全容は不明である。検出部分で東西0.65m、南北0.65m、深さ0.4mを測る。埋土は青灰色シルトである。遺物は壺の破片が極少量出土した。

SD-1

第1グリッドの南部で検出した。東西方向に伸びるもので、幅0.3m、深さ0.1m前後を測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は出土しなかった。

SD-2

第2グリッドで検出した。東西方向に伸びるもので、幅0.25～0.37m、深さ0.05m前後を測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は出土しなかった。

SD-3

第3グリッドの南部で検出した。東西方向に伸びるもので、幅0.2～0.25m、深さ0.07mを測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は出土しなかった。

SD-4

第4グリッドで検出した。南東～北西方向に伸びるもので、幅0.68～1.3m、深さ0.2m前後を測る。埋土は上層から灰色粘質シルト・灰色粘質土である。遺物は布留式新棺に比定される壺の破片が少量出土している。

SD-5

第5グリッドの北部で検出した。東西方向に伸びるもので、東部でSK-1の北部を切っている。規模は、幅0.3m、深さ0.1m前後である。埋土は灰白色粘質土である。遺物は壺の破片

が少量出土している。

SD-6

第6グリッドの北部で検出した。東西方向に伸びるもので、幅0.26~0.3m、深さ0.08mを測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は出土しなかった。

SD-7

第7グリッドで検出した。東西方向に伸びるもので、幅0.3m、深さ0.1m前後を測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は出土しなかった。

SD-8

第8グリッドで検出した。東西方向に伸びるもので、北側の肩は調査区外に至るため不明である。検出部分で幅1.4m、深さ0.1mを測る。埋土は明青灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

SD-9

SD-8の南側で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長1.9m、幅0.25m、深さ0.05m前後を測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は上器の破片が極少量出土した。

SD-10

SD-9の南側で検出した。東西方向に伸びるもので、幅0.25m、深さ0.05m前後を測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は壺の破片が極少量出土した。

SD-11

第9グリッドで検出した。東西方向に伸びるもので、幅0.35~0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は土器の破片が極少量出土した。

SD-12

SD-11の南部で検出した。東西方向に伸びるもので、SP-4の上部を切っている。規模は幅0.45m、深さ0.08m前後を測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は出土しなかった。

SD-13

第10グリッドの北部で検出した。東西方向に伸びるもので、流路の方向からみて第5グリッドで検出したSD-5に続くものと推定できる。規模は幅0.2~0.3m、深さ0.1m前後を測る。埋土は灰白色粘質土である。遺物は壺の破片が極少量出土した。

小穴(SP)

小穴は第9グリッドで4個(SP-1~SP-4)を検出した。上面の形状は円形ないしは梢円形を呈する。規模は径0.25~0.5m、深さ0.07~0.42mを測る。埋土はSP-1~SP-3が灰褐色砂質土でSP-4が青灰色粘土である。なお、SP-4には幅0.19m、高さ0.3mを測る柱根が遺存していた。

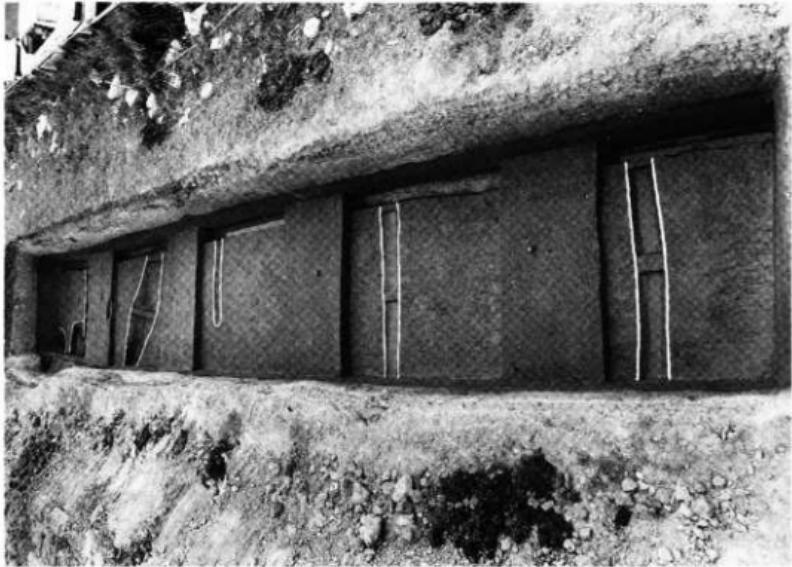
4) 遺構に伴わない遺物

第3層から少量の遺物が出土している。時系列的には、古墳時代前期（布留式期）～中世に比定される土器類であるが、大半が小破片で図示でき得たものは2点（4・5）のみである。

（4）は第3グリッドの第3層から出土した。複合口縁壺の口縁部で、外面下部に凹線が2条巡っている。胎土は、砂粒が微量に混じる程度の精良なものである。焼成は良好で、色調は淡褐色である。（5）は第4グリッドの第3層から出土した。倒卵形の体部を持つ甕である。口縁部内外面はヨコナデ。体部外面は乱方向のハケナデ、内面はヘラケズリを施す。胎土には0.1～0.5mmの大長石・石英・雲母を多量に含んでいる。焼成は良好で、色調は灰白色～淡褐色である。

3.まとめ

今回の調査では、古墳時代前期（布留式新相）に比定される遺構・遺物を検出した。なかでも、第9グリッドで検出した柱根が遺存していたSP-4や第5グリッドで検出したSK-1・SK-2からみて、調査地の南部に居住域に関連した遺構が集中していたようである。一方、東西方向に伸びる溝群は、形状や規模には大差が認められないもので、構築面の土壤から、農耕の中でも畑作に関連した小溝と考えられる。これらの溝によって、第5グリッド・第9グリッドでは居住域に関連した遺構が切られていることから、この付近は、古墳時代前期（布留式新相）の短期間だけ居住域として利用され、その後は生産域に移り変わったようである。



西トレンチ全景（北から）



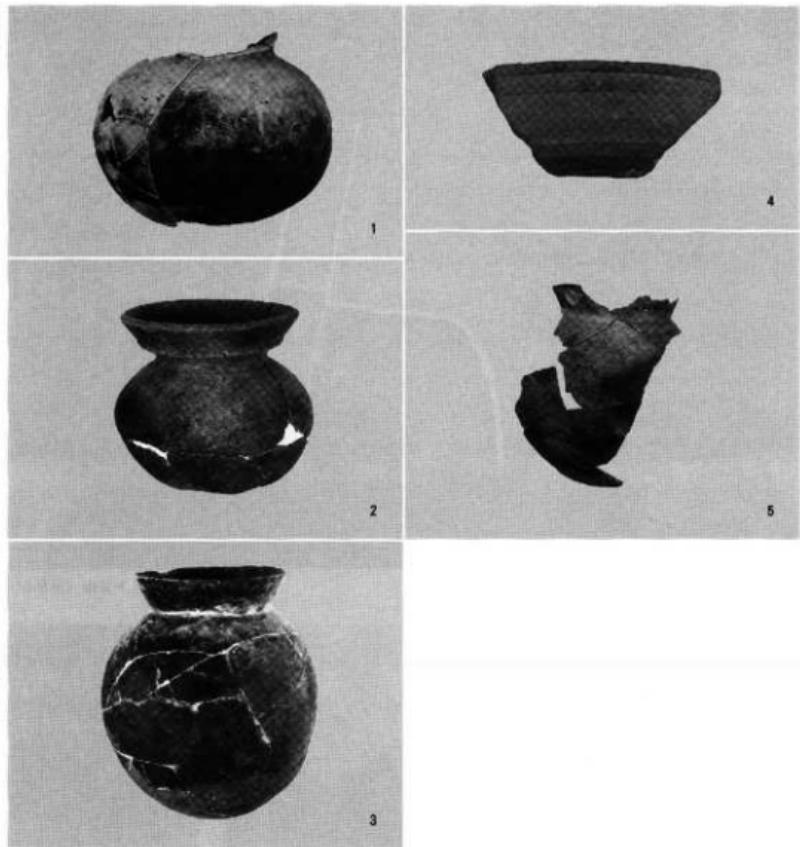
東トレンチ全景（北から）



第5グリッド全景（東から）



第5グリッドSK-1遺物出土状況（東から）



SK-1 (1~3)、第3層 (4・5) 出土遺物

VII 中田遺跡第9次調査（NT91-9）

中田遺跡第9次調査は、1991年9月1日～10月15日、筑波大学考古学研究室の主導により実施された。調査は、前回の調査で発見された複数の土器片や骨器片などの遺物をもとに、これまでの調査結果を踏まえ、より詳細な調査を行った。調査は、主に土器片や骨器片の発見場所を中心とした調査であり、その結果、多くの遺物が発見された。また、調査は、主に土器片や骨器片の発見場所を中心とした調査であり、その結果、多くの遺物が発見された。

中田遺跡第9次調査は、1991年9月1日～10月15日、筑波大学考古学研究室の主導により実施された。調査は、前回の調査で発見された複数の土器片や骨器片などの遺物をもとに、これまでの調査結果を踏まえ、より詳細な調査を行った。調査は、主に土器片や骨器片の発見場所を中心とした調査であり、その結果、多くの遺物が発見された。また、調査は、主に土器片や骨器片の発見場所を中心とした調査であり、その結果、多くの遺物が発見された。

例　　言

1. 本書は、八尾市中田1丁目3番で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第9次調査(NT91-9)の発掘調査の業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が有限会社友田興産から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年12月5日から12月18日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。
面積は294m²を測る。なお、調査においては浅井準子・垣内洋平・鶴村綾子・福島友香・山口久が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成4年3月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測は垣内・福島、図面トレースは北原清子が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1.はじめ	49
2.調査概要	49
1) 調査方法と経過	49
2) 基本層序	50
3) 検出遺構と出土遺物	50
3.まとめ	53
4.出土遺物観察表	54

VII 中田遺跡第9次調査（NT91-9）

1. はじめに

今回の調査地点である八尾市中田1丁目付近一帯は中田遺跡範囲の北西部に位置し、調査地點の西側が矢作遺跡、北側が小阪合遺跡と接続している。この付近一帯では、昭和45年以降、大阪府教育委員会・中田遺跡調査会・八尾市教育委員会・当調査研究会により断続的に発掘調査が実施され、数多くの遺構・遺物が検出されている。そのうちの主な調査成果としては、古墳時代前期では、調査地の南80m地点で当調査研究会が実施した調査（NT89-3）で居住域が確認されているほか、調査地の北西約260m地点の矢作遺跡内で八尾市教育委員会が実施した調査では、小型銅鏡が1面出土している。古墳時代後期の遺構は、前述した八尾市教育委員会の調査地で豪族の居館と考えられる大型の孤立柱建物が3棟検出されている。平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、調査地の西約100m地点の矢作遺跡内で当調査研究会が実施した調査（YII86-1）で居住域が検出されているほか、調査地の南東部に隣接する地点で中田遺跡調査会が実施した調査でも、この時期の遺構が検出されている。

今回の発掘調査は、前述した調査地に接続した八尾市中田1丁目3番地、八尾市教育委員会が平成3年11月15日に実施した遺構確認調査で、鎌倉時代の遺物を含む土坑状遺構を検出したことから、発掘調査を実施するに至ったものである。発掘調査は、事業者と八尾市教育委員会と（財）八尾市文化財調査研究会との間でとりかわした三者協定に基づき（財）八尾市文化財調査研究が事業者から委託を受けて実施した。現地での発掘調査の期間は平成3年12月5日から12月18日までの11日間で、調査面積は294㎡を測る。

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、建物の建築予定地に東西幅21m、南北幅14mの調査区を設定した。調査区の地区割りについては、東西20m、南北15mにわたって調査区を設定した。設定した一区画の単位は5m四方で、北西隅を基準点として東西方向はアルファベット（西からA～D）、南北方向は算用数字（北から1～3）で示し、地区的表示は1A区～3D区と呼称した。地点の表示については、東西軸X（X0～X15）、南北軸Y（Y0～Y20）と設定し、X軸とY軸の交点の数値で示した。調査の方法は、試掘結果に基づいて表土下1.2m前後までを機械掘削した後、以下0.2m前後については層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に務めた。その結果、表下1.4m前後（標高8.4m前後）に存在する第5層明黄褐色細粒砂上面で、鎌倉時代に比定される溝1条（SD-1）・小穴4個（SP-1～SP-4）

4)・上坑2基（SK-1～SK-2）と江戸時代に比定される溝12条（SD-2～SD-13）を検出した。また、第5層上面の調査終了後、幅1m深さ1m前後のトレンチを東西方向に2本設定して、下層確認調査を実施した。その結果、現地表下2m地点で自然河川と推定される粗砂の広がりが調査区のほぼ全域にわたって確認された。自然河川からは弥生時代後期の上器片が少量出土している。遺物の総量は遺構、包含層、下層調査を合わせてコンテナ箱に1箱程度である。

2) 基本層序

第0層 盛土。層厚0.9m前後。上面の標高はT.P

+9.3m前後。

第1層 10B G6/1青灰色細粒砂。旧耕土。層厚0.1

5m前後。

第2層 10B G7/1明古灰色極細粒砂。床土。層厚

0.1m前後。

第3層 N8/0灰白色細粒砂。層厚0.1m前後。古墳

時代中期と鎌倉時代以降の遺物を少量含む。

第4層 N6/0灰色細粒砂。層厚0.15m前後。古墳時

代中期から鎌倉時代に至る遺物を少量含む。

第5層 10Y R7/6明黄褐色極細粒砂。層厚0.15m

前後。上面が鎌倉時代と江戸時代の遺構檢

出面。古墳時代中期の遺物を極少量含む。

第6層 5Y R5/6明赤褐色シルト。層厚0.1～0.2m。

第7層 N8/0灰白色粘質シルト。層厚0.15～0.3m。

第8層 N7/0灰白色中砂～小礫。層厚1m以上。

河川堆積上。弥生時代後期の遺物を少量含む。

3) 検出遺構と出土遺物

1. 鎌倉時代

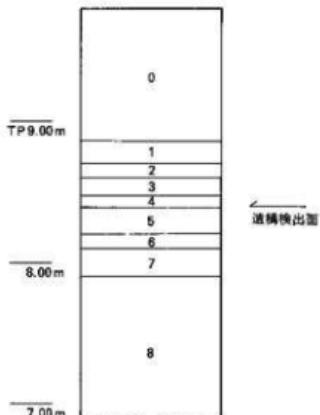
土坑（SK）

SK-1

調査区の北東部で検出した。東部と西部がSD-3・SD-4により切られており全容は不明である。検出部分で東西幅0.8m、南北幅1.3mを測る。埋土は明緑灰色極細粒砂である。

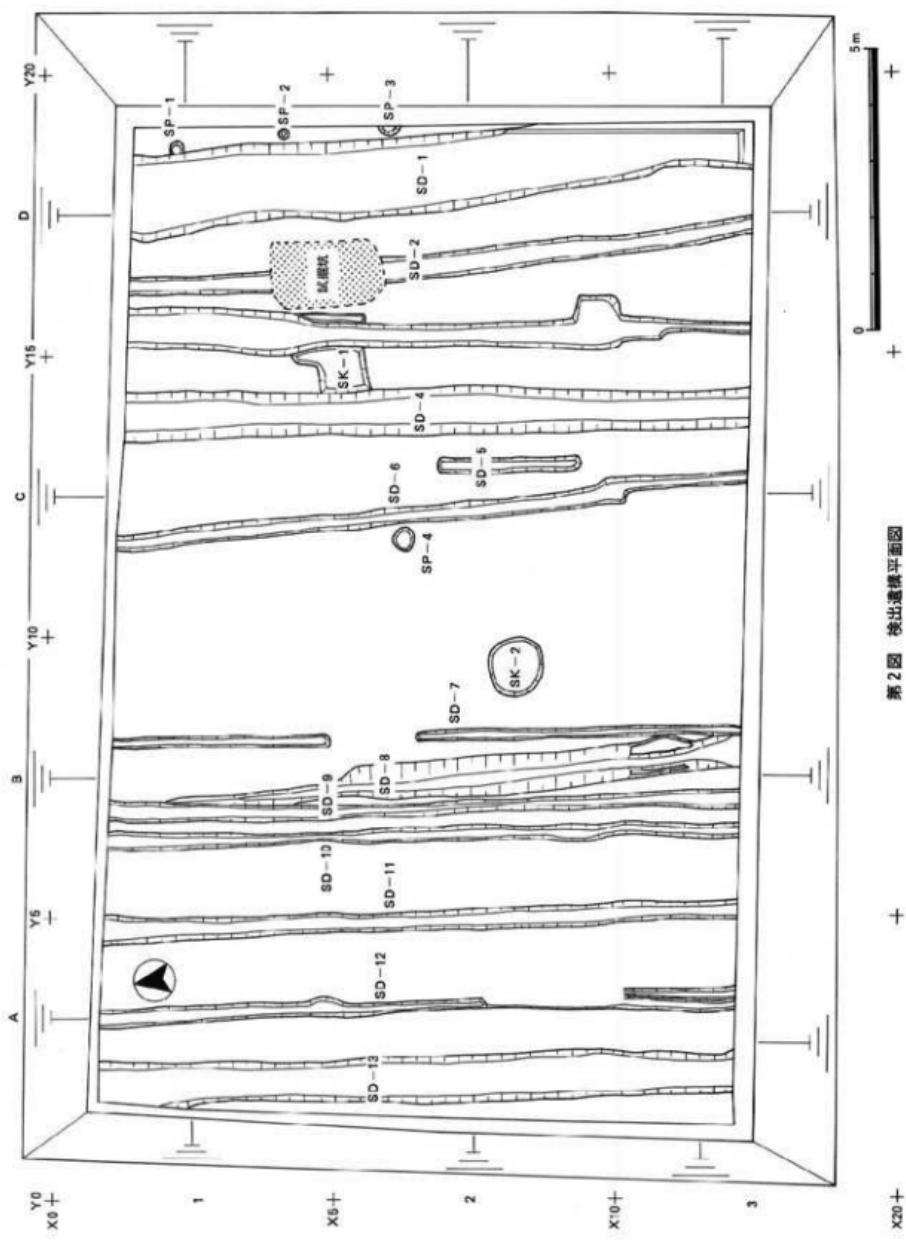
SK-2

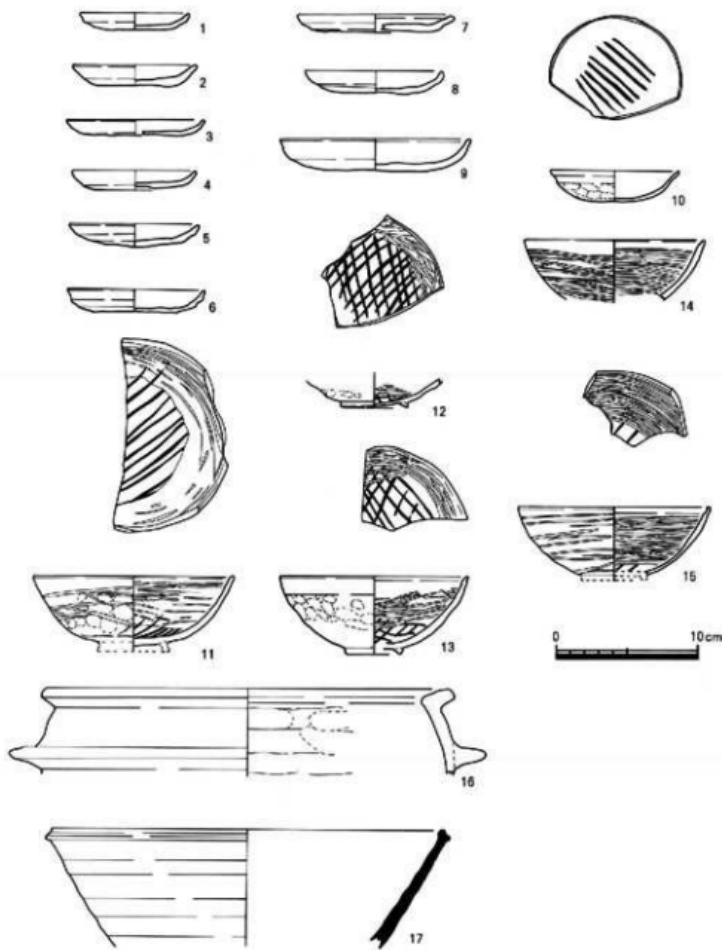
調査区の中央部で検出した。上面の形状が円形を呈するもので、東西幅1.0m、南北幅0.95m、深さ0.05mを測る。埋土は明緑灰色極細粒砂である。遺物は瓦器碗の小破片が極少量出土



第1図 基本層序模式図（1/40）

第2図 検出道路平面図





第3図 SD-1出土遺物実測図

している。

溝（SD）

SD-1

調査区の東端で検出した。東西方向に伸びるもので、幅1.35m、深さ0.3mを測る。埋土は

上層から第1層明緑灰色極細粒砂・第2層灰白色粘質土・第3層灰白色粘土（炭が多量に混じる）・第4層灰色細粒砂～粘土である。遺物は第3層から鎌倉時代に比定される土師器小皿（1～8）・中皿（9）・土釜（16）・須恵器鉢（17）・瓦器椀（11～15）・瓦器小皿（10）等が出土している。

小穴（S P）

小穴は4個（S P-1～S P-4）を検出した。S P-1～S P-3は上面の形状が円形を呈するもので、径0.2m前後、深さ0.2m前後を測る。S P-1に柱根が遺存していることから、S P-1～S P-3は掘立柱建物を構成する柱穴と考えられるもので、柱間の規模はS P-1とS P-2の柱間が1.95m、S P-2とS P-3の柱間が1.9mを測る。S P-4は上面の形状が円形を呈するもので、径0.4m、深さ0.15mを測る。

2. 江戸時代

溝12条（S D-2～S D-13）を検出した。いずれも南北方向に伸びるもので幅0.3～0.8m、深さ0.05～0.1mを測る。なお、S D-8からS D-12については、一本の大溝の底部から切り込まれているもので、他の溝遺構とは切り込み面のレベル高が低い。溝断面の形状は、大半が浅いU字溝であるが、S D-8のみがV字溝である。埋土は明緑灰色極細粒砂～粘質シルトである。遺物はS D-2、S D-3、S D-4、S D-6、S D-8、S D-13から須恵器杯身・高杯、土師器小皿・土釜、瓦器椀、国産陶磁器の小破片が少量出土した。また、S D-11からは寛永通宝（初鋤1636）が1点出土している。

3.まとめ

今回の調査では、鎌倉時代の土坑2基（SK-1・SK-2）、溝1条（S D-1）、小穴4個（S P-1～S P-4）と江戸時代の溝12条（S D-2～S D-13）を検出した。鎌倉時代の遺構については、調査地の南東部に隣接した地点で中田遺跡調査会が昭和47年度に実施された発掘調査（中田遺跡北区－第3地区）で、この時期の集落跡が検出されていることから、これらの遺構もこの集落に伴うものと考えられる。また、調査地の西100m地点で当調査研究会が実施した発掘調査（Y H 86-1）においても、この時期の集落が検出されている。一方、江戸時代に比定した溝12条については、形状や内部堆積土からみて農耕に関連した小溝と推定されよう。

註記

註1 中田遺跡調査会『中田遺跡<北区>発掘調査概要』1973

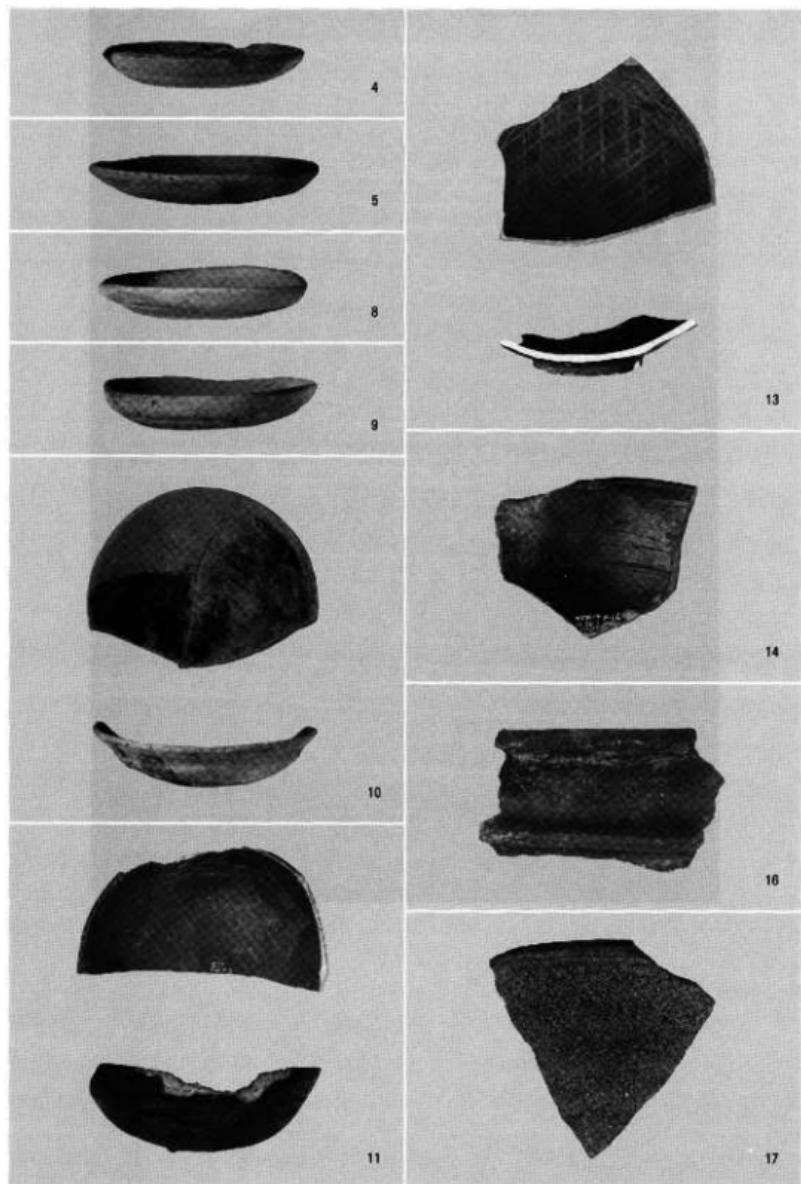
註2 〈財〉八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告22 1989

4. 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口徑 法量・器高	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考 焼成状況
1	土師器 小皿	(7.6) (1.2)	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。 底部内外面ナデ。	赤褐色～ 灰白色	密	良好	1/4
2	土師器 小皿	(8.7) 1.5	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。 底部内外面ナデ。	淡黄褐色	密	良好	1/4
3	土師器 小皿	9.6 1.1	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。 底部内外面ナデ。	黄褐色	密	良好	1/4
4	土師器 小皿	8.6 1.4	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。 底部内外面ナデ。	淡灰色	密	良好	完形
5	土師器 小皿	9.0 1.6	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。 底部内面ナデ。底部外側弱いナデ。	灰白色	密	良好	完形
6	土師器 小皿	9.6 1.6	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。 底部内面ナデ。底部外側に粘土結合痕 遺存。	黄褐色	密	良好	完形
7	土師器 小皿	(10.7) 1.2	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。 底部内外面ナデ。	灰白色	密	良好	1/4
8	土師器 小皿	9.6 1.6	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。 底部内面ナデ。底部外側弱いナデ。	灰白色	密	良好	完形
9	土師器 中皿	(13.9) 2.2	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。 底部内外面ナデ。	黄褐色	密	良好	1/4以上
10	瓦器 小皿	9.2 2.1	口縁部内外面ヨコナデ。体部外側およ び底部は指頭圧成形後、ナデ。見込み 平行線状ヘラミガキ(18本)を施す。	白灰色	密	良好	器體面の風 化顯著 1/4以上
11	瓦器 碗	14.2 —	体部外側指頭圧成形後、ヘラミガキを 粗く施す。体部内面単位の不明瞭なヘ ラミガキを全体に施す。見込みに平行 線状ヘラミガキ(10本)を施す。	灰黒色	やや粗	良好	1/4
12	瓦器 碗	— — 高台径4.9 高台径5.0	体部外側指頭圧成形後、高台部ナデ。 体部内面単位はヘラミガキ。見込み格子 状ヘラミガキ。	灰黒色	密	良好	
13	瓦器 碗	(13.5) 5.4	口縁部内外面ナデ。体部外側指頭圧成 形後ナデ。体部内面滑なヘラミガキ。 見込み格子状ヘラミガキ。	灰黒色	やや粗	良好	1/4
14	瓦器 碗	(12.8) —	体部外側に刷幅のヘラミガキを粗く施 す。体部内面のヘラミガキは密である。	灰黒色	密	良好	大和型 1/4
15	瓦器 碗	(13.6) —	体部外側に細幅のヘラミガキを粗く施 す。体部内面のヘラミガキは密である。 見込みに3条のヘラミガキを認めるが、 文様は不明である。	灰白色	密	良好	炭素付着 不良。大和 型 1/4
16	土師器 土釜	(28.8) — 鉄鋤(34.2)	マキアゲ成形。口縁部および跨部ヨコ ナデ。体部内面ナデ。	淡褐色～ 褐灰色	やや粗 1mm大の 長石を散 見する	良好	鉄裏面に煤 付着 1/4
17	須恵器 鉢	(28.2) —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外 面および体部内外面同軸ナデ。	青灰色	やや粗	堅板	口縁部外面 重ね燒成 東播系 1/4



調査区全景（西から）



SD-1 出土遺物

VIII 水越遺跡第4次調査(MK91-4)

水 越 遺 蹟

例　　言

1. 本書は、八尾市服部川475-4で実施した流量圧力調整弁設置工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する水越遺跡第4次調査(MK91-4)の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市水道局から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年2月24日～2月28日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は40m²である。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－村田英子・西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

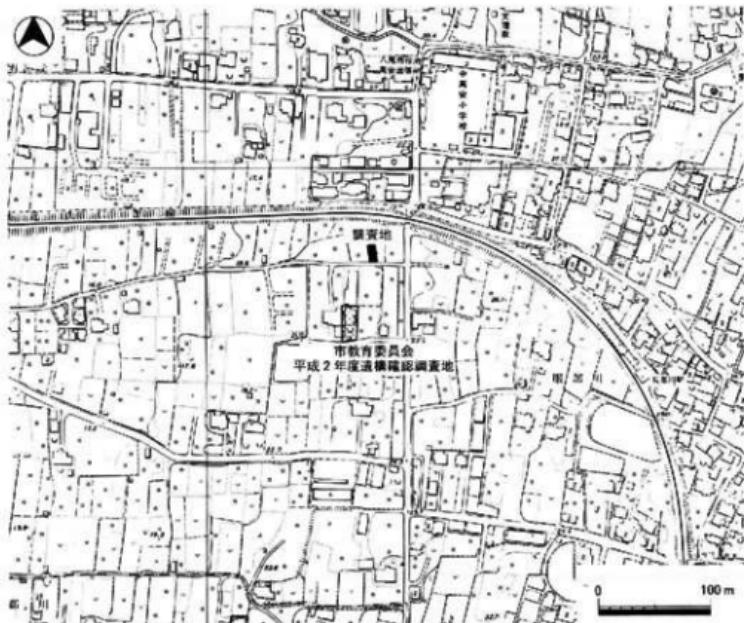
1.はじめに.....	57
2.調査概要.....	58
1) 調査の方法と経過.....	58
2) 基本層序.....	58
3) 検出遺構と出土遺物.....	60
4) 出土遺物観察表.....	64
3.まとめ.....	64

VIII 水越遺跡第4次調査(MK91-4)

1. はじめに

水越遺跡は、八尾市の北東部に所在する水越・千塚一帯に亘る縄文時代から中世に至る複合遺跡である。

当遺跡の地形は、生駒山地西麓の尾根から西に広がる扇状地（標高12～55m）にあたり、東西に幾筋かの小高い丘陵地が形成された上に立地する。その西側には河内平野が広がっている。当遺跡と同一扇状地には、南に郡川遺跡・恩智遺跡、北に大竹遺跡・太田川遺跡・薬音寺遺跡・花岡山遺跡などの遺跡が連接している。また、古墳時代に築造された墳墓が現在でも多数残存している地域である。代表的なものをあげると、前期では西の山古墳・向山古墳・花岡山古墳、中期では心合寺山古墳・鏡塚古墳・中谷山古墳、後期では郡川東塚遺跡・郡川西塚古墳、終末期に入ると群集墳で知られる。高安古墳群をはじめとし、柏原市の大県古墳群・平尾山古墳群



第1図 調査位置図

が存在する。

当遺跡の発見の契機は、大正9年に清原得巣氏が石器を採集したことと、昭和9年に東高野街道の道路改修工事の際、地表下約0.6mの上層（黒褐色土）内から弥生時代後期に比定される土器が発見されたことである。

本格的な調査が実施されたのは、昭和53年度府立清友高等学校新設工事に伴う発掘調査である。その調査結果では縄文時代から鎌倉時代に亘る遺構・遺物が検出された。その後、昭和57年3月千塚で、八尾市教育委員会が八尾市消防署北東部主張所新設工事に伴う発掘調査を実施し、弥生時代中期～古墳時代前期の遺物が出土した。また、同年11月に当調査研究会が実施した第1次調査（MK82-1）では、弥生時代前期の河川跡、古墳時代前期（庄内式期）の土坑を検出している。さらに平成元年度に実施した第2次調査（MK89-2）では弥生時代後期の河川跡、第3次調査（MK89-3）では、弥生時代中期の環濠集落と思われる遺構を検出している。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査地は服部川475-4に所在し、当遺跡範囲内の南部に位置する。近接調査では平成2年度に八尾市教育委員会が実施した遺構確認調査で、弥生時代後期の遺構・遺物が確認されている（この調査地より北東へ約40mのところが今回の調査地である）。

今回の発掘調査は、八尾市水道局の流量圧力調整弁設置工事に伴うものである。現地調査は、平成4年2月24日～2月28日までの期間で実施した。調査は当調査研究会が当遺跡内で実施した第4次調査にあたり、調査面積は40m²である。

調査では、埋設工事で破壊される部分を対象として東西4m×南北10mのトレンチを設定した。掘削については、現地表下約0.8mまでの土層を機械掘削した後、以下の土層については手掘りによる掘削・精査を実施した。

調査地の区割は、調査区の南部中央に任意の点を設定し、これを起点として磁北の主軸方向に合わせ記録図面を作成した。

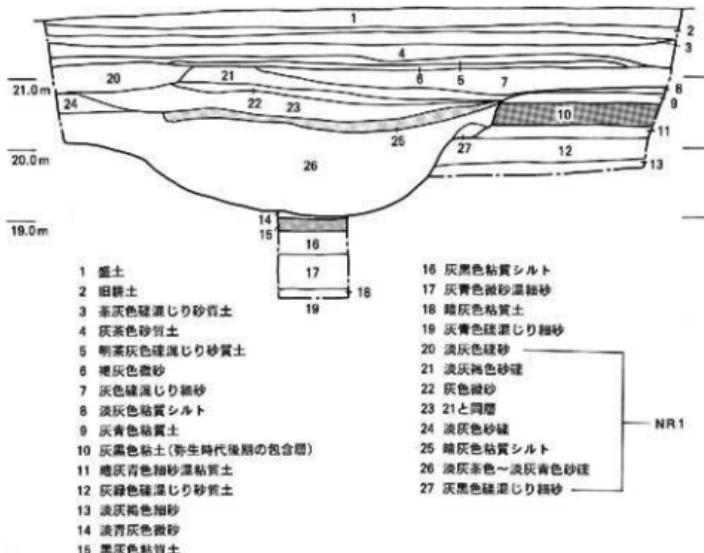
2) 基本層序

当調査区では、現地表面から約4.0mまでに存在する土層内から普遍的に見られる19層を抽出して基本層序とした。現地表高は標高約21.9mである（第2図）。

第1層 盛土。層厚5～25cm。整地された土層である。

第2層 IH耕土。層厚5～20cm。近年までの耕作土である。

- 第3層 茶灰色疊混じり砂質土。層厚20~25cm。この層は近世以降に耕作地として整地された上層と考えられる。
- 第4層 灰茶色砂質土。層厚10~20cm。この層も第3層と同様、近世以降に耕作地として整地された土層と考えられる。
- 第5層 明茶灰色疊混じり砂質土。層厚10~15cm。近世以前の耕作土である。調査区の南で途切れている。
- 第6層 褐灰色微砂。層厚5~10cm。調査区の中央部分に存在する層で、南と北で途切れている。
- 第7層 灰色疊混じり細砂。層厚10~20cm。調査区南部に堆積する層で、河川(NR-1)の堆積土と考えられる。
- 第8層 淡灰色粘質シルト。層厚10~20cm。酸化鉄の斑点がみられる。
- 第9層 灰青色粘質土。層厚20~30cm。上位に淡灰色微砂が薄く堆積し、酸化鉄の斑点が若干みられる。
- 第10層 灰黒色粘土。層厚25~30cm。弥生時代後期の遺物を含む土層である。
- 第11層 暗灰青色細砂混粘質土。層厚10~20cm。弥生時代後期のベース面である。

第2図 東壁断面図 ($S = 1/80$)

第12層 灰緑色疊混じり砂質土。層厚30~40cm。5~10cmの礫が少量含む。

第13層 淡灰褐色細砂。層厚25~30cm。

第14層 淡青灰色微砂。層厚10~15cm。

第15層 黒灰色粘質土。層厚20~25cm。炭化した有機物が含まれる。

第16層 灰黒色粘質シルト。層厚25~30cm。

第17層 灰青色微砂混細砂。層厚40~50cm。

第18層 暗灰色粘質土。層厚10~15cm。

第19層 灰青色疊混じり細砂。層厚5cm以上。

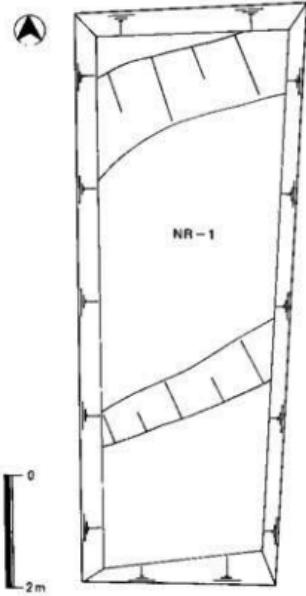
以上、当調査区内の基本層序である。このうち、第7層と第20層~第26層は古墳時代後期から奈良時代の自然河川(NR-1)の堆積土である。第10層は弥生時代後期の遺物包含層で、その下の第11層上面がベース面と考えられる。

3) 検出遺構と出土遺物

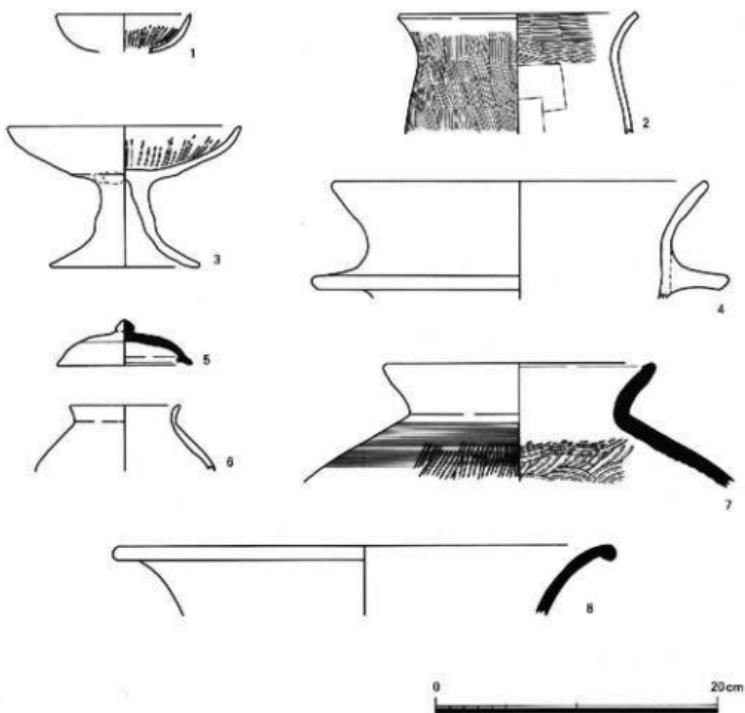
調査の結果、弥生時代後期の包含層、古墳時代後期から奈良時代に比定される自然河川(NR-1)1条を検出した。

NR-1

調査区全体で検出した。方向は調査区内で北東から南西へ流れをもつもので、幅10m以上、深さ1.5mを測る。断面の形状は逆凸形を呈し、北斜面は緩やかで、南斜面は急斜面で切り込んでおり、河川流路の屈曲部分であると考えられる。内部堆積土は第2図に示すように砂礫を基調とし、その間に植物遺体などを多量に含む沈殿層(第25層)が薄く堆積しており、一時平靜な流れがあったことが窺える。この堆積状況から大きく上層(第7層・第20層~第25層)と下層(第26層・第27層)の2つに分かれる。下層では古墳時代後期から奈良時代に比定される遺物が出土しており、出土状況から下層が古墳時代後期、上層が奈良時代に埋

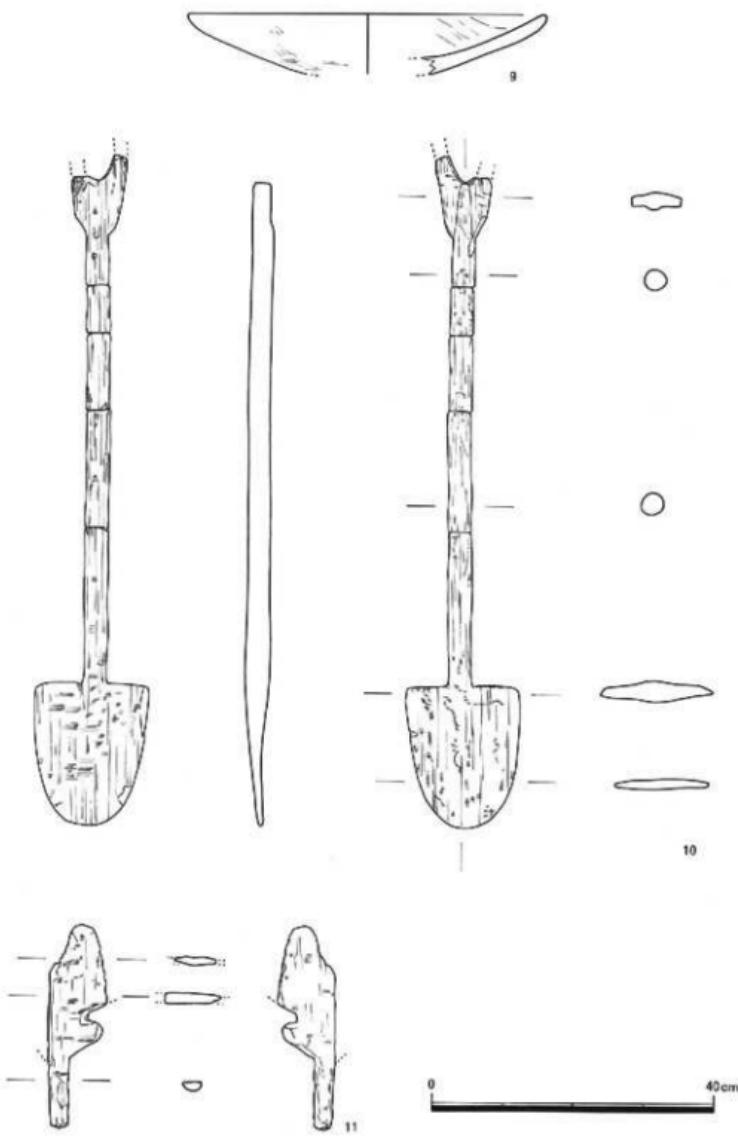


第3図 遺構平面図

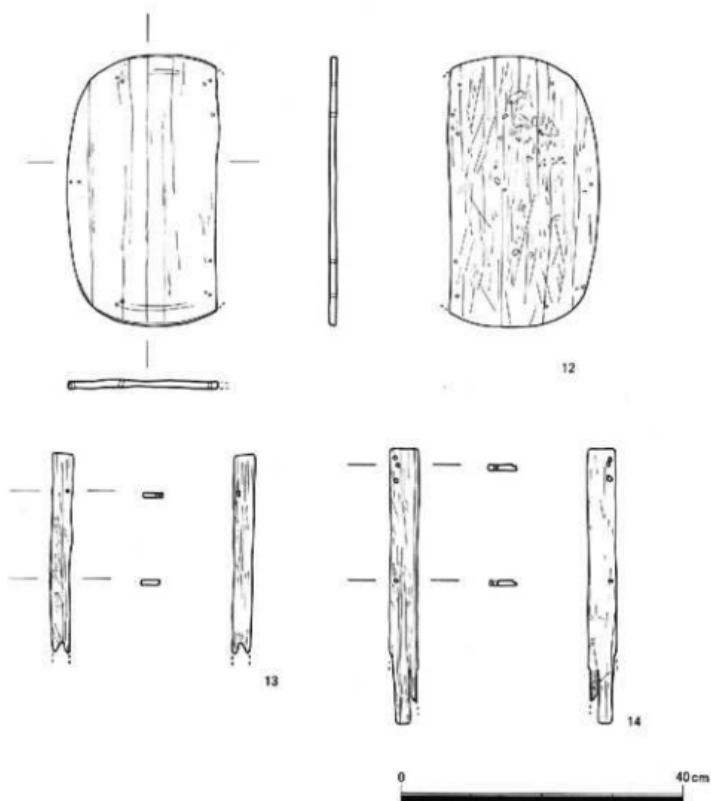


第4図 NR-1出土遺物実測図1

まったくものと考えられる。器種は土師器の壺・壺・鉢・高杯、須恵器の蓋・壺などの小片である。また、第25層内から鋤・皿形容器・容器の底板などの木製品が自然木・植物遺体とともに出土している。図示できたものについて記す。土師器は杯（1）・壺（2）・高杯（3）・羽釜（4）、須恵器は杯蓋（5）・壺（6）・壺（7・8）である。木製品は皿形容器（9）・鋤（10）・二股鋤？（11）・桶状の容器の底板（12）・穿孔のある板材（13・14）である。



第5図 NR-1出土遺物実測図2



第6図 NR-1出土遺物実測図3

4) 出土遺物観察表

遺物番号	基 程	法量 (cm)	口徑 底高	調整・核法等の特徴	色 調	施 土	施成	遺存状況	備 考
1	杯 (土器)	口径 11.5	9.4	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ、体部外面ナゲ、内面ナゲのち暗文。	外 黒灰色～ 明灰色 内 明灰色	0.2mm以下の砂粒を 微量に含む(長石・ 雲母)	良好	口縁部5%	外向に風痕 あり
2	盞 (土器)	口径 16.8		口縁部外面ハケナデ、体部外面ハケナ デ、内面ヘラナデ。	外 淡灰褐色 内 棕褐色～ 淡黄褐色	1mm以上の砂粒を含 む(雲母)	良好	口縁部5%	
3	高杯 (土器)	口径 16.4 器高 10.0		口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデの ち暗文、往状部外面ナゲ・押摩え、 内面しづり目、把部外面ナゲ、内面押 摩え。	淡灰褐色	0.3mm以下の砂粒を 微量に含む(長石・ 雲母)	良好	5%	
4	莉葉 (土器)	口径 26.4		内外面ヨコナデ。	淡赤褐色	1.2mm以下の砂粒を 含む(長石・雲母)	良好		外向に風痕 あり
5	杯蓋 (須恵器)	器高 3.2		天井部外面回転ハラケナデ、内面回転 ナデ。	白灰色	0.3mm以下の砂粒を 少量に含む(長石)	良好	口縁部5%	
6	甌 (須恵器)	口径 7.6		内外面回転ナデ。	淡青灰色	0.2mm以下の砂粒を 微量に含む(長石)	良好	口縁部5%	
7	甌 (須恵器)	口径 18.8		口縁部外面回転ナデ、体部外面タタ キのちカキ目、内面同心円タタキ。	白灰色	0.3mm以下の砂粒を 微量に含む(長石・ 石英)	良好	11壁部5%	
8	同上	口径 35.2		口縁部内外面回転ナデ。	外 貝灰色 内 淡黃褐色	3mm以下の砂粒を含 む(長石)	良好	口縁部5%	外向に風痕 あり

3.まとめ

今回の調査では、南側に隣接する調査で検出された弥生時代後期の遺物包含層が認められ、北側への拡がりが確認された。また、今回検出した自然河川は、当遺跡内の調査で検出した河川の中で最も新しい古墳時代のものであった。当遺跡は沖積地と同様、幾度となく氾濫があり、その都度、丘陵の谷を埋めながら、現在の地形が形成されたことが今までの調査でいえるであろう。

文 献

- (財)八尾市文化財調査研究会「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査」「水越遺跡」1983
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度」「水越遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告3 1983
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」「水越遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告23 1989
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度」「水越遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告28 1990
- 八尾市教育委員会「八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告22



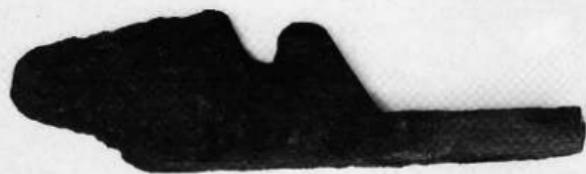
調査区全景（北から）



NR-1出土状況（南から）

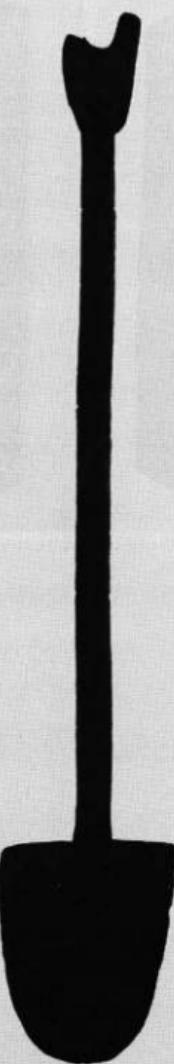


9



11

NR-1出土遺物 (9・11)



10

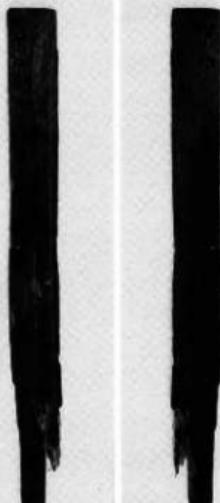
NR-1出土遺物 (10)



12



13



14

N R 1出土遺物 (12~14)

IX 萱振遺跡第11次調查（K F 91-11）

調查報告書

例　　言

1. 本書は、八尾市楠根町4丁目1-4、4-1、7-2、8-2で実施した事務所及び倉庫建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する萱振遺跡第11次調査（KF91-11）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会がハヤシエステート株式会社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年8月26日～平成3年9月24日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は500m²である。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－山萬そのみ、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物観察表－西岡千恵子、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

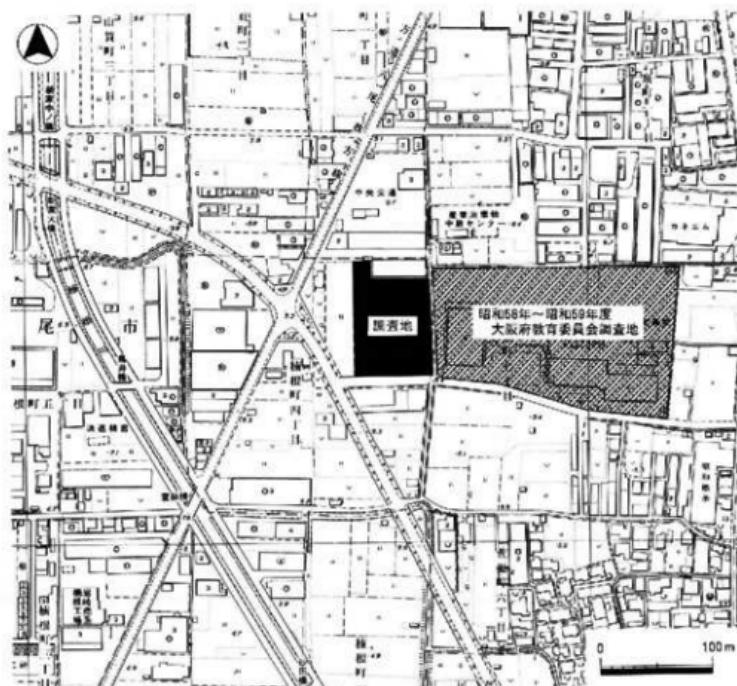
1.はじめに.....	69
2.調査概要.....	70
1) 調査の方法と経過.....	70
2) 基本層序.....	71
3) 検出遺構と出土遺物.....	73
4) 遺構に伴わない出土遺物.....	80
5) 出土遺物観察表.....	84
3.まとめ.....	89

IX 萱振遺跡第11次調査（K F 91-11）

1. はじめに

萱振遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川の右岸にあたる沖積地に位置しており、現在の行政区画では、萱振町・泉町・桂町・幸町・旭ヶ丘・緑ヶ丘・楠根町に所在している。

今回の調査地は、当遺跡北西部にあたる楠根町4丁目で、昭和58～59年度に発掘調査が実施された府立八尾北高校の西側に隣接している。この調査では縄文時代から現在に至る遺構・遺物を多数検出している。特に弥生時代前期の自然河川、弥生時代中期の大畦群状の遺構、弥生時代後期末から古墳時代初頭の方形周溝墓、古墳時代前期の古墳（方墳）、奈良時代の掘立柱建物群・井戸などを検出している。



第1図 調査地周辺図及び位置図

2. 調査概要

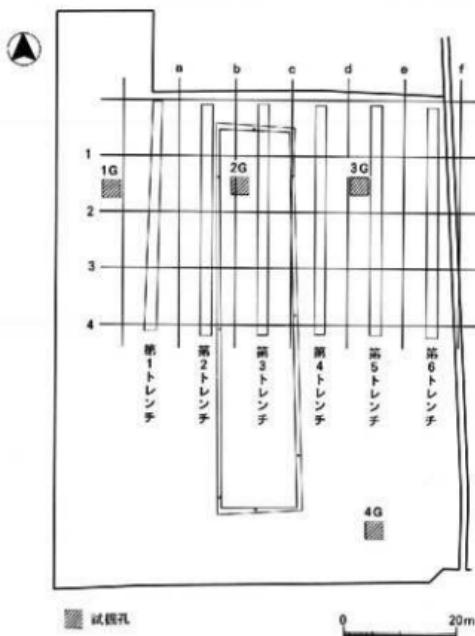
1) 調査の方法と経過

調査は、事業者と八尾市教育委員会・鶴八尾市文化財調査研究会との三者で協定書を締結して調査を実施した。調査期間は平成3年8月26日～9月24日である。調査面積は500m²を測る。

当遺跡では大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会がそれぞれ調査主体となり発掘調査を実施しており、その調査成果から弥生時代中期から鎌倉時代に至る遺構・遺物を検出している。今回の調査は、当遺跡内で当調査研究会が実施した第11次調査である。

調査にあたっては、調査地の開発部分に対し2m×40mの南北トレンチ6本を設定し、西から第1～第6トレンチと呼称して調査を実施した。細部の区割りは北部の土地境界杭を基点にして、トレンチ全体を跨ぐ範囲に10m四方角の区画を設定した。区名は南北線が西からa～f、東西線が北から1～4を付けた。地区名は交差する南西側を優先し、1a～4f区と呼称して調査を進めた。

調査区は府立八尾北高校建設に伴う発掘調査で実施された調査地の西側に隣接しており、関連する遺構の検出が予測されたので機械掘削（約0.3～0.6m）及び人力掘削（約0.3～0.4m）



第2図 調査区設定図及び区割図

を慎重に実施した。その結果、現地表下約0.4~0.9m（標高4.2~3.6m）から約2.3m以下まで砂層を基調とした自然河川の堆積を確認した。

2) 基本層序

調査区では現地表下約3.0mまでの調査で検出した土層から普遍的に見られる14層を抽出して基本層序とした。（第3図）。

第1層 耕土。層厚15~20cm。調査地中央部では約40cm高い畠地がある（幅14m、長さ67m）。

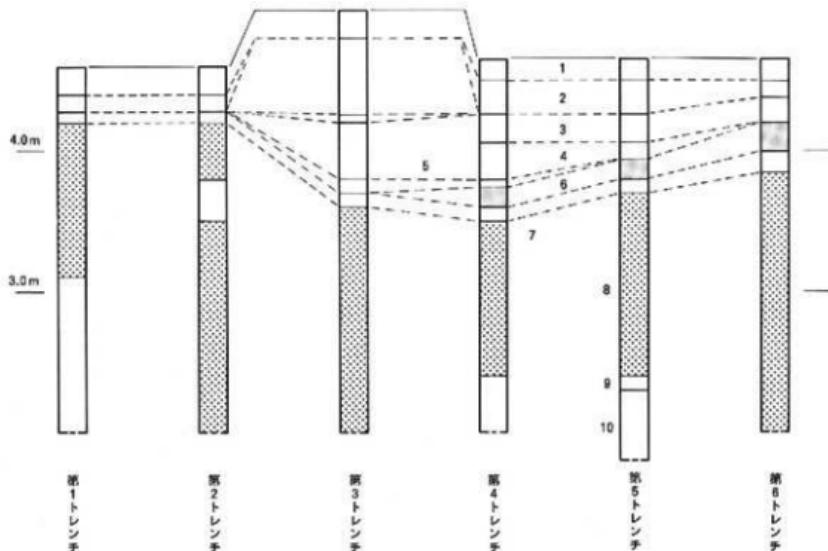
第2層 床土。層厚10cm。高い畠地にはみられないが、整地層と考えられる層厚約50cmの淡茶灰色粘砂土がある。土層内には古墳時代から鎌倉時代の土器の小片がごく少量含まれている。

第3層 茶灰色粘砂。層厚15~20cm。中世ごろの遺物がごく少量含まれる。

第4層 灰黄色シルト。層厚30~40cm。古墳時代前期の遺物が含まれる。この上面では古墳時代前期から中期の遺構を検出している。

第5層 淡灰白色粘質シルト。層厚5~20m。炭化物が3~4層に薄くサンド状にみられる。

第6層 暗灰（黒褐）色細砂混粘質土。層厚10~30cm。弥生時代後期末から古墳時代初頭の



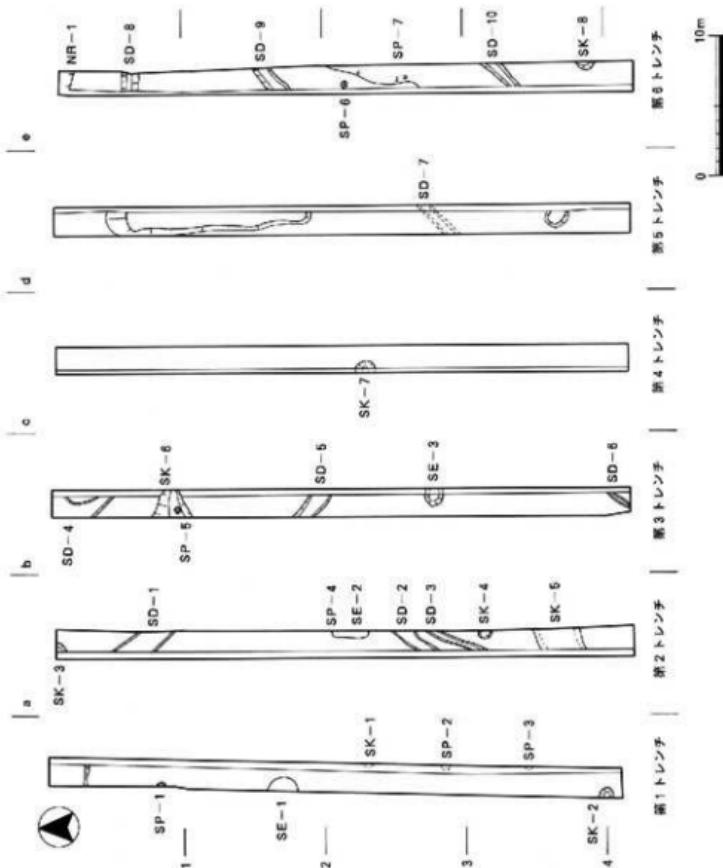
第3図 基本層序柱状図

遺物包含層である。色調は低い部分が黒褐色となり、遺物も多く含まれる。

第7層 乳灰茶色細砂混粘質土。層厚3~20cm。弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構が切り込まれている。

第8層 乳灰色疊混粗砂。層厚1~1.6m。弥生時代後期に埋没した自然河川の堆積上で、調査区全体で確認した。

第9層 暗青灰色シルト。層厚10cm。第5トレンチで検出した土層で、植物遺体が沈澱して



第4図 遺構平面図

いる。

第10層 青灰色粘質シルト。層厚30cm以上。無遺物層である。

3) 検出遺構と出土遺物

調査では各トレンチ（西から第1～6トレンチ）より弥生時代後期末から近世に至る遺構・遺物を検出した。弥生時代後期末から古墳時代初頭は土坑1基・溝4条・小穴2個、古墳時代初頭は水田？・古墳時代前期は土坑3基・溝3条、古墳時代中期は土坑4基・溝3条・小穴3個、近世は井戸3基である。そのほか時期不明の小穴2個を検出した。出土遺物の総数はコンテナにして6箱分で、ほとんどが弥生時代後期末から古墳時代初頭の上器類である。以下、各トレンチごとに記す。なお、個々の遺物については遺物観察表にまとめて掲載している。

・第1トレンチ

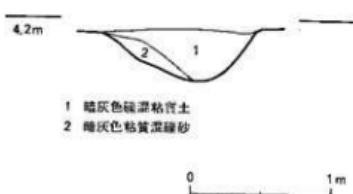
古墳時代前期の土坑1基（SK-1）、古墳時代中期の土坑1基（SK-2）・小穴2個（SP-1・2）、近世の井戸1基（SE-1）、時期不明の小穴1個（SP-3）を検出した。

SK-1

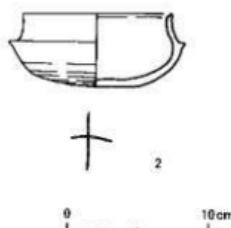
調査区南部（3a区）の西壁で検出した。平面の形状は西半分が調査区外に至り不明である。規模は検出部で東西0.42m以上、南北0.62m、深さ28cmを測る。断面は半球形を呈する。堆積土は灰褐色疊混シルト・暗灰褐色疊混シルト（炭を含む）である。遺物はV様式系の壺底部片



第6図 SK-1出土遺物実測図



第5図 SK-2 平断面図



第7図 SK-2 出土遺物実測図

(1) が出土している。

SK-2

調査区南部(4a区)の西壁で検出した。平面の形状は西半分が調査区外に至り不明である。規模は検出部で、東西0.7m以上、南北1.09m、深さ37cmを測る。断面は半球形を呈する。堆積土は暗灰色疊粘質土・暗灰色粘質疊砂土である。遺物は上坑の底からII線部を下に伏せた完形の須恵器杯身(2)が出土しており、人為的に置かれたものと思われる。この須恵器は形態から古墳時代中期に比定されるものであろう。

SP-1

調査区北部(1a区)の西壁で検出した。平面の形状は西半分が調査区外に至るため不明である。規模は検出部で東西0.3m以上、南北0.54m、深さ23cmを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は土灰茶色細砂混シルト・灰色シルト混粗砂である。遺物はなかった。

SP-2

調査区中央(3a区)の東壁で検出した。平面の形状は西半分が調査区外に至るため不明である。規模は検出部で東西0.3m以上、南北0.54m、深さ23cmを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は灰茶色細砂混シルト・灰色シルト混粗砂である。遺物はなかった。

SP-3

調査区中央(4a区)の東壁で検出した。平面の形状は西半分が調査区外に至るため不明である。規模は検出部で東西0.26m以上、南北0.44m、深さ26cmを測る。断面は半球形を呈する。堆積土は暗灰茶色砂粘土である。遺物はなかった。

SE-1

調査区中央(2a区)の東壁で検出した。平面の形状は西半分が調査区外に至るため不明である。規模は検出部で東西0.8m以上、南北1.54m、深さ23cm以上を測る。完掘できず、断面は不明である。堆積土は茶灰色砂まじり粘質土である。遺物はなかった。

・第2トレンチ

古墳時代中期の土坑3基(SK-3~SK-5)・小穴1個(SP-4)・溝3条(SD-1~SD-3)、近世の井戸1基(SE-2)を検出した。

SK-3

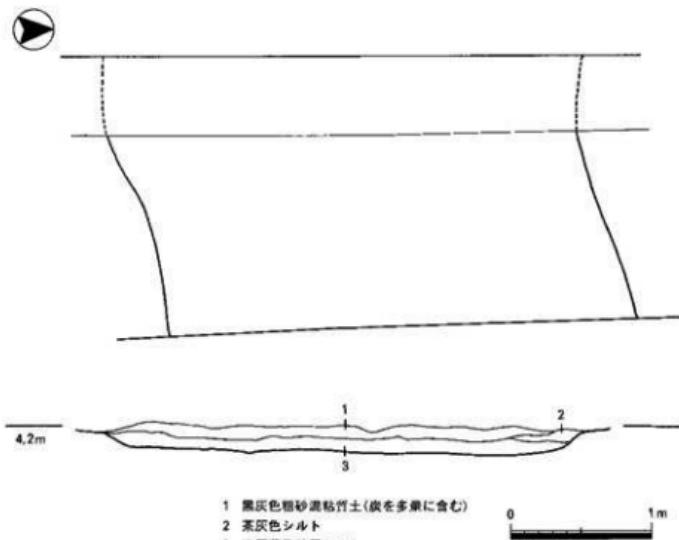
調査区北部(1b区)の北西隅で検出した。平面の形状は北西側が調査区外に至るため不明である。規模は検出部で東西0.7m以上、南北0.6m以上、深さ26cmを測る。堆積土は灰茶色シルトである。遺物はなかった。

SK-4

調査区中央（4 b区）の東壁で検出した。平面の形状は東側が調査区外に至るため不明である。規模は検出部で東西0.5m以上、南北0.6m、深さ26cmを測る。堆積土は灰茶色シルトである。遺物はなかった。

SK-5

調査区中央（4 b区）の東壁で検出した。平面の形状は東西とも調査区外に至るため不明である。規模は検出部で東西2.0m以上、南北3.4m以上、深さ21cmを測る。断面は浅い皿状形を呈する。堆積土は黒灰色粗砂混粘質土・淡灰茶色粘質シルトで、上層は炭が多量に含む層であり、焼上坑状の造構がと考えられる。遺物はなかった。



第8図 SK-5 平断面図

SP-4

調査区中央（3 b区）の東壁で検出した。南部はSE-2に切られ、西側が調査区外に至るため不明である。規模は検出部で、東西0.3m、南北0.54m、深さ16cmを測る。堆積土は灰黑色粗砂混シルトである。遺物はなかった。

SD-1

調査区（1 b区）の北端で検出した。方向は南東-北西に伸びる。幅1.8m、深さ38cmを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は茶灰色粘質シルト・灰色粗砂混粘質土である。遺物はな

かった。

SD - 2

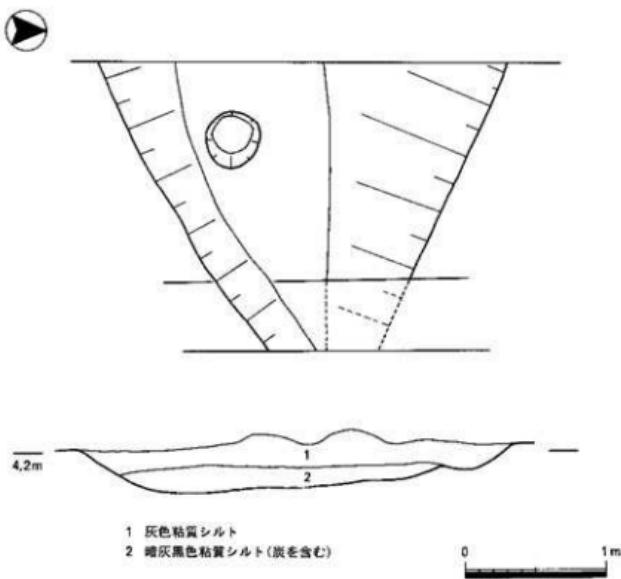
調査区（2 b 区）の中央で検出した。方向は南西—北東に伸びる。幅0.76m、深さ20cmを測る。断面は半球形を呈する。堆積土は灰褐色粗砂混粘質土・淡灰色細砂である。遺物はなかった。

SD - 3

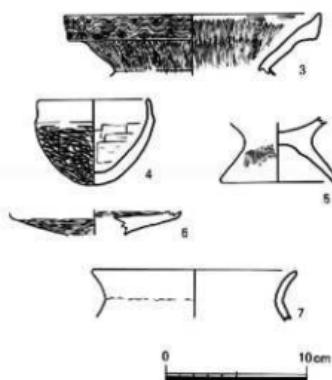
調査区（2 b 区）の中央で検出した。方向は南西—北東に伸びる。幅0.4m、深さ22cmを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は灰褐色粗砂混粘質土・淡灰色細砂である。遺物はなかった。

SE - 2

調査区中央（3 b 区）の東壁で検出した。北部は SP - 4 を切り、東部は調査区外に至り、平面の形状は不明である。堆積土は土である。



第9図 SK-6 平断面図



第10図 SK-6・SP-5出土遺物実測図

cmを測り、平面円形を呈する。堆積土は土坑が灰色粘質シルト・暗灰黒色粘質シルト（炭を含む）で、小穴は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は土坑底から古墳時代前期（布留式期）の蓋（3）・吉備系の鉢（4）完形や・台付鉢（5）・高杯（6）が出土している。SP-5からは壺（7）の口縁部片が出土した。

SD-4

調査区（1c区）の北部で検出した。方向は南東から北西に伸びた後屈曲し、北東に伸びるもので、調査区では「く」字形を呈する。規模は検出部で、幅0.8~1.3m、深さ15cmを測る。断面は浅い皿状形を呈する。堆積土は黒灰色粘質シルトで、炭を多量に含んでいる。遺物はなかった。

SD-5

調査区（2c区）の中央で検出した。方向は南東ー北西に伸びる。規模は検出部で、幅1.8m、深さ35cmを測る。断面は半球形を呈する。堆積土は暗褐色粘質シルトである。遺物はなかった。

SD-6

調査区（4c区）の南部で検出した。方向は南西ー北東に伸びる。規模は検出部で、幅0.3m、深さ10cmを測る。断面は浅い半球形を呈する。堆積土は灰色細砂混粘質土である。遺物はなかった。

SE-3

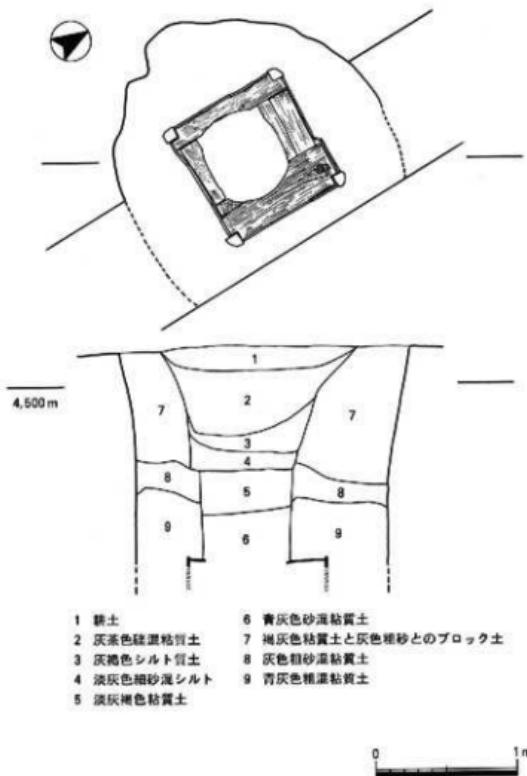
調査区中央付近（3c区）で検出した。掘形の平面形は円形で、内部に井戸側とした枠組が

・第3トレンチ

古墳時代前期の土坑1基（SK-6）、溝3条（SD-4~SD-6）、古墳時代中期の小穴1個（SP-5）、近世の井戸1基（SE-3）を検出した。

SK-6

調査区（1c区~2c区）で検出した。東西は調査区外に至り、平面は不明である。規模は検出部で、東西2m以上、南北3.8m、深さ38cmを測る。底面の南側には小穴1個（SP-5）があり、南東側には溝状のくぼみが見られる。SP-5は径0.3m、深さ18



第11図 SE - 3 平断面図

掘形の検出面から約1.3m下で検出した。枠組は四方に4本の杭を打ち付け、その上に板材を並べ、中央部は径0.6mの円形の穴を作っている。その上部には枠組みはなかったが、瓦棒が組まれていたと思われる瓦片が少量出土している。この井戸の形状は八尾市内の調査で普遍的にみられる桶・瓦等を棒とした江戸時代から明治時代に普及した井戸の形態で、用途としては灌漑用井戸としたものと考えられる。なお、調査では帶水が激しく危険であるため井戸底までの調査は断念した。

・第4トレチ

古墳時代初頭の水田状遺構？、古墳時代前期の土坑1基である。弥生時代後期末から古墳時

代初頭の包含層の上層に水平堆積する粘土層である。平面では確認できなかったが北部の断面に1箇所高まった所(上幅60cm、下幅1m、高さ25cm)があり、駐畔の可能性を考えられる。しかし、他の調査区では検出していない。

SK-7

調査区(2b区)の中央で検出した。方向は南西-北東に伸びる。規模は検出部で、東西0.9m以上、南北2m、深さ60cmを測る。断面は半球形を呈する。堆積土は淡灰色粘土・灰色粘土である。遺物はなかった。

水田

調査区全体で確認した。基本層序では第5層にあたるもので、この調査区と第3調査区の一部で確認しただけで広範囲には認められなかった。検出した水田面は水平で、区画する畔は確認されなかった。上面には耕作時にできたと思われる足跡が多数残存していた。

・第5トレンチ

弥生時代後期末から古墳時代初頭の溝1条(SD-7)である。北部では南北13mにわたり約40cm高くなっている部分があり、東側へ高く、西側は低く下がる。低くなったところには古墳時代前期の包含層が堆積していた。

SD-7

調査区(3d区)の中央で検出した。方向は南西-北東に伸びる。規模は検出部で、幅0.5m、深さ20cmを測る。断面は半球形を呈する。堆積灰色粘土である。遺物はなかった。

・第6トレンチ

第7層上面から切り込む弥生時代後期末から古墳時代初頭の土坑1基(SK-8)・溝3条(SD-8～SD-10)・小穴2個(SP-6～SP-7)、中世の自然河川1条(NR-1)である。調査区東部では弥生時代後期末から古墳時代初頭のベース面が部分的に高くなっている。

SK-8

調査区(4f区)の南部で検出した。東部は調査区外に至り、平面の形状は不明である。規模は検出部で、東西0.6m以上、南北1.2m、深さ24cmを測る。断面は浅い半球形を呈する。堆積土は黒灰色細砂混粘質土である。遺物はなかった。

SD-8

調査区(1f区)の北部で検出した。方向は東-西に伸びる。幅1.4m、深さ28cmを測る。断面は半球形を呈する。堆積土は暗灰黑色細砂混粘質土・暗灰色粘土である。遺物はなかった。

SD-9

調査区（2 f 区）の中央で検出した。方向は南西—北東に伸びる。幅 2 m、深さ 34 cm を測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は暗灰色粘土である。遺物はなかった。

SD-10

調査区（4 f 区）の中央で検出した。方向は南西—北東に伸びる。幅 2.4 m、深さ 26 cm を測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は暗灰色細砂混粘質土である。遺物はなかった。

SP-6

調査区（3 f 区）の中央で検出した。平面の形状はほぼ円形を呈する。幅 0.25 m、深さ 16 cm を測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は土である。遺物はなかった。

SP-7

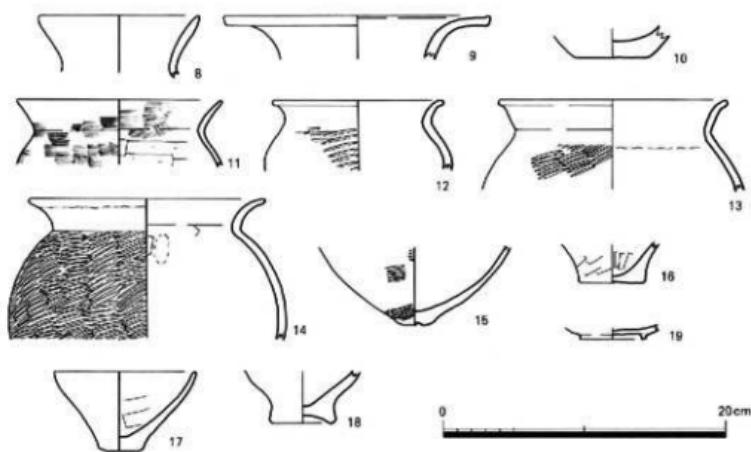
調査区（3 f 区）の中央で検出した。平面の形状はほぼ円形を呈する。幅 0.15 m、深さ 14 cm を測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は土である。遺物はなかった。

NR-1

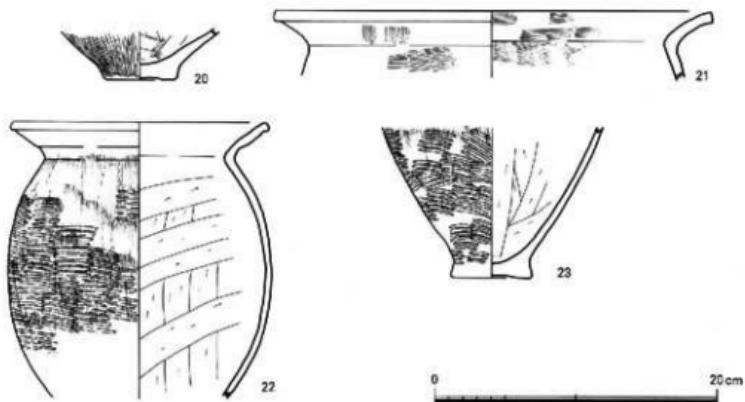
調査区（1 f 区）の北部で検出した。方向は東—西に伸びる。幅 1.15 m 以上、深さ 60 cm を測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は乳灰茶色細砂である。遺物はなかった。

4) 遺構に伴わない出土遺物

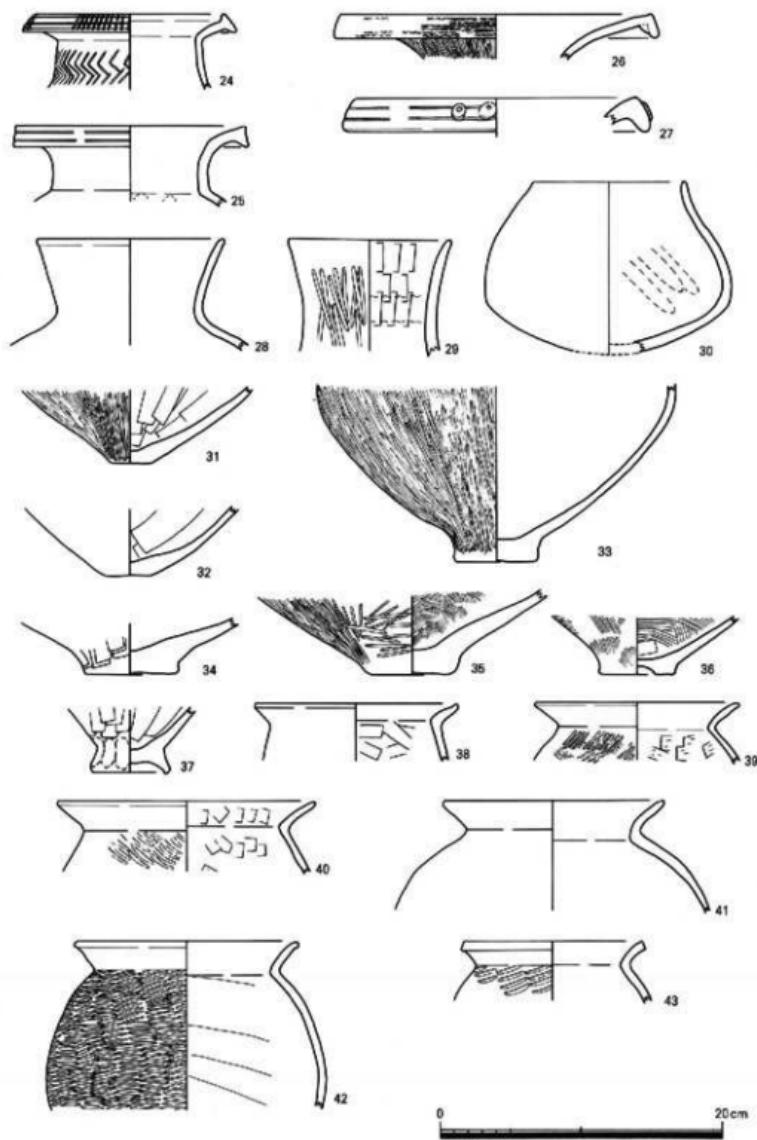
主に第 3 層・第 5 層・第 6 層で出土した。第 3 層は古墳時代から鎌倉時代に比定される遺物である。第 5 層は古墳時代前期（布留式）に比定される遺物である。第 6 層は古墳時代初頭（庄内式）に比定される遺物がそれぞれ出土している。出土量としては第 4・5・6 トレンチにみられる第 6 層から出土したもののがもっとも多かった。出土量はコンテナ 4 箱分である。以下、図示できた遺物について記す。第 3 トレンチの第 5 層で出土したものは、古墳時代前期に比定される壺（8～10）・甕（11）・V 様式系の甕（12～16）・鉢（17・18）である。（19）は鎌倉時代に比定される瓦器碗である。第 4 トレンチの第 6 層で出土したものは、古墳時代初頭に比定される壺（20）・甕（21～23）である。第 5 トレンチの第 6 層で出土したものは、古墳時代初頭に比定される壺（24～28・31～37）・長頸壺（29）・無頸壺（30）・V 様式系の甕（38～45・47～52）・有孔鉢（54・55）・鉢（53）・高杯（56～63）である。第 6 トレンチの第 6 層で出土したものは、古墳時代初頭に比定される壺（64～68）・甕（69～73）・鉢（74）である。



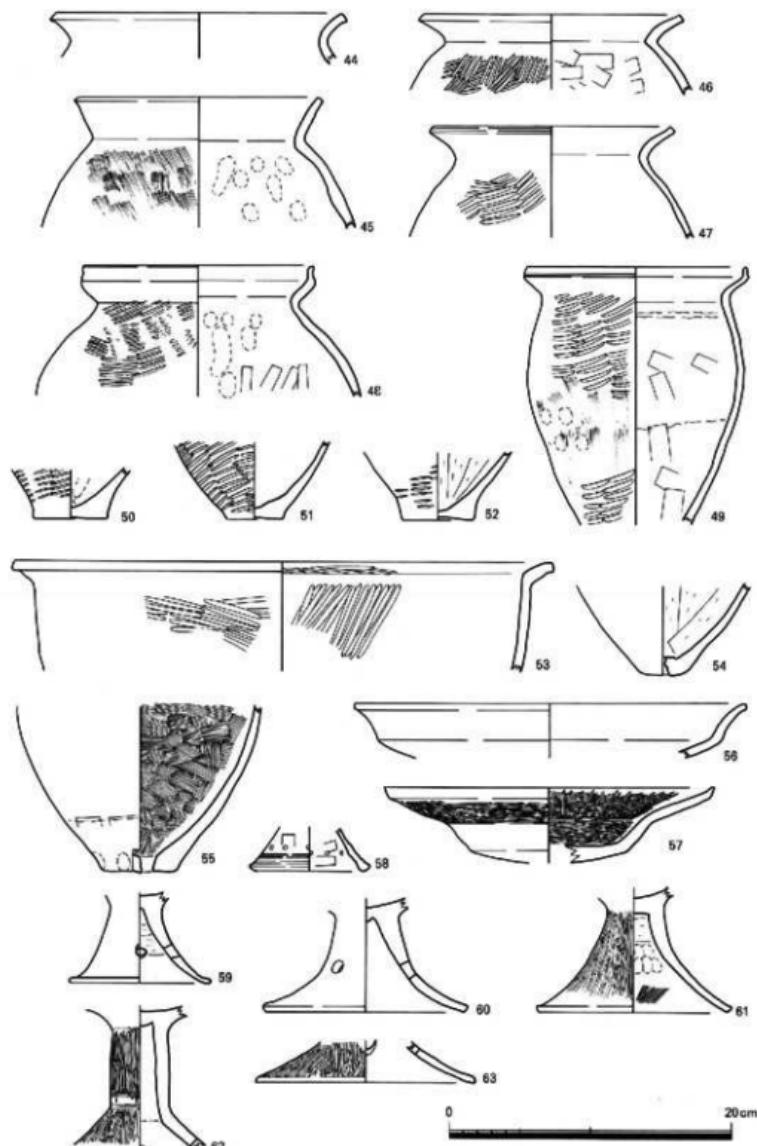
第12図 〈第3トレンチ〉遺構に伴わない出土遺物実測図



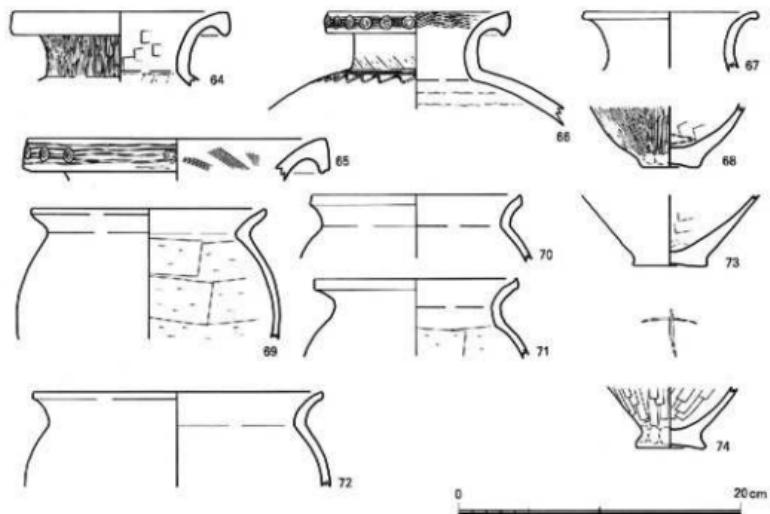
第13図 〈第4トレンチ〉遺構に伴わない出土遺物実測図



第14図 〈第5トレンチ〉造構に伴わない出土遺物実測図1



第15図 〈第5トレンチ〉遺構に伴わない出土遺物実測図2



第16図 〈第6トレンチ〉遺構に伴わない出土遺物実測図

5) 出土遺物観察表

土坑・小穴

遺物番号 測定番号	器種	法量 口径 基高	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
1 SK-1 (土製器)	壺	底径 3.6 基高 3.6	外面タキ、内面ヘラナデ・ナデ。	外 棕色 内 淡褐色	5mm以下の砂粒を含む(辰石)	良好	底面のみ	すり付着
2 SK-2 八	杯身 (須恵器)	口径 10.4 基高 5.2	口縁部内凹ナデ、口部外周縁ヘラケ ズリ、内面ナデ。	外 明青灰褐色 内 明青灰褐色	4mm以下の砂粒を含む	良好	完形	外面にヘラ記号
3 SK-6 (土製器)	壺	口径 18.2	口縁部前面ハケナデ後波次文、外面ヘラミガキ、内面ハケナデ・ヘラミガキ。	外 淡褐色 内 棕色	2.5mm以下の砂粒を含む(辰母・長石・石英)	良好	口縁部分	
4 SK-6 八	碗 (土製器)	口径 7.8	外曲ヨコナデ・ヘラミガキ、内面ヨコナデ・ヘラナデ後ハラケズリ。	外 淡褐色 内 淡褐色～淡褐色	2.5mm以下の砂粒を含む(辰母・長石)	良好	完形	
5 SK-6	台付鉢 (土製器)	底径 8.0	脚部外側ハケナデ(ヨ本/m)、内面ナデ、体部内面ナデ。指揮さえ。	外 棕色 内 淡青褐色～褐色	3mm以下の砂粒を含む(辰母・長石)	良好	底面のみ	
6 SK-6	高杯 (土製器)		底部内外面ヘラミガキ。	淡褐色	1mm以下の砂粒を含む(辰母・長石)	良好	杯底部のみ	
7 SP-8	壺 (土製器)	口径 14.2	口縁部外面ヨコナデ・接合板、内面ナデ、体部内外面ナデ。	外 棕色 内 淡青褐色～褐色	4mm以下の砂粒を含む(辰母・角閃石・長石)	良好	口縁部分	

第3トレンチ

遺物番号 回収番号	器種	法面 口径 (cm)	法面 器高	調整・技法等の特徴	色 調	胎 上	焼成	遺存状況	備 考
8 ★ (土師器)	口徑 11.4			内外面磨耗のため調整不明。	淡褐色～褐褐色	4mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石)	良好	口縁部片	
9 同上	口徑 19.0			内縁面内外面ナダ。	外 淡褐色 内 淡褐色～淡褐色	3mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石)	良好	口縁部片	
10 同上	口徑 5.2			内外面ナダ。	淡褐色	15mm以下の砂粒を含む(雲母・長石)	良好	口縁部片	
11 ★ (土師器)	口徑 14.6			口縁部内面ヨコナダ、内面ハケナダ(9本/cm)、体部外面タキ(5本/cm)後ハケナダ、内面ハラケズリ。	淡褐色	3mm以下の砂粒を含む(雲母・長石)	良好	口縁部片	
12 同上	口徑 12.0			口縁部内外ナダ、体部外面タキ(2本/cm)、内面ナダ。	外 淡褐色 内 淡褐色～淡褐色	2.5mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石・石英)	良好	底部のみ 周囲有り	
13 同上	口徑 16.4			口縁部内外ヨコナダ、体部外面タキ(4本/cm)、内面ナダ・接合部。	外 淡褐色 内 淡褐色～淡褐色	5.5mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石・チャート)	良好	口縁部片	
14 八	口徑 16.4			口縁部内面ヨコナダ・接合部、内面ヨコナダ・体部外面タキ(3本/cm)、内面ハラナダ・接合部。	外 暗褐色 内 淡褐色	3mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石・石英)	良好	口縁部片	
15 同上	口徑 2.6			外面タキ(4本/cm)、内面調整不明。	外 黒褐色 内 増褐色	4mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石)	良好	底部のみ すす付着	
16 同上	口徑 4.5			内外面ハラナダ。	外 淡褐色 内 淡褐色	3mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石)	良好	底部のみ	
17 八 (土師器)	口徑 10.0 底径 3.1 器高 6.7			外面磨耗のため調整不明。 内面ナダ・ハラナダ。	淡褐色～淡褐色	5mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石・チャート)	良好 %		
18 同上	底径 4.2			外面磨耗のため調整不明。 内面ナダ。	褐色～淡褐色	4.5mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石)	良好	底部のみ	
19 桶 (瓦器)	底径 4.7			外面ナダ、底部ナダ、見込み平行槽文。	外 灰白色 内 灰色	0.5mm以下の砂粒を含む(雲母)	良好	底部のみ	

第4トレンチ

遺物番号 回収番号	器種	法面 口径 (cm)	法面 器高	調整・技法等の特徴	色 調	胎 上	焼成	遺存状況	備 考
20 ★	底径 5.3			外面底面ハミガキ、外側ハラナダ。	淡白色	3mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石)	良好	底部のみ	
21 ★ (土師器)	口徑 31.0			内外面ハケナダ。	淡褐色～黑褐色	2mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石)	良好	口縁部片	
22 同上	口徑 17.8			口縁部内外面ナダ、体部外面タキ(3本/cm)後ハケナダ(7本/cm)、内面ハラケズリ。	外 淡褐色～灰褐色 内 淡褐色	4mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石)	良好	%	
23 同上	底径 5.8			体部外面タキ(3本/cm)後ハケナダ(7本/cm)、底部タキ、内面ハラケズリ。	外 暗褐色 内 淡褐色	3mm以下の砂粒を含む(雲母・角閃石・長石)	良好	底部及び 体部の一 部	

第5トレンチ

遺物番号 図版番号	器種	法面 口径 (cm)	測量・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	進存状況	備考
24 八	壺 (土師器)	口径 13.4	口縁端面鏡による沈縫後綫方向の彫り ざみ、内面ヨコナデ、頭部外腹波形文 内面ナデ。	外 灰黄褐色 内 波状褐色 ～暗灰色	3 mm以下の砂粒を含む (角閃石・雲母・ 長石)	良好	口縁部片	
25	同上	口径 16.1	口縁端面鏡 2条の沈縫、内面ナデ、頭 部外腹ナデ、内面ナデ、体部外腹ナデ、 内面押さえ。	外 淡褐色～ 淡褐色 内 淡褐色～ 灰褐色	5 mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)	良好	口縁部片	
26	同上	口径 22.2	口縁端面鏡状文、外面ヘラミガキ、 内面ナデ。	淡褐色	4 mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母)		口縁部片	
27	同上	口径 20.0	口縁端面鏡 2条の沈縫後円形浮文、内 面斜削の為調整不良。	外 淡褐色～ 明褐色 内 波状文～ 黑褐色	7 mm以上の砂粒を含 む(角閃石・長石)		口縁部片	
28	同上	口径 13.2	内外面ナデ。	外 波状文～ 灰褐色 内 灰褐色～ 淡褐色	5 mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)		口縁部片	
29	同上	口径 11.2	外面ヨコナデ・ヘラミガキ、内面ハケ ナデ。	基灰色	3 mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)		口縁部片	黒斑有り
30 八	同上	口径 10.6	外側削離のため調整不良、内面ナデ。	外 橙色～灰 色 内 基褐色	9 mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)	%	黒斑有り	
31	同上	底径 3.1	外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、底面 端先状のもので叩き押さえ。	外 黑褐色 内 灰褐色	3 mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)		底部のみ	黒斑有り
32	同上	底径 3.0	外面調整不良、内面ヘラナデ。	外 暗褐色～基 褐色 内 暗灰色	5 mm以下の砂粒を多 量に含む(角閃石・ 雲母・長石)		底部のみ	黒斑有り
33	同上	底径 5.6	外面ヘラミガキ、内面斜削のため調整 不良。	外 淡褐色 内 波状文～ 淡褐色	4 mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)		底部のみ	
34	同上	底径 6.4	外面ヘラナデ、内面ナデ。	外 淡黄色 ～灰黃褐色 内 淡黄色	6 mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)		底部のみ	
35	同上	底径 5.6	外面ヘカナデ後ヘラミガキ、内面ハケ ナデ(6本/cm)。	外 淡青褐色 ～淡褐色 内 淡褐色	7 mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母)		底部のみ	
36	同上	底径 5.2	外面ハケナデ(2本/cm)後ヘラミガ キ、腹部にしおりは、内面ハケナデ (6本/cm)・ヘラナデ。	外 淡黃褐色 内 淡青褐色	6 mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)		底部のみ	
37	同上	底径 5.3	外面ヘラナデ。衝撃され、内面ヘラナ デ。	灰黃褐色	3 mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母)		底部のみ	
38	壺 (土師器)	口径 14.4	口縁部外腹ヨコナデ、体部外腹磨耗 のため調整不良、内面ヘラナデ。	外 暗灰茶色 内 暗灰茶色 ～灰茶色	2 mm以下の砂粒を少 量含む(角閃石・雲 母・長石)		口縁部片	すす付着
39	同上	口径 14.4	口縁部外腹ヨコナデ、体部外腹タタ キ(3本/cm)、内面ヘラミガキ。	淡茶色	3 mm以下の砂粒を多 量に含む(赤褐色酸 化粒・雲母・長石)		口縁部片	
40	同上	口径 18.2	口縁部外腹ヨコナデ、内面ヘラミガキ、 体部外腹タタキ(2本/cm)、内面ヘ ラタケザリ。	外 暗灰茶色 ～灰茶色 内 灰茶色	3 mm以下の砂粒を含 む(赤褐色酸化粒・ 雲母・長石)		口縁部片	
41	同上	口径 15.4	内外面磨耗のため調整不良。	淡茶褐色	5 mm以下の砂粒を多 量に含む(赤褐色酸 化粒・雲母・長石)		口縁部片	
42	同上	口径 15.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部外腹タタ キ(3～4本/cm)、内面ヘラナデ。	外 淡褐色～ 褐色 内 明褐色	4 mm以下の砂粒を含 む(雲母・長石)		口縁部片	

第5トレンチ

IV 黄振遺跡第11次調査

遺物番号 図版番号	器種	口径 (cm)	口径 基高	測量・技法等の特徴	色調	胎土 構成	遺存状況	備考
43	壺 (土師器)	口径	12.6	口縁部内外ヨコナゲ、体部外縁タッキ(2本/cm)内面ナゲ。	淡黄褐色	3mm以下の砂粒を少 量含む(角閃石・雲母・ 長石)	良好	口縁部片
44	同上	口径	20.2	口縁部・体部とも外圓摩擦のため調整不 明、内面ヨコナゲ。	茶灰色	5mm以下の砂粒を少 量含む(赤褐色化粧 粒・角閃石・雲母・ 長石)	良好	口縁部片
45	同上	口径	17.0	口縁部内外ヨコナゲ、体部外縁ハケ ナゲ(11本/cm)、内面ナゲ・指押さ え。	外 茶褐色 内 茶灰色	5mm以下の砂粒を多 量に含む(赤褐色化 粧粒・角閃石・雲母・ 長石)	良好	口縁部片 すす付着
46	同上	口径	18.2	II型内外面ヨコナゲ、体部外面タッ キ(3本/cm)、内面ヘラナゲ。	乳灰茶色	4mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)	良好	口縁部片
47	同上	口径	16.8	口縁部内外ヨコナゲ、体部外面タッ キ(2本/cm)、内面ナゲ。	乳灰褐色	3mm以下の砂粒を多 量に含む(赤褐色化 粧粒・角閃石・雲母・ 長石)	良好	口縁部片 すす付着
48	同上	口径	16.2	口縁部外面ヨコナゲ、体部外面タッ キ(3本/cm)後ナゲ、内面ナゲ・ヘ ラナゲ・指押さえ。	外 淡灰色～ 暗褐色 内 淡灰色	2.5mm以下の砂粒を多 量に含む(赤褐色化 粧粒・角閃石・雲母・ 長石)	良好	口縁部片 すす付着
49	同上	口径	15.6	口縁部外面ヨコナゲ、体部外面タッ キ(2本/cm)後ナゲ(10本/cm)・ 指押さえ、内面ヘラナゲ複合痕	外 茶灰色～ 暗褐色 内 茶褐色	4mm以下の砂粒を含 む(赤褐色化粧粒・ 角閃石・長石)	良好	口縁部片
50	同上	底径	5.2	外面タッキ(3本/cm)、内面ナゲ。	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	4mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)	良好	底部のみ
51	同上 (土師器)	底径	3.9	外面タッキ(2本/cm)、内面ナゲ。	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	4mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)	良好	底部のみ すす付着
52	同上	底径	4.9	外面タッキ(3本/cm)、内面ヘラケ ズリ。	褐褐色	7mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)	良好	底部のみ すす付着
53	鉢 (土師器)	口径	38.2	口縁部外面ヨコナゲ、内面ヘラケズリ。 体部内外面ヘラケズリ。	茶灰色	5mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石・石英)	良好	杯部片
54	有孔鉢 (土師器)	底径	3.5	外周調節不 ^明 、内面ヘラケズリ。	淡褐色～淡褐 色	7mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)	良好	底部のみ
55	同上	底径	5.2	外山ナゲ・ヘラナゲ・指押さえ・縫合 縫内ハケナゲ(12~13本/cm)。	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	10mm以下の砂粒を多 量に含む(角閃石・ 雲母・長石・石英)	良好	底部のみ 粗面有り
56	高杯 (土師器)	口径	27.6	内外面調整不明。	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	2.5mm以下の砂粒を少 量含む(角閃石・雲 母・長石)	良好	杯部のみ
57	同上	口径	23.6	口縁部外面ヨコナゲ・ヘラミガキ、内 面ヨコナゲ後ヘラミガキ、杯底部外周 調節のため調整不 ^明 、内面ヘラミガキ	灰黄色～灰黄 褐色	3mm以下の砂粒を少 量含む(角閃石・雲 母・長石)	良好	杯部のみ
58	同上	底径	7.4	脚部外面ヘラナゲ、内面ヘラナゲ・ヨ コナゲ	外 暗茶系色 内 灰色	3mm以下の砂粒を含 む(雲母・長石)	良好	脚部片
59	同上 八	底径	9.8	脚部外周調節不 ^明 、縫部ヨコナゲ、内 面ヘラケズリ・縫に四方孔。	灰黄褐色～淡 褐色	4mm以下の砂粒を含 む(角閃石・雲母・ 長石)	良好	脚部片
60	同上	底径	14.2	脚部外周削離のため調整不 ^明 、内面削 離のため調整不 ^明 。二方孔。	外 棕色～黑 褐色 内 棕色～灰 褐色	5mm以下の砂粒を多 量に含む(角閃石・ 雲母・長石)	良好	脚部片

第5トレンチ

遺物番号 回収品番号	岩種	法量 (cm) 基高	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
61 高杯 (土師器)	底径 13.6		縁部外側へラミガキ、腹部ヨコナデ、内面へラケズリ、指ナデ、腹部ナデ、ハケナデ。	淡褐色	8mm以下の砂粒を少量含む(角閃石・雲母・長石)	良好	縦部片	
62 八 同上			柱状部外側へラミガキ・接合痕、下位に4条の比較的、内面ナデ、底部外側へラミガキ、内面ナデ・接合痕、四方孔。	乳灰白色	6mm以下の砂粒を含む(長石・石英・雲母)	良好	柱状部片	
63 同上 底部	15.6		外側へラミガキ+ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、四方孔。	乳灰白色	4mm以下の砂粒を含む(長石・雲母)	良好	縦部片	

第6トレンチ

遺物番号 回収品番号	岩種	法量 (cm) 基高	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
64 壺 (土師器)	口径 15.2		U縁部外側面ヨコナデ、腹部へラミガキ、U縁部端部に堆強した粘土痕がみられる。内面ヨコナデ+ヘラナデ+接合痕。指押痕。	外 淡赤褐色 ～桜色 内 淡赤褐色 ～黒褐色	7mm以下の砂粒を含む(長石・雲母・角閃石)	良好	口縁部片	
65 同上	口径 21.2		口縁部周面5条の沈線を施した模印形浮文、外面ナデ、内面ヨコナデ+ハケナデ。	淡黃褐色	7mm以下の砂粒を含む(長石・角閃石・雲母)	良好	口縁部片	
66 八 同上	口径 19.6		口縁部周面5条の沈線を施した後円形浮文、内面へラミガキ、腹部外側へラケズリ・接合痕、内面ナデ、体部外側上位に波状文、内面ナデ・接合痕。	外 淡褐色～ 淡黃褐色 内 黑褐色	4mm以下の砂粒を含む(長石・角閃石・雲母)	良好	口縁部片	
67 同上	口径 12.2		内外面ナデ。	淡黃褐色	6mm以下の砂粒を含む(長石・角閃石・雲母)	良好	口縁部片	
68 同上	底径 3.9		体部外側へラミガキ、底部指押さえ、内面へラナデ。指先による押さえがある。	外 淡褐色～ 灰黃褐色 内 灰黃褐色	5mm以下の砂粒を含む(長石・角閃石・雲母)	良好	底部のみ 黒斑有り	
69 壺 (土師器)	口径 16.6 最大径 18.8		口縁部内外面ヨコナデ、体部外側調整不明、内面へラケズリ。	外 桃色 内 桃色～ 灰黃褐色	8mm以下の砂粒を含む(長石・角閃石・雲母)	良好	口縁部片 すす村着	
70 同上	口径 14.8		口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面調整不明。	淡褐色～淡桃色	4mm以下の砂粒を含む(長石・角閃石・雲母)	良好	口縁部片	
71 八 同上	口径 14.4		口縁部外側ヨコナデ、体部外側方向ナデ、内面ナデ・ヘラケズリ。	外 灰黃褐色 ～淡黃褐色 内 淡黃褐色	3mm以下の砂粒を含む(長石・角閃石・雲母)	良好	口縁部片 黒斑有り	
72 同上	口径 20.6		口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	灰黃褐色	4mm以下の砂粒を含む(長石・角閃石・雲母)	良好	口縁部片 すす村着	
73 同上	底径 5.2		外面ナデ、内面へラナデ・指押さえ。	外 淡褐色 内 黑褐色	7mm以下の砂粒を含む(長石・角閃石・雲母)	良好	底部のみ 黒斑有り へら記号有り	
74 同上	底径 4.8		外面へラナデ・指押さえ、内面へラナデ。	外 灰黃褐色 ～淡黃褐色 内 淡黃褐色	3mm以下の砂粒を含む(長石・角閃石・雲母)	良好	底部のみ すす村着	

3.まとめ

今回の調査地は、府立八尾北高校の西に接しており、昭和58年度に大阪府教育委員会が行った調査で検出された遺構の拡がりを確認する調査となった。その調査では弥生時代前期から中世に至る遺構・遺物が多種多様に見つかっており、それらの遺構と関連するものが今回の調査で検出できると考えられたが、標高4.2~3.6m以下に堆積する弥生時代後期に埋没した自然河川及びこの河川埋没後に形成された弥生時代後期末以降の遺構が遺存する土層を確認したにとどまった。自然河川は調査区の全体で確認されており、規模の全容を確認することはできなかったが、府立八尾北高校新設に伴う調査では南東-北西の方向に大きい河川跡であることが確認されている。また、弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式期）の時期の包含層は第4トレーナー～第6トレーナーで検出している。第1トレーナー～第3トレーナーでは確認できず、この時期の拡がりの西端部を確認することができた。第5トレーナー・第6トレーナーで確認されたベース面は東部で一段（30~40cm）高くなっている、当初、方形周溝墓の盛土と考えられたが方形に巡る溝はなかった。第4トレーナーでは東側より低く水平堆積を呈しており、遺構も存在しない。古墳時代前期（布留式期）は包含層を調査区全面で確認している。遺構は第1トレーナー～第4トレーナーで焼土坑・小穴を検出しており、集落遺構に関連するものであろう。古墳時代中期では第1トレーナーで須恵器杯身を人為的に置いたと考えられる土坑を検出している。奈良時代から平安時代の時期の遺構は学校側で建物跡などを検出しているが当調査では検出できなかった。鎌倉時代では遺構そのものは検出していないが、調査区中央で烟として現在まで使用されていた一段高い（約40cm）長方形の部分がある。その部分を調査（第3トレーナー）した結果、厚さ約60cmの堅く締まった上層を検出した。この土層は整地された層と考えられる。近世では井戸3基を検出した。これらは灌溉用に使用されたものであろう。調査区南部では同形態の井戸が今でも遺存している。



第1 トレンチ（南から）



第1 トレンチ SK-1（東から）



第2トレンチ（南から）



第2トレンチ SK-5（西から）



第2 トレンチ SD-2・3、SK-4 (南西から)



第3 トレンチ (南から)



第3トレンチ SE-3 (南東から)



第3トレンチ SE-3 井戸枠 (東から)



第4 トレンチ（南から）



第5 トレンチ上層（南から）



第5トレンチ下層（南から）



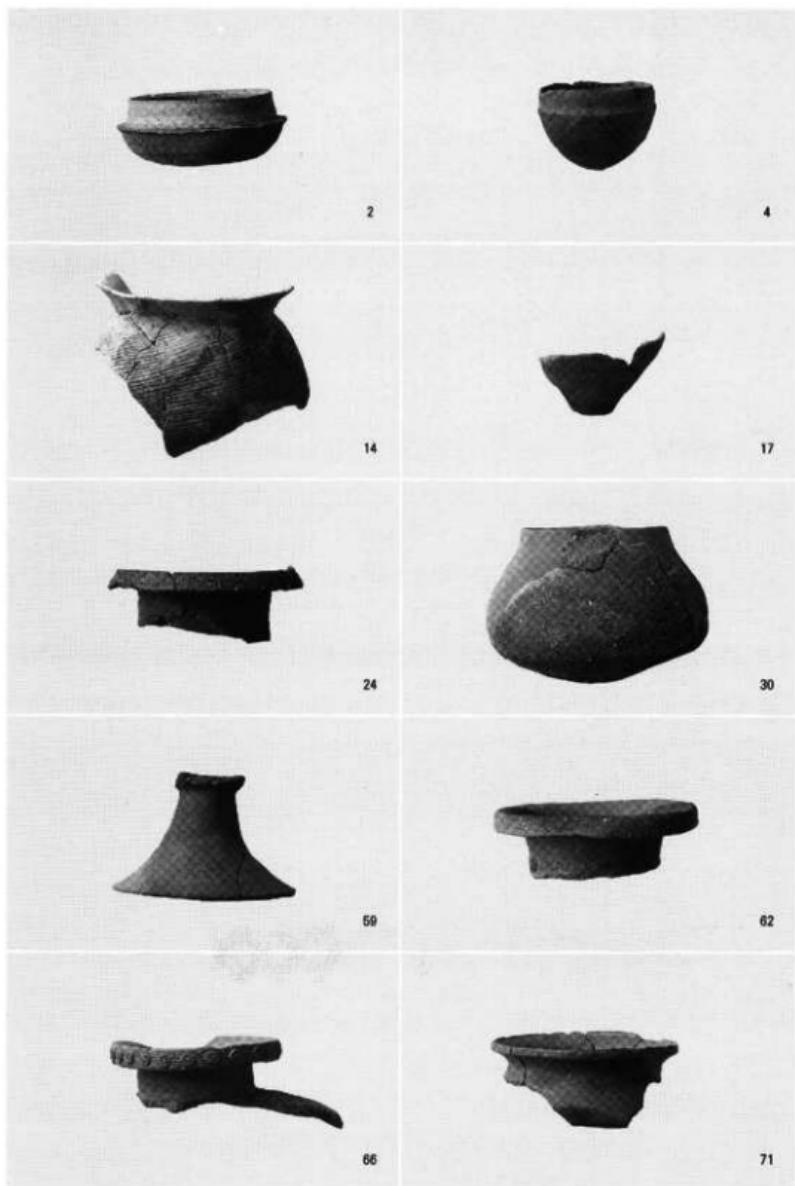
第5トレンチ上層北部（南から）



第6 トレンチ（南から）



第4・5 トレンチ下層確認（西から）



SK-2 (2)、SK-6 (4)、遺構に伴わない出土遺物 第3トレンチ (14・17)、第5トレンチ (24・30・59)、第6トレンチ (62・66・71)



X 大竹西遺跡第2次調査(OTN91-2)

大竹西遺跡

例　　言

1. 本書は、八尾市上尾町8丁目で実施した衛生処理場更新工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する大竹西遺跡第2次調査(OTN91-2)の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年12月2日～平成4年1月31日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は671m²である。
1. 本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレースー市森千恵子、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

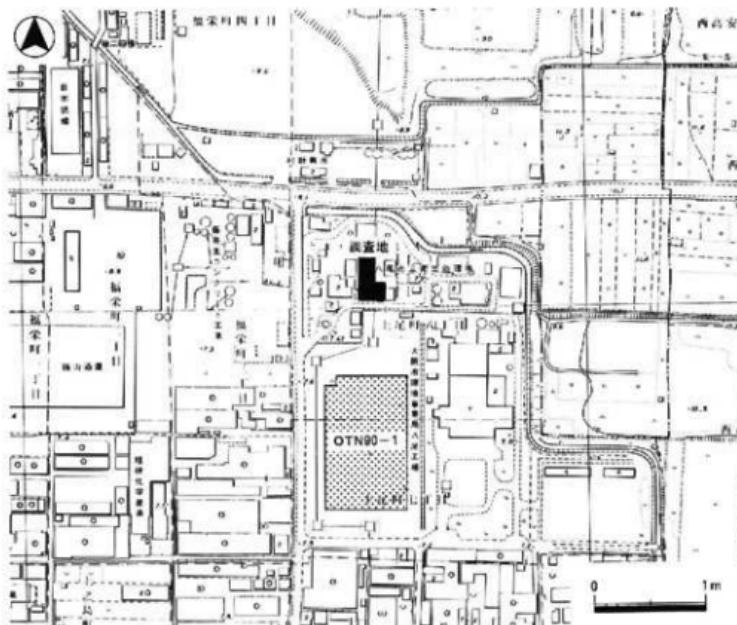
1.はじめに.....	99
2.調査概要.....	100
1) 調査の方法と経過.....	100
2) 基本層序.....	101
3) 検出遺構と出土遺物.....	102
3.まとめ.....	106

X 大竹西遺跡第2次調査 (OTN91-2)

1. はじめに

大竹西遺跡は八尾市の北西部の大竹・西高安町・上尾町にあたり、生駒山地西麓の扇状地先端部から河内平野に拡がる縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡である。

当遺跡の周辺には、東に高安古墳群、西に恩智川を挟んで福万寺遺跡、北に池島遺跡などが存在している。高安古墳群では、古墳時代の前期古墳から終末期古墳が築造されている。福万寺遺跡では、昭和57年度に実施した学校新設に伴う発掘調査で鎌倉時代の屋敷跡が検出されている。福万寺・池島遺跡では、現在大阪文化財センターにより実施されている恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査で弥生時代前期のしがらみ、弥生時代後期の水田に伴う木製導水管、古墳時代の玉作りに関連する集落、奈良時代から江戸時代の水田等が検出されている。



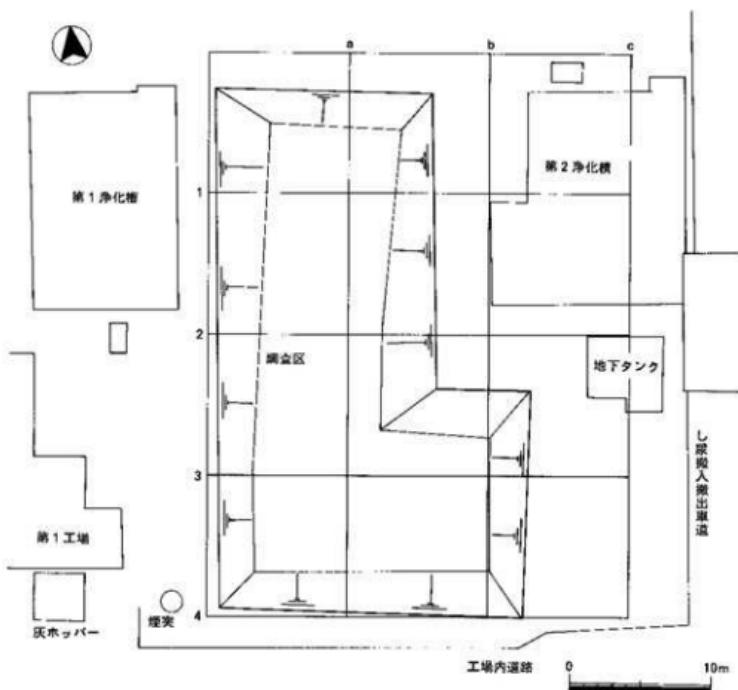
第1図 調査位置図

当遺跡は、昭和63年度に実施された府立八尾学園建設に伴う発掘調査で発見された遺跡である。平成2年度に当調査研究会が実施した第1次調査(OTN90-1)では弥生時代前期～室町時代の遺構・遺物を多数検出しており、その北部にあたるのが今回の調査地(上尾町8丁目)である。現地表面の高さは、海拔7.5～8.0m前後で水越川の左岸に位置する(第1図)。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

当調査は八尾市と八尾市教育委員会・㈱八尾市文化財調査研究会との三者で協定書を締結して調査を実施した。調査期間は、平成3年12月2日～平成4年1月31日である。調査面積は、671m²を測る。



第2図 調査区設定図及び区割図

当遺跡では平成2年～3年度にかけて当調査研究会が発掘調査を実施しており、その調査成果で弥生時代前期から室町時代に至る遺構・遺物を検出している。今回の調査は、その調査地の北方に所在し、当遺跡内で当調査研究会が実施した第2次調査にあたる。

調査にあたっては、調査地の開発部分に対しL字形の調査区を設定した。区割りは調査区南東部を基点にして、トレント全体を跨ぐ範囲に10m四方角の区画を行った。区名は南北線が西からアルファベットのa～f、東西線が北から数字の1～4と呼称し、交差する北西側を優先し、1a～4c区と呼称して調査を進めた(第2図)。

調査区は第1次調査の北部に隣接しており、関連する遺構の検出が予測されたので第1次調査の成果とともに機械掘削及び人力掘削を慎重に実施した。その結果、現地表下3.0～5.6m(標高5.0～2.4m)までの土層に弥生時代前期から室町時代の遺構面及び土層を確認した。

2) 基本層序

調査では現地表下約6.0mまでに堆積する土層で普遍的に存在する24層を基本層序とした(第3図)。以下、各上層について記す。

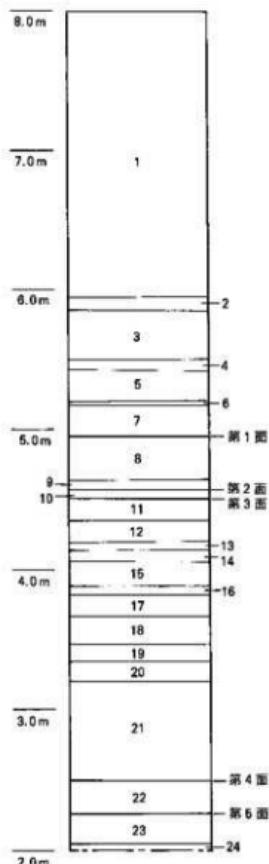
第1層 盛土。層厚1.8～2.3m。衛生処理建設の際の盛り土で、層厚は南部が浅く、北部が深い。現地表面高でも南部より北部が20～30cm高い。

第2層 旧耕土。層厚5～15cm。埋め立て前までの耕作土であるが、調査区の一部にしか残っておらず、ほとんどは埋め立て時に削平されたようである。

第3層 灰青色粘質土。層厚30～40cm。酸化鉄を含む。

第4層 灰色粘質シルト。層厚5～15cm。自然堆積土である。

第5層 淡灰褐色シルト。層厚20～25cm。東西方向

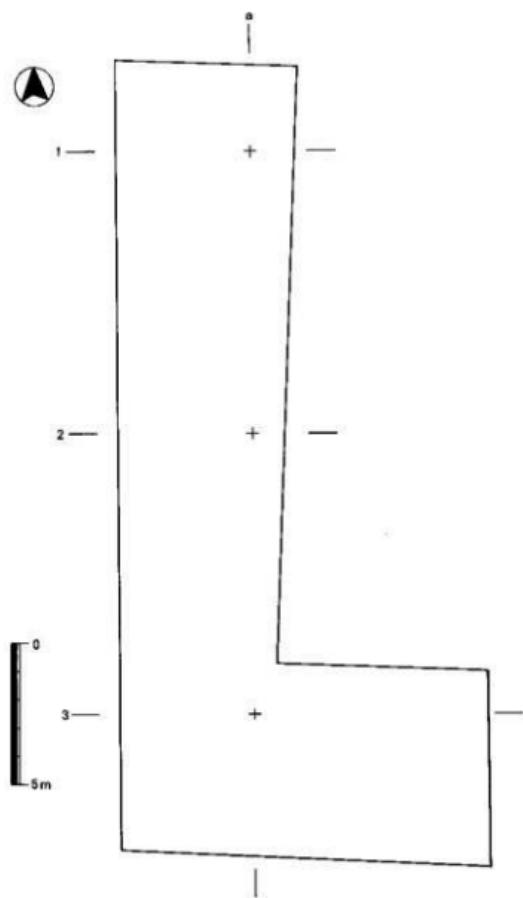


第3図 基本層序柱状図 (S = 1/80)

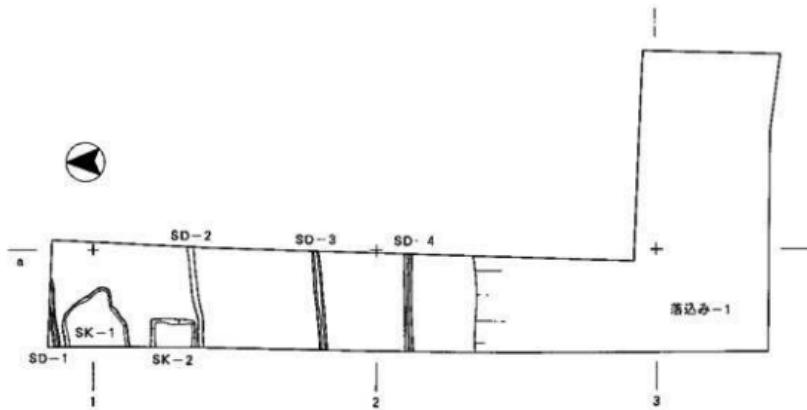
- の溝状に深んでおり、第7層を削平している。調査区では3条みられる。
- 第6層 青褐色細砂混シルト。層厚10~30cm。
- 第7層 茶灰色細砂。層厚10~30cm。1~5mmの砂粒を中心とした洪水層である。第5層により部分的に削平されている。
- 第8層 灰色粘土。層厚35~45cm。室町時代の水田耕作土で、上面には人や牛の足跡が無数にみられる。この上面を第1面とした。
- 第9層 明灰色細砂混粘質土。層厚10~30cm。弥生時代中期末の洪水層で、この上面から古墳時代前期から鎌倉時代の遺構を検出した。この上面を第2面とした。
- 第10層 灰褐色細砂。層厚20~30cm。弥生時代中期の水田耕作土であるが、北部のごく一部で確認しただけで南部は削平されてない。第3面とした。
- 第11層 灰青褐色細砂。層厚5~10cm。洪水等による堆積層。
- 第12層 暗灰青色粘土。層厚10cm。――
- 第13層 灰黒色シルト。層厚10~20cm。
- 第14層 淡灰青色細砂。層厚5~10cm。
- 第15層 暗灰色粘質土。層厚20cm。自然堆積層で水平堆積。
- 第16層 灰黒色粘土。層厚40cm。
- 第17層 灰青色粘土。層厚15~20cm。
- 第18層 淡灰青色微砂。層厚20~25cm。――
- 第19層 暗灰色シルト。層厚10~15cm。北西へ低くなっている。
- 第20層 灰青色粘質土。層厚10~20cm。北西へ低くなっている。
- 第21層 灰色粘土。層厚50~80cm。植物遺体及び動物遺体が含まれている。
- 第22層 黒灰色粘質土。層厚30cm。弥生時代中期前半の水田耕作土と考えられる。この上面を第4面とした。
- 第23層 暗灰色細砂混シルト。層厚20cm。弥生時代前期の遺構面と考えられるが、調査区では遺構はなかった。この上面を第5面とした。
- 第24層 淡青灰色粘質シルト。層厚30cm以上。無遺物層である。

3) 検出遺構と出土遺物

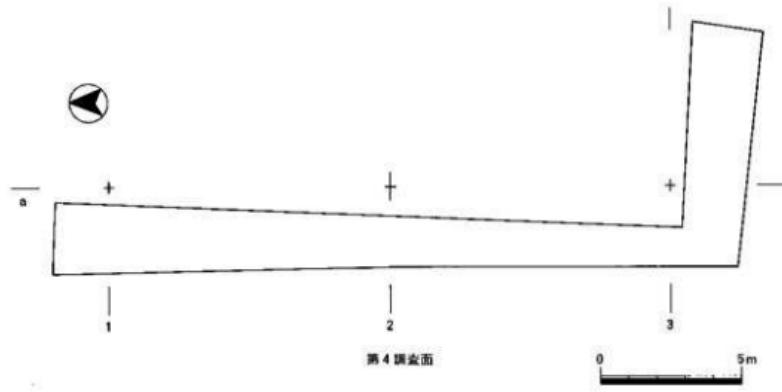
調査の結果、断面観察から第1次調査地の土層状況とほぼ同様に続いていることが確認された。遺構及び遺構面は弥生時代前期から室町時代に至る時期のものを検出した。第23層上面では弥生時代前期の遺構面（第5面）、その上面では弥生時代中期前半の遺構面（第4面）、第11層上面では弥生時代中期末の遺構面（第3面）、第10層では時期不明の上坑2基・鎌倉時代以



第4図 第1調査面平面図



第2図 斜面



第5図 検出構平面図

降の溝4条・落込み1箇所（第2面）の遺構と古墳時代から鎌倉時代の遺物、第8層上面では室町時代の水田遺構（第1面）を検出した。以下、各遺構面について記す。

・第1面—第8層上面で室町時代の水田遺構を検出した。水田面は標高5.0mを測る。畦畔は調査区にはなかったが、平面凹形及び梢凹形の足跡状の窪みが多数みられた。

・第2面—第10層上面で切り込む土坑2基（SK-1・SK-2）・溝4条（SD-1～SD-4）・落込み1箇所（落込み-1）を検出した。

SK-1

調査区北東部（1a区）で検出した。平面の形状は不定形を呈し、東西2m以上、南北2.3m、深さ0.1mを測る。断面は逆台形を呈し、茶灰色粘質シルト土の一層が堆積している。遺物はなかった。

SK-2

SK-1の南部約1mの所で検出した。平面の形状は隅丸方形を呈し、東西1.0m以上、南北2.0m、深さ0.12mを測る。断面は逆台形を呈し、堆積土は灰茶色細砂混粘質土の一層である。遺物はなかった。

落込み-1

調査区の南部で検出した。調査区の南半部がすべて落ち込んでおり、浅いところで20cm、深いところで40cmの深さを測る。南部の調査区外に至る。遺物は出土していないが、第1次調査で類似する遺構があり、時期は鎌倉時代ごろであろう。

SD-1～SD-4

調査区の北部（1a・2s区）で検出した。溝の法量一覧表

遺構番号	区名	方 向	幅(cm)	深さ(cm)	断面形	堆 積 上
SD-1	1a区	東-西	12~24	4~5	逆台形	灰色粘土
SD-2	2s区	東-西	16~23	5~6	逆台形	灰色粘土
SD-3	2s区	東-西	20~26	5~6	逆台形	灰色粘土
SD-4	3a区	東-西	18~26	6~9	逆台形	灰色粘土

した。溝は4条で2.0~2.2mの間隔があり、方向はすべて東西方向を示す。規模は幅12~26cm、深さ4~9cmを測る。断面の形状は逆台形を呈し、灰色粘土が堆積している。遺物は出土していないが、第1次調査でも検出している耕作に関連する溝であろう。

・第3面

第11層上面で弥生時代中期末の水田面を北部の一部で確認した。南部は落込み-1によって削平されている。検出した水田面では足跡状の窪みがみられたが、水田を区画する畦畔はなかった。

・第4面

第22層上面で弥生時代中期前半の水田面を確認した。

・第5面

第23層上面で弥生時代前期の遺構面を確認したが、遺構はなかった。

3.まとめ

今回の調査地は第1次調査地に隣接しており、その調査で検出された遺構が続くことが予想されたが、調査の結果、遺構・遺物は希薄で明確に検出できたのは第1・2面で、その他は第1次調査で検出されている遺構面と対応する上層だけであった。以下、各時代ごとに第1次調査の成果と比較して記す。

弥生時代前期から中期前半の時期は遺構及び包含層である第22層黒灰色粘質土が北方の調査地へ続いていることが確認されただけで、詳細なことは不明である。

弥生時代中末期の時期は調査区北部で一部検出しただけであるが、上層として続いていることが確認された。

弥生時代後期から鎌倉時代の時期はほぼ同一面で確認されていたが、今回の調査では弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代後期・奈良時代の時期のものは確認されなかった。出土遺物としても布留式甕の小片と鎌倉時代の瓦器の上器がごく少量出土しているだけである。布留式甕で考えると第1次調査地の北部が集落跡の中心であったのに対し、今回の調査区は集落の外れにあたるようである。その他の時期のものにも言えることである。

室町時代の時期は洪水によって埋まった水田遺構が今回の調査地にも続いていることが明らかになった。

これらを総合して調査区の性格を考えると、調査区は周辺地形からみて一番低い位置に存在しており、大竹西遺跡の中では居住区より水田耕作などの生産域として利用されたかったようである。

以上、今回の調査の結果である。

参考文献

- 八尾市教育委員会「八尾市内道路平成元年度発掘調査報告Ⅱ」『大竹西遺跡（89-397）の調査』（財）八尾市文化財調査報告21 1989
- （財）八尾市文化財調査研究会「平成2年度 （財）八尾市文化財調査研究会事業報告」『大竹西遺跡』1991



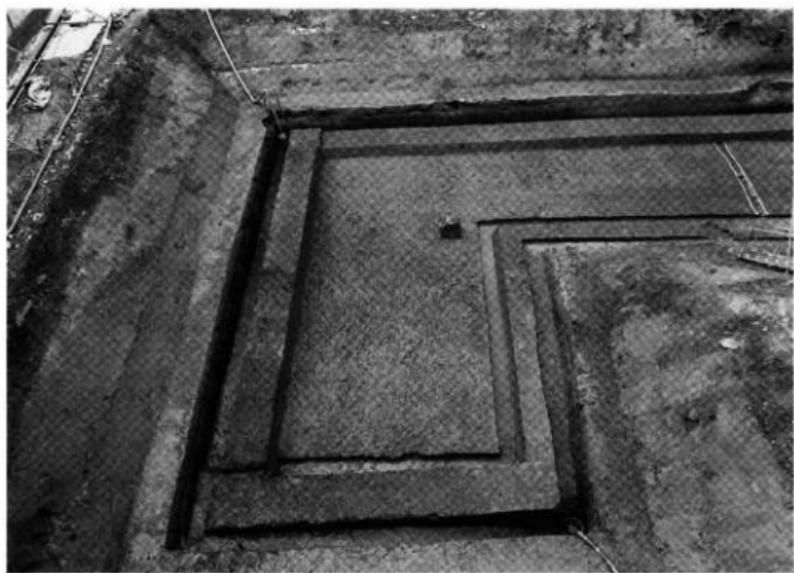
調査面（北から）



第4調査面（東から）



第2調査面（北から）



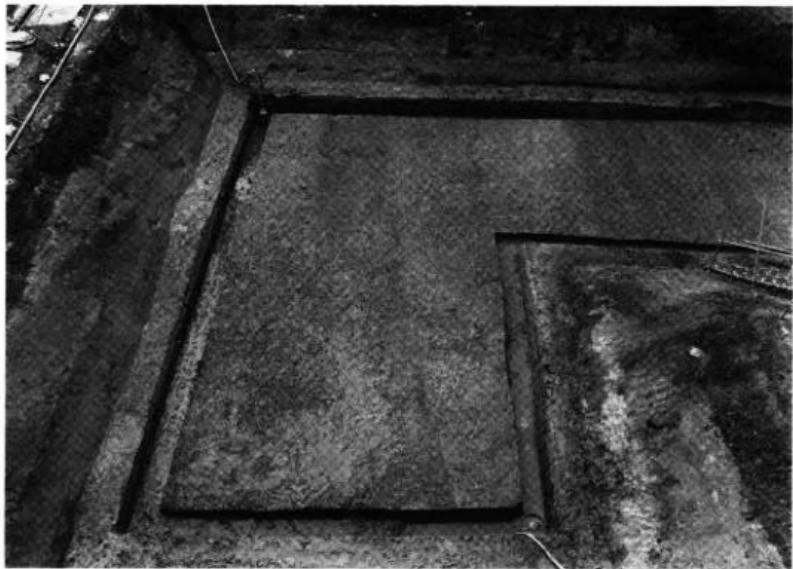
第2調査面（東から）



第2調査面 SK1・SK2 (東から)



第1調査面 (北から)



第1調査面(東から)



第1調査面北部足跡状況(東から)

XI 東郷遺跡第38次調査（T G 91-38）

例　　言

1. 本書は、八尾市高美町5丁目7番地光町公園内で実施した防火水槽設置工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第38次調査（T.G91-38）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市消防本部から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成4年2月19日～平成4年2月20日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積9m²を測る。なお、調査においては垣内洋平・福島友香・松田恵一が参加した。
1. 本書に関わる業務は、岡田が担当した。

本　文　目　次

1.はじめ	111
2.調査概要	111
1) 調査方法と経過	111
2) 基本層序	112
3) 検出構造と出土遺物	112
3.まとめ	113

X I 東郷遺跡第38次調査 (T G 91-38)

1. はじめに

東郷遺跡は、現在の行政区画上では八尾市東本町・北本町・光町・桜ヶ丘・莊内町の一带に広がる弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。

当遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれたた沖積地上に位置し、周辺には南東に小阪合遺跡、南に成法寺遺跡、北西に宮町遺跡、北に菅振遺跡が存在する。

当遺跡内では昭和46年の八尾東本町2丁目における奈良時代の墨書人面上器出土以来、現在(平成3年)までに、市教育委員会・当調査研究会によって37件の発掘調査が実施してきた。

今回の発掘調査は、防火水槽設置工事に伴うもので、八尾市消防本部・八尾市教育委員会及び(財)八尾市文化財調査研究会との間で協定書を締結して実施したものである。

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は光町公園内における防火水槽設置工事に伴うもので、公園内北東部の工事



第1図 調査位置図

部分にあたるところに 3×3 m のグリッドを設定した。掘削に際しては、現地表土下 1.0 m 迄機械掘削したところ、中世（室町時代）の遺物を包蔵する層を確認したので、それより以下の工事掘削範囲である 1.0 m を層理にしたがって人力掘削を行い、遺構・遺物の検出に務めた。その結果、現地表下 1.8 m 前後（標高 5.9 m 前後）の第 9 層上面において、古墳時代前期初頭（庄内式期）に比定される溝 2 条（SD-1、SD-2）を検出した。

2) 基本層序

- 第 1 層 盛土及び擾乱。層厚 1.0 m 前後。公園造成時の堆積土。上面の標高 7.7 m 前後。
- 第 2 層 旧耕土。層厚 0.05 ~ 0.1 m。
- 第 3 層 床土。層厚 0.05 ~ 0.1 m。
- 第 4 層 明褐色砂礫混粘質土。層厚 0.1 ~ 0.3 m。中世の遺物（瓦器片、土師器片等）を少量含む。
- 第 5 層 暗褐色砂礫混粘質土。層厚 0.1 ~ 0.2 m。
- 第 6 層 黒灰色微砂混粘質土。層厚 0.1 ~ 0.2 m。
- 第 7 層 黒色粘質土。層厚 0.1 前後。植物遺体を多量含む。
- 第 8 層 灰褐色粘土。層厚 0.1 ~ 0.2 m。古墳時代前期の遺物を少量含む。
- 第 9 層 黄灰色シルト。層厚 0.2 m 以上。上面が古墳時代前期遺構検出面。
- 第 10 層 暗灰色粘土。層厚 0.1 ~ 0.2 m。炭化物を少量含む。SD-1、SD-2 の埋土。

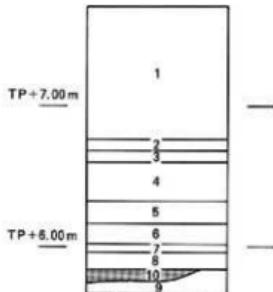
3) 検出遺構・出土遺物

SD-1

グリッド内北部で検出した。北東 - 西方向に伸びると考えられるが、溝の北肩が調査区外に至るため全容は不明である。検出長 1.9 m、幅 0.25 ~ 0.6 m、深さ 0.1 m 前後を測る。埋土は暗灰色粘土で、炭化物を少量含む。遺物は庄内式壺の小破片が極少量出土した。

SD-2

グリッド内南部で検出した。東西方向に伸びると考えられるが、溝の南肩が調査区外に至るため全容は不明である。検出長 1.9 m、幅 0.9 ~ 1.35 m、深さ 0.1 m 前後を測る。埋土は暗灰色粘土で、炭化物を少量含む。遺物は古墳時代前期初頭に比定される土師器の小破片が少量出土した。



第 2 図 基本層序模式図 (1 / 40)

3. まとめ

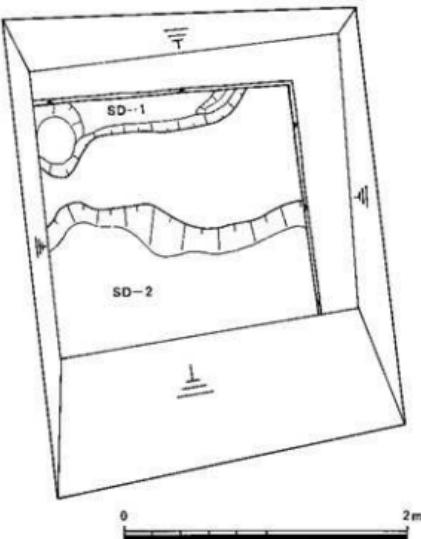
今回の調査は、小面積で遺物量も少なく、そのほとんどが破片であり図化できるものはなかった。

しかし、成果としては中世（室町時代）の遺物包含層が確認でき、遺構こそ検出できなかったが周辺の調査結果からみると集落の存在を想定させるものと考えられる。

古墳時代前期初頭に比定されるSD-1、SD-2の遺構に関してみると、当調査地の南東に位置する第24次の調査結果から、ほぼ同一時期とみられる遺構・遺物が検出されており、この時期の遺構の北西部への広がりは必然である。

下層確認では砂とシルトの互層が1m以上堆積しており、湧水が

著しかった。周辺の状況からみておそらく河川跡と考えられるが、これらの層内には遺物は含まれていなかった。



第3図 調査区平面図



調査面全景（東から）

X II 竜華寺跡第2次調査（R K91-2）

第三章

例 言

1. 本書は、八尾市明美町2丁目36番2で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する竜華寺跡第2次調査（RK91-2）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会がノブリード産業㈱から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年10月19日～10月25日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は70m²である。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－市森千恵子・西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－村田英子、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本 文 目 次

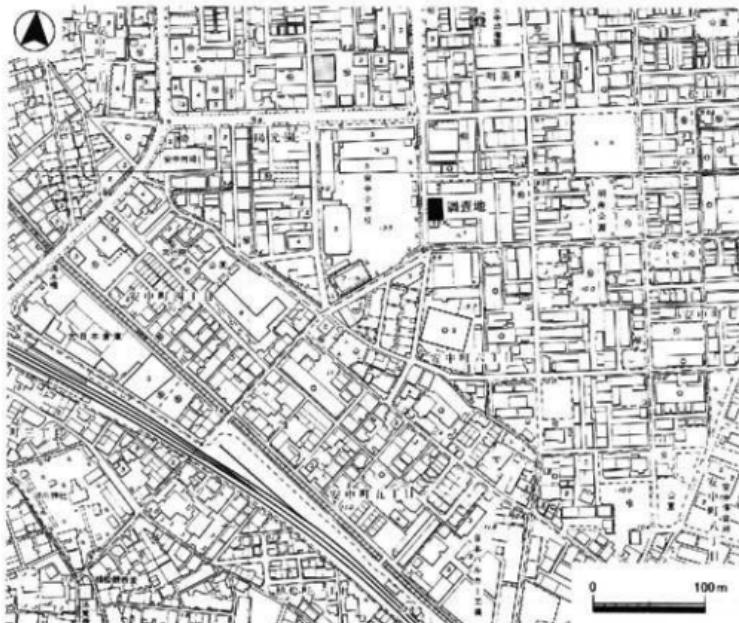
1.はじめに.....	115
2.調査概要.....	116
1) 調査の方法と経過.....	116
2) 基本層序.....	116
3) 検出遺構と出土遺物.....	118
4) 出土遺物観察表.....	123
3.まとめ.....	126

X II 竜華寺跡第2次調査 (R K91-2)

1. はじめに

竜華寺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川の右岸にある冲積地で、長瀬川の流路が北西から北方に変る屈曲部に位置しており、自然堤防と低平面の境にある。現在の行政区画では、陽光園・安中町6丁目一部に所在している。竜華寺跡は安中廃寺とも呼ばれ、現在の市立安中小学校庭には「古蹟 竜華寺跡」の石碑が保存されている。竜華寺は「統日本紀」にその名がみられるが、過去に実施された発掘調査では奈良時代に遡る成果は得られていない。鎌倉時代以降の造構・遺物の検出に止まっている。

今回の調査地は明美町2丁目36-2で、今回の調査では竜華寺跡の範囲とも接している。試掘調査の成果では竜華寺跡に関連するものが確認されたので、竜華寺跡として捉えている。



第1図 調査地位図

2. 調査概要

(1) 調査方法と経過

調査は、事業者と八尾市教育委員会・鶴八尾市文化財調査研究会が協定書を締結して調査を実施した。調査期間は平成3年10月19日～10月25日である。調査面積は70m²である。

当遺跡では八尾市教育委員会・当調査研究会がそれぞれ調査主体となり発掘調査を実施しており、鎌倉時代から室町時代の遺構を検出している。今回の調査は、当遺跡内で当調査研究会が実施した第2次調査である。

調査にあたっては、調査地の開発部分に対し南北方向に長いトレンチ2本を設定し、東トレンチ・西トレンチと呼称して調査を実施した。

調査区は、機械掘削（約1.4～1.6m）及び人力掘削（約0.9～1.1m）を慎重に行った。その結果、鎌倉時代後期から室町時代の遺物が現地表下約1.5m（標高8.0m）から約2.5mまでの土層内から出土した。

2) 基本層序

調査区の基本層序（第2図）は次のとおりである。

第1層 盛上。層厚50cm。現在の整地層である。

第2層 IH耕土。層厚5～20cm。東西方向の畝の高まりがみられる。

第3層 灰青色砂質土。層厚40cm。調査区で水平に堆している。

第4層 茶灰色粘砂。層厚15～20cm。鉄分が多く含まれている。また遺物もごく少量出土している。

第5層 桃灰色微砂。層厚20cm。

第6層 淡灰褐色細砂。層厚15cm。

第7層 淡灰青色シルト。層厚20cm。

第8層 灰青粘土。層厚10cm。部分的に堆積している層である。

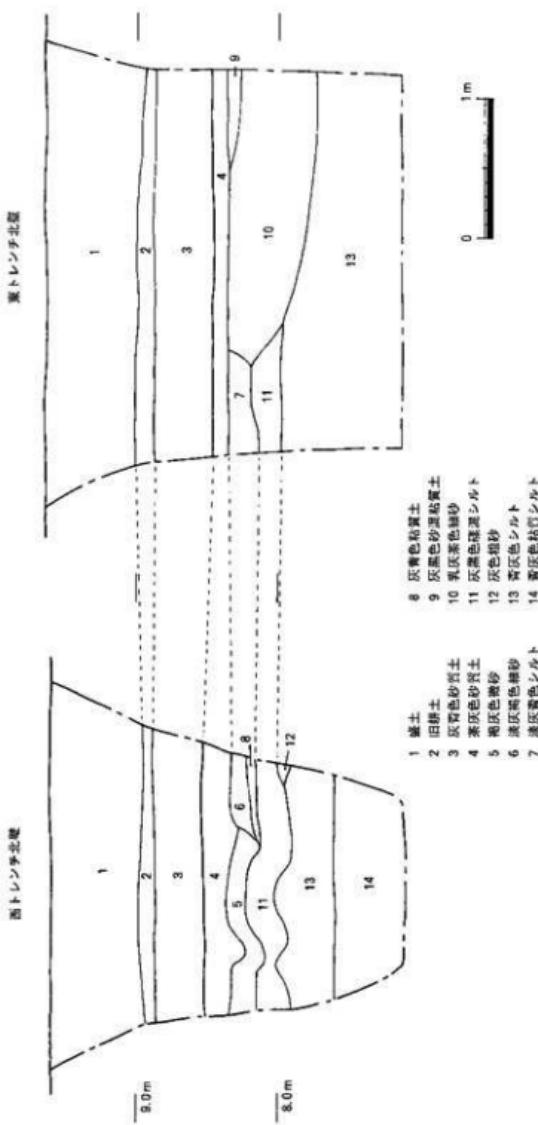
第9層 灰黒色～暗灰色粘質シルト。層厚5～30cm。植物遺体が多量に含まれている。それとともに土器類も多量に含んでいた。

第10層 乳褐色細砂。層厚10～50cm。東トレンチのみに堆積する。中央部分を南南西～北北西方向の溝状になっており、一時的に堆積した層である。

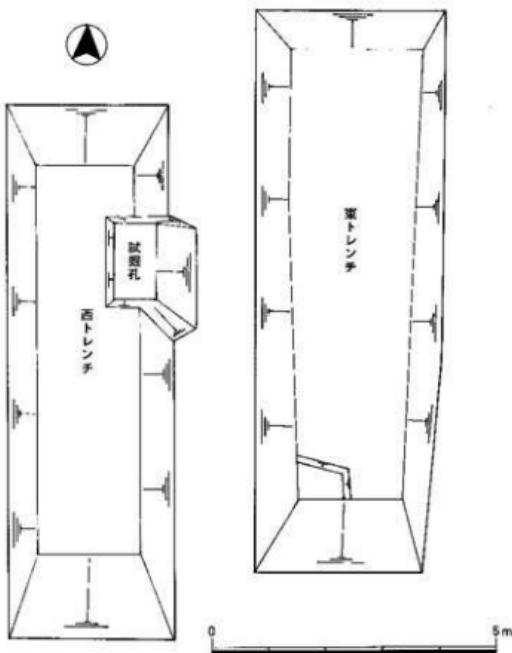
第11層 暗灰青色疊混粘質土。層厚10～30cm。土師質小皿・羽釜などが少量含まれる。

第12層 灰色粗砂。層厚5cm。

第13層 青灰色粘質シルト。層厚30～60cm。木・竹の根株が東トレンチでみられる。土器類は瓦器小皿・椀・羽釜などが含まれる。



第2圖 断面図



第3図 遺構平面図

第14層 暗青灰色粗砂混シルト。層厚0.6m以上。植物遺体や土器類の出土がごく少量になる。

これらの層のうち、第1～3層は調査区全体にみられる基本層である。以下、第4層～第14層は鎌倉時代後期から室町時代の溝状遺構内の堆積土層である。

3) 検出遺構と出土遺物

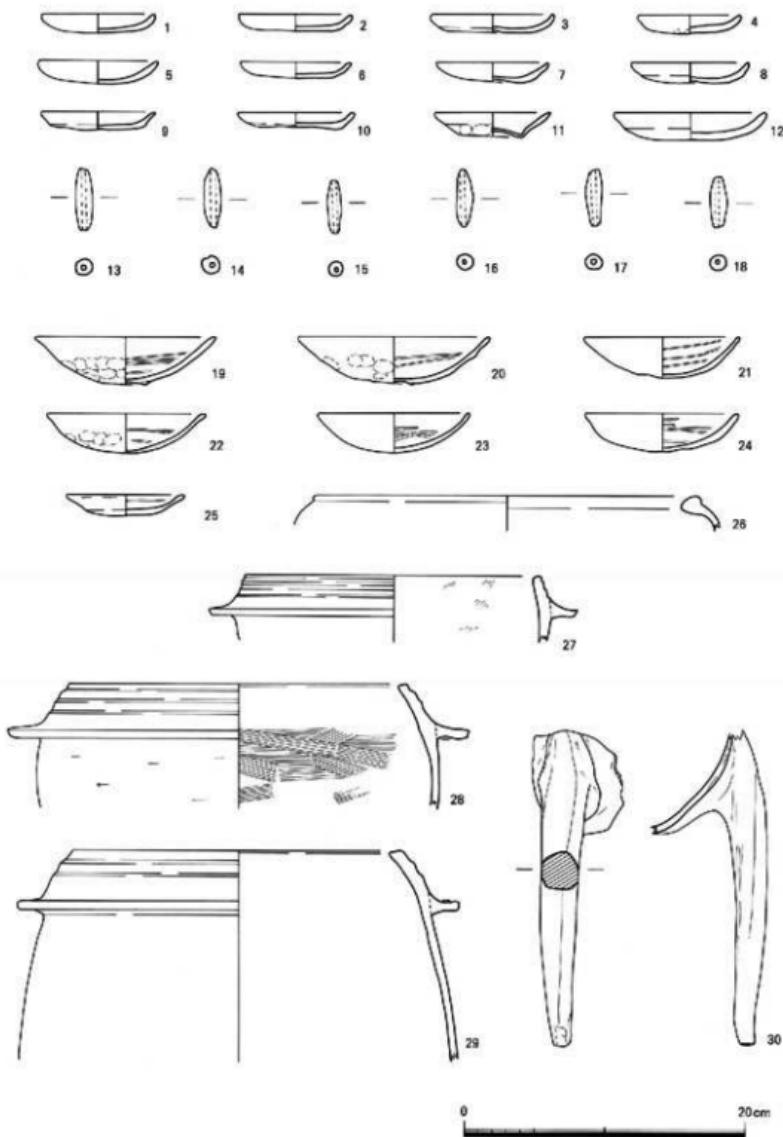
調査では鎌倉時代後期から室町時代の遺構・遺物を検出した。遺構は溝状遺構1条である。出土遺物の総数はコンテナにして4箱分で、ほとんどが土器類である。以下、各トレレンチごとに記す。なお、個々の遺物の法量等については出土遺物観察表に掲載した。

・東トレンチ

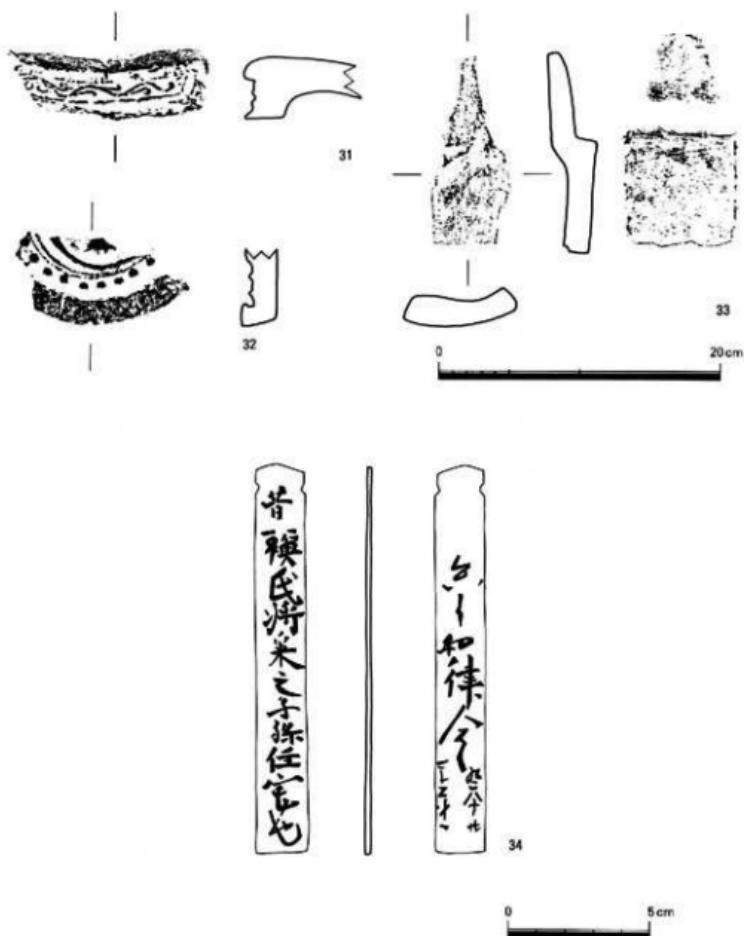
現地表下約1.5m（標高8.0m）から2.5mまでの堆積土内から鎌倉時代後期から室町時代の遺物が多量に出土した。遺物は土器類・土製品・木製品・瓦類である。特に上層の暗灰色粘質土内がもっとも多く含んでいた。出土した遺物を図示されたものについて記す。土師器は小皿（1～12）である。土師小皿11は上層の出土で、へそ皿と言われているものである。土製品は土鐘（13～18）である。瓦器は椀（19～24）・小皿（25）・甕（26）・三足釜（27～30）である。瓦は軒平瓦（31）・軒丸瓦（32・33）で、31は唐草文のある当瓦、32は巴文のある当瓦である。木製品は木簡（34）である。34は北東側の現地表下約1.7mの暗灰青色粘質シルト内から出土した。この木簡は中世を代表する「呪符木簡」で、その中でも「渡符木簡」としての意味をもつ、まじない札として使ったものである。形状は薄い長方形の板に加工し、片方の端部をやや傘状に削り、その直下の両端に少しえりぐりをいれている。おそらくそこにひものようなものを縛り付けられるようにしたものであろう。大きさは縦13.8cm、横1.8cm、厚さ0.2cmを測る。墨書きは板の両面にあり、表面の面には「昔蘇民将来之子孫住宅也」、裏側の面には「急々如律令」とその下に小さな字で数字2行が書かれている。右側が「九九八十一」、左側が天地を逆にして「八九七十二」である。内容文は表側に書かれている「蘇民将来」の文字は中国・朝鮮から伝わってきた物語の人物で、古くは『越後国風土記』に掲載されている。この「蘇民将来の子孫の住宅なり」と書いた札をもっていれば災難から逃れられるという信仰が生まれたのである。裏側に書かれた「急々如律令」は中国の漢代で公文書の文末につけて「この主旨を心得て、早急に、律令（法律）のように早く行け」という命令に使われた文句で、その後、願い事が早くかないますようにという意味になったようである。その下の数字は陽の最大数が「九」、陰の最大数が「八」で、それぞれ最大限度まで合わせた数字を呪符として使っており、上に書かれている呪符をさらに強めるものとして書かれたものである。また「蘇民将来」と書かれた木簡の出土例は、この竜華寺跡を含め平成3年度までに全国で11遺跡から発見されている。以下に掲載しているのがその一覧表である。

「蘇民将来」と墨書きした呪符木簡出土遺跡一覧表

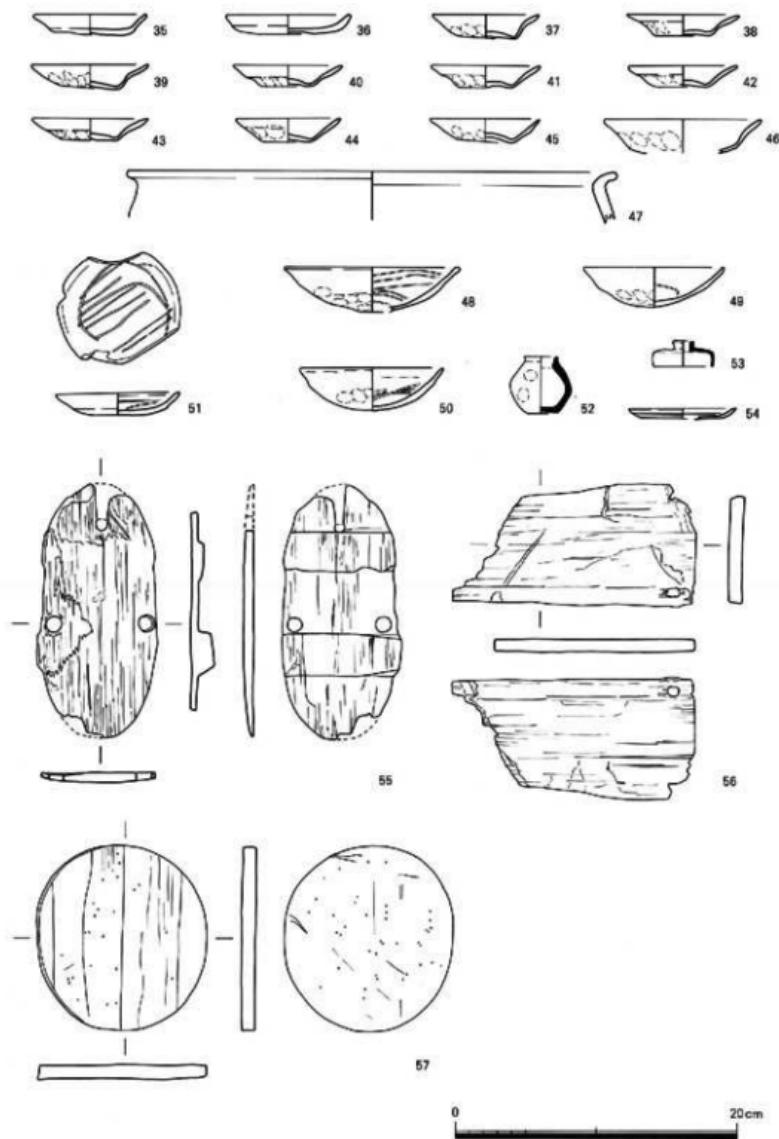
No.	都道府県	市町村	遺跡	時期	遺構	出土点数
1	新潟県	白板市	馬場原敷	室町	集落跡	8
2	新潟県	寺前市	寺前		集落跡	1
3	静岡県	焼津市	道場田	戦国	土坑？	2
4	京都府	京都市中京区	工生寺	平安	寺	1
5	大阪府	東大阪市	西ノ辻	室町	集落跡	1
6	大阪府	東大阪市	觀音寺	室町	集落跡	3
7	大阪府	大阪市	山ノ内	室町	井戸	1
8	大阪府	人阪市	小曾根	室町	井戸	3
9	大阪府	東大阪市	植附	室町	—	1
10	大阪府	吹田市	豊島条里	—	—	1



第4図 東トレンチSD-1出土遺物実測図1



第5図 東トレンチSD-1出土遺物実測図2



第6図 西トレンチ出土遺物実測図

・西トレント

東トレントと同様、現地表下約1.5mから2.5mまでの堆積土内から鎌倉時代後期から室町時代の遺物が出土した。特に上層（第6層灰黒色粘質土）から遺物が多量に出土している。また、調査区中央の下層（第8層上面）で曲物（径35cm、高さ20cm、厚み0.7cm）1基を検出した。遺物は土器・瓦器・須恵器・銅製品・木製品である。出土した遺物で図示できないものについて記す。土器は小皿（35～46）・壺（47）、瓦器は椀（48～50）・小皿（51）、須恵器はミニチュア壺（52）、銅製品はキャップ形（53）で金銀が施されている。表面にはすすぐ付着しており、ランプの部品の一つであろう。木製品は茶托（54）・下駄（55）・板材（56）・桶の底板（57）である。

4) 出土遺物観察表

東トレント

遺物番号 採取番号	器種	法面 (cm)	口径 (cm)	調査・技法等の特徴	色 製	胎 土	焼成	遺存状況	備考
1	小皿 (土器器)	口徑 基高	7.9 1.3	口縁部・体部内外面ヨコナデ、底部内 外面ナデ。	淡灰茶色	0.3mm以下の砂粒を 少量含む（紫母・赤 褐色風化石）	良好	完形	
2	同上	口徑 基高	7.9 1.1	口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナ デ。	淡灰茶色	0.3mm以下の砂粒を 少量含む（紫母・長 石）	良好	完形	
3	同上	口徑 基高	8.4 1.3	口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナ デ・指揮さえ。	淡灰茶色	0.3mm以下の砂粒を 少量含む（紫母・長 石）	良好	完形	
4	同上	口徑 基高	7.2 1.3	口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナ デ・指揮さえ。	淡灰茶色	0.3mm以下の砂粒を 少量含む（紫母・長 石）	良好	完形	
5	同上	口徑 基高	8.2 1.6	口縁部・体部内外面ヨコナデ、底部内 外面ナデ。	淡灰茶色	0.3mm以下の砂粒を 少量含む（紫母・長 石）	良好	完形	
6	同上	口徑 基高	7.8 1.1	口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナ デ。	淡灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む（紫母・長 石）	良好	ほぼ完形	
7	同上	口徑 基高	7.8 1.5	口縁部・体部内外面ヨコナデ、底部内 外面ナデ・指揮さえ。	乳白色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む（紫母・長 石）	良好	ほぼ完形	
8	同上	口徑 基高	8.2 1.4	口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナ デ。	外 淡灰色～ 暗灰色 内 淡灰色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む（紫母・長 石）	良好	ほぼ完形	
9	同上	口徑 基高	7.9 1.3	口縁部・体部内外面ヨコナデ、底部内 外面ナデのち指捺ナ。	淡灰茶色	新良	良好	完形	
10	同上	口徑 基高	8.0 1.2	口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナ デ。	淡灰茶色	0.2mm以下の砂粒を 微量含む（紫母・長 石）	良好	完形	
11	同上	口徑 基高	8.1 1.2	口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナ デのち指捺ナ。	淡灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む（紫母・長 石）	良好	完形	
12	同上	口徑 基高	10.7 1.9	口縁部・体部内外面ヨコナデ、底部内 外面ナデ。	乳白色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む（紫母・長 石）	良好	%	

植物番号 図版番号	品種	法量 (m)	II径 器高	調査・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	保存状況	備考
13 一	土鍋	長さ 1.2 岩高 1.3 孔径 0.4	外側ナゲ。	明茶灰色	0.1mm以下の砂粒を 多量含む(露母・長石)	良好	完形		
14 一	同上	長さ 3.8 岩高 1.0 孔径 0.3	外側ナゲ。	明茶灰色～淡 茶灰色	0.1mm以下の砂粒を 多量含む(露母・長 石)	良好	完形		
15 二	同上	長さ 4.0 岩高 1.2 孔径 0.3	外側ナゲ。	明茶灰色～暗 茶灰色	0.1mm以下の砂粒を 多量含む(露母・長 石)	良好	ほぼ完形		
16 二	同上	長さ 2.3 岩高 1.2 孔径 0.3	外側ナゲ。	明茶灰色～淡 茶灰色	0.1mm以下の砂粒を 多量含む(露母・長 石)	良好	光形		
17 一	同上	長さ 4.1 岩高 1.2 孔径 0.4	外側ナゲ。	明茶灰色～暗 茶灰色	0.1mm以下の砂粒を 多量含む(露母・長 石)	良好	光形		
18 二	同上	長さ 4.5 岩高 1.2 孔径 0.4	外側ナゲ。	明茶灰色～淡 茶灰色	0.1mm以下の砂粒を 多量含む(露母・長 石)	良好	完形		
19 二	桶 (五器)	II径 器高	12.7 3.4	口縁部内外面ヨコナゲ、体部・底部は 内面ナゲのち暗文、外側ナゲのち指押 さえ。	淡灰黑色～白 灰色	0.4mm以下の砂粒を 少量含む。	良好	完形	
20 一	同上	II径 器高	13.4 3.4	口縁部外側ヨコナゲ、体部・底部ナゲ のち指押さえ、内面ナゲのち暗文。	淡灰黑色	0.3mm以下の砂粒を 少量含む。	良好		
21 一	同上	口径 器高	10.8 2.9	口縁部外側ヨコナゲ、体部・底部ナゲ のち指押さえ、内面ナゲのち暗文。	淡灰黑色～白 灰色	0.3mm以下の砂粒を 少量含む。	良好	ほぼ完形	
22 二	桶 (五器)	口径 器高	11.0 2.9	口縁部外側ヨコナゲ、体部・底部ナゲ のち指押さえ、内面ナゲのち暗文。	外 乳灰色～ 明茶灰色 内 乳灰色	0.4mm以下の砂粒を 少量含む(長石)	良好	光形	
23 二	同上	口径 器高	10.6 2.7	口縁部外側ヨコナゲ、底部・底部外 側ナゲ、内面ナゲのち暗文。	淡灰黑色	粗良	良好	光形	
24 二	同上	II径 器高	10.6 2.7	II縁部外側ヨコナゲ、体部・底部外側 ナゲ、内面ナゲのち暗文。	淡灰黑色	0.4mm以下の砂粒を 少量含む。	良好	光形	
25 二	小瓶 (直器)	口径 器高	8.2 1.5	口縁部内外面ヨコナゲ、底部内外面ナ ゲ。	淡灰黑色	粗良	良好	光形	
26 (直器)	口径	27.0		口縁部内外面ヨコナゲ。	暗茶褐色	0.2mm以下の砂粒を 多量含む(石英・長 石・角閃石)	良好	口縁部 % すす村谷	
27 (直器)	口径	20.8		口縁部内外面ヨコナゲ、体部ナゲ、内 面ハケナゲ後ヨコナゲ。	外 淡灰黑色 内 淡灰黑色～ 乳茶褐色	0.4mm以下の砂粒を 少量含む(石英・露 母・長石)	良好	口縁部 % すす村谷	
28 三	同上	口径	24.0	口縁部内外面ヨコナゲ、体部ハケナ ゲり、内面ハケナゲ。	外 淡茶褐色 内 乳茶褐色	0.3mm以下の砂粒を 少量含む(石英・露 母・長石)	良好	口縁部 % すす村谷	
29 三	同上	口径	23.4	口縁部内外面ヨコナゲ、体部内面ハカ ナゲ。	内外 黑灰色 新 白灰色	難焼	良好	口縁部 % すす村谷	
30 二	同上			外側ナゲ。	淡灰褐色～灰 白色	0.3mm以下の砂粒を 少量含む(石英・露 母・長石)	良好	胎部のみ すす村谷	
31	薪平瓦			布目。	暗灰黑色～灰 色	0.3mm以下の砂粒を 多量含む(石英・露 母・長石)	良好	瓦当部 % すす村谷	
32	薪丸瓦				淡灰青色	0.3mm以下の砂粒を 多量含む(石英・露 母・長石)	良好	瓦当部 % すす村谷	
33	同上			口縁部・体部内外側ヨコナゲ、底部内 外面ナゲ。	乳灰茶色～淡 茶灰色	0.1～0.7mm以下の砂 粒を多量含む(石英・ 露母・長石)	良好	% すす村谷	

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm) 器高	口径 口径 器高	調査・技法等の特徴	色調	結土	構成	遺存状況	備考
35 一	小皿 (土師器)	7.8 1.5	口径 口径 器高	口縁部外面ヨコナデ、底部・底面内外 直角ナデ。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	完形	
36 二	同上	8.6 1.4	口径 口径 器高	口縁部外面ヨコナデ、底部内面ナデ。	淡茶灰色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	%	
37 三	同上	7.4 1.7	口径 口径 器高	11縦部外面ヨコナデ、底部外側ナデ、 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	完形	
38 三	同上	7.8 1.5	口径 口径 器高	口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	%	
39 三	同上	8.2 1.8	口径 口径 器高	口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	%	
40 三	同上	7.5 1.5	口径 口径 器高	口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	完形	
41 三	同上	7.5 1.6	口径 口径 器高	口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	完形	
42 二	同上	7.8 1.6	口径 口径 器高	口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	完形	
43 二	同上	8.1 1.5	口径 口径 器高	口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	完形	
44 同上	口径	7.2	口径 口径 器高	口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	%	
45 同上	口径	7.7 1.7	口径 口径 器高	口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	%	
46 同上	口径	11.0	口径 口径 器高	口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	%	
47 小皿 (土師器)	口径	7.8 1.5	口径 口径 器高	口縁部外面ヨコナデ、体部・底面内外 直角ナデ。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	完形	
48 二	同上	8.6 1.4	口径 口径 器高	口縁部外面ヨコナデ、底部内面ナデ	淡茶灰色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	%	
49 三	同上	7.4 1.7	口径 口径 器高	11縦部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	完形	
50 五	同上	7.8 1.5	口径 口径 器高	11縦部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	%	
51 五	同上	8.2 1.8	口径 口径 器高	11縦部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(長石・雲母)	良好	%	
52 五	同上	7.5 1.5	口径 口径 器高	11縦部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ 外面ナデのち指揮され。	乳灰茶色	0.1mm以下の砂粒を 微量含む(雲母・長石)	良好	完形	

出土遺物観察表(木製品)

遺物番号 図版番号	器種	法量(cm)			技法等の特徴	遺存状況	備考
		全長(延)	幅(断面)	厚み			
54	茶托	口径 7.6	0.6		内外面に(葉)溝を施す。	%	
55	下駄	18.0	8.5	1.6	よく使用したと思われ、下駄底がすり減っている。	1片	
56	用途不明の板材	17.2	8.7	1.0	端部角に径7mmの穿孔があげられている。		
57	底板	13.1	12.0	1.0	片面に加工麻がみられる。両面には針のようなもので ついた痕跡がある。	底板部分 では完形	

3. まとめ

今回の調査では、遺構そのものの大きさ・性格を掴むことができなかったが、その堆積土内から多種多様の遺物が出土した。大別すると日常雑器・陶質土器・磁器・瓦・木製品である。日常雑器は上師質の小皿・羽釜、瓦器の小皿・椀・三足釜等、陶質土器は壺・甕、磁器である。これらの遺物からは当時の庶民の日常生活をさぐる上で良好な資料が得られた。特に木簡は歴史的事実を墨書きから裏付けられるとともに、絶対年代を決定する手がかりにもなり、また文献にみえない庶民生活の一端を窺い知る貴重な資料である。

参考文献

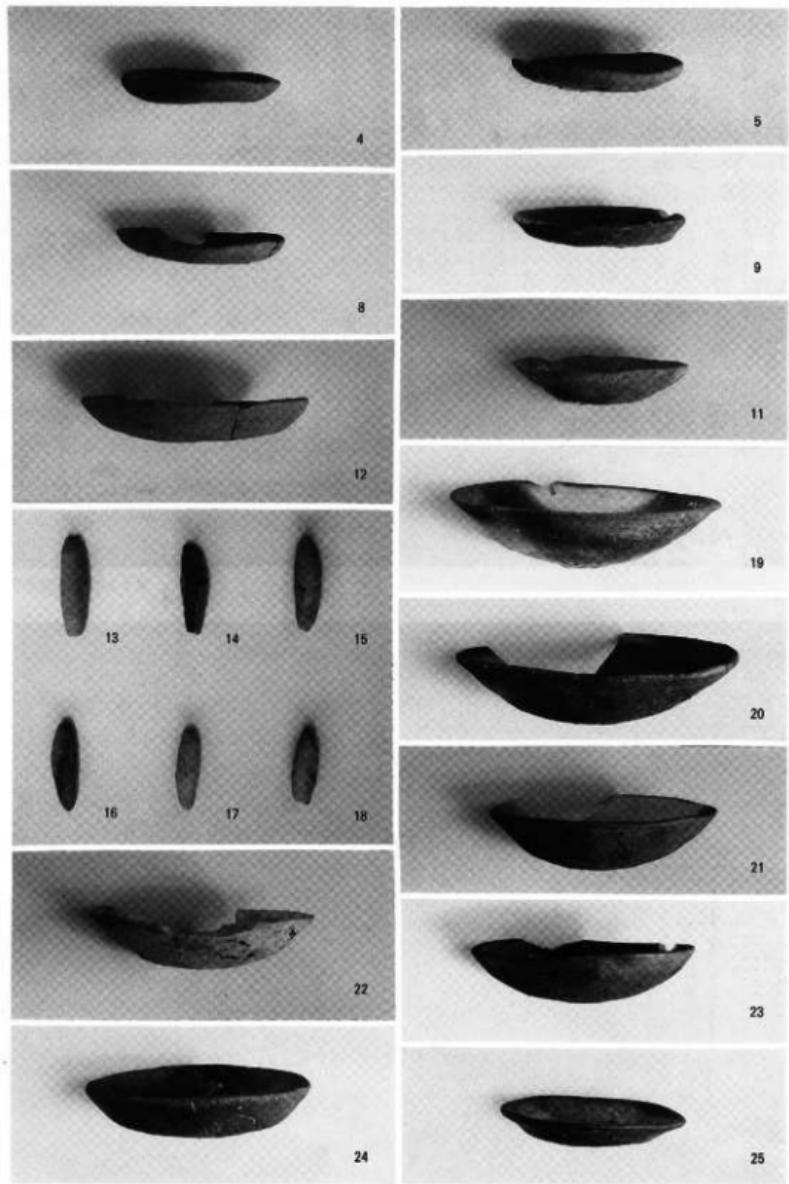
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度」『竜華寺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告28 1990
- (財)大阪市文化財協会「山之内遺跡」
- 大阪府教育委員会「神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・IV」1987.3
- 雄山閣出版「季刊考古学 第18号」「木簡の意義」1987
- 朝日新聞社「週刊朝日百科日本の歴史」「歴史の読み方4 文献史料を読む・古代」通巻732号 1990.1
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「草戸千軒 NO. 150」1986



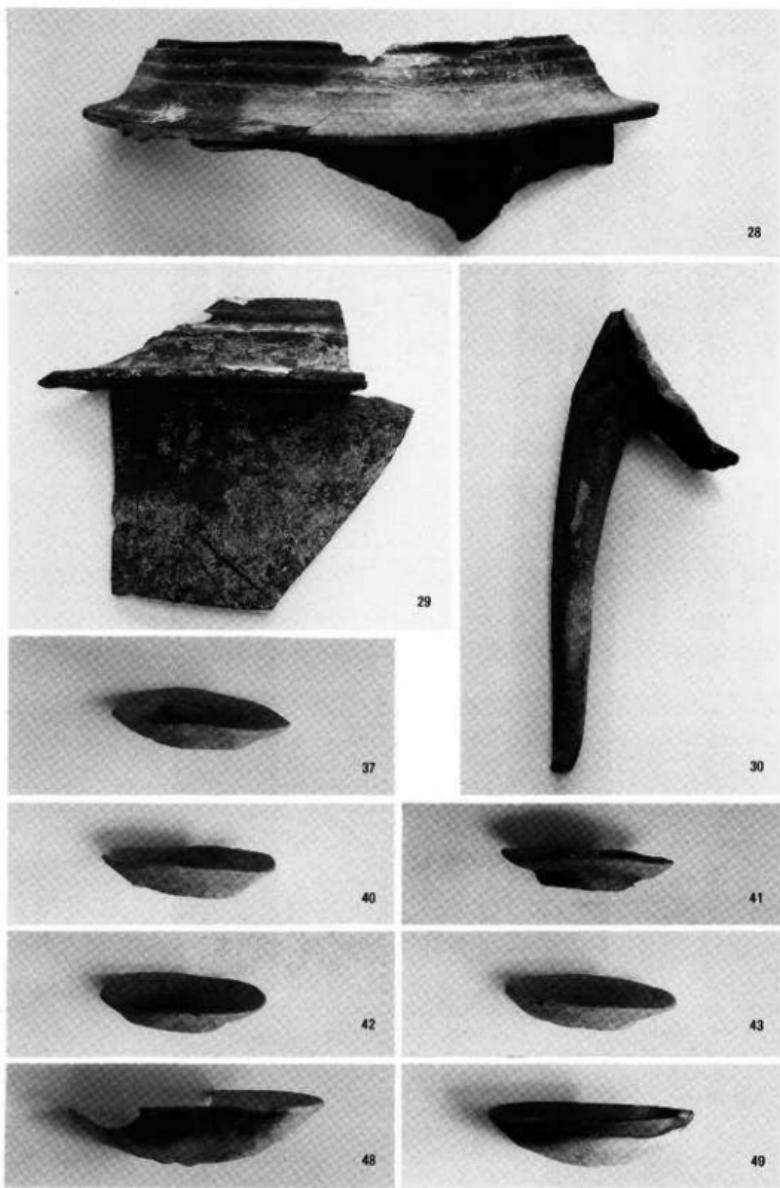
東トレント(南から)



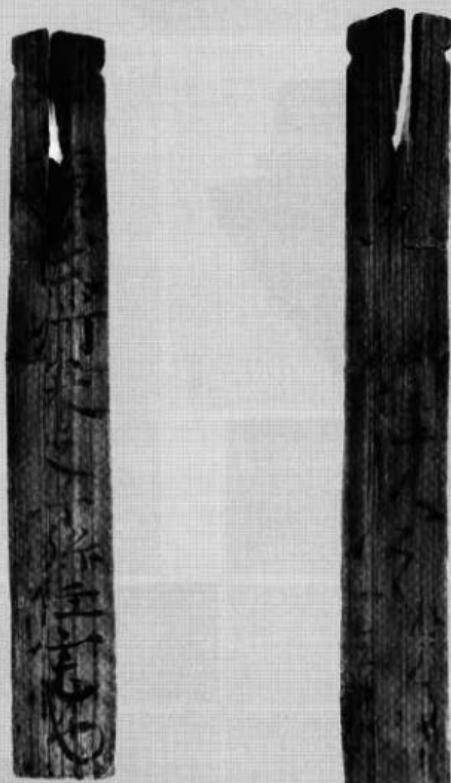
西トレント(南から)



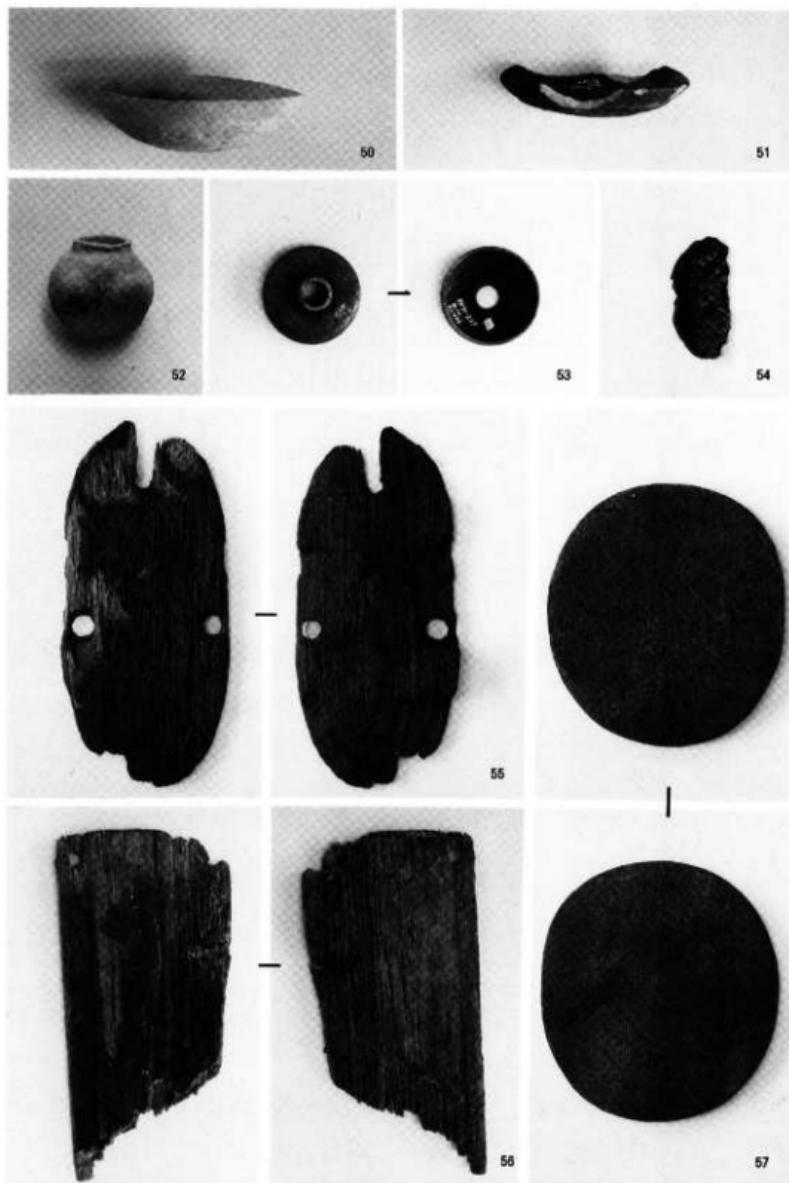
東トレンチ出土遺物



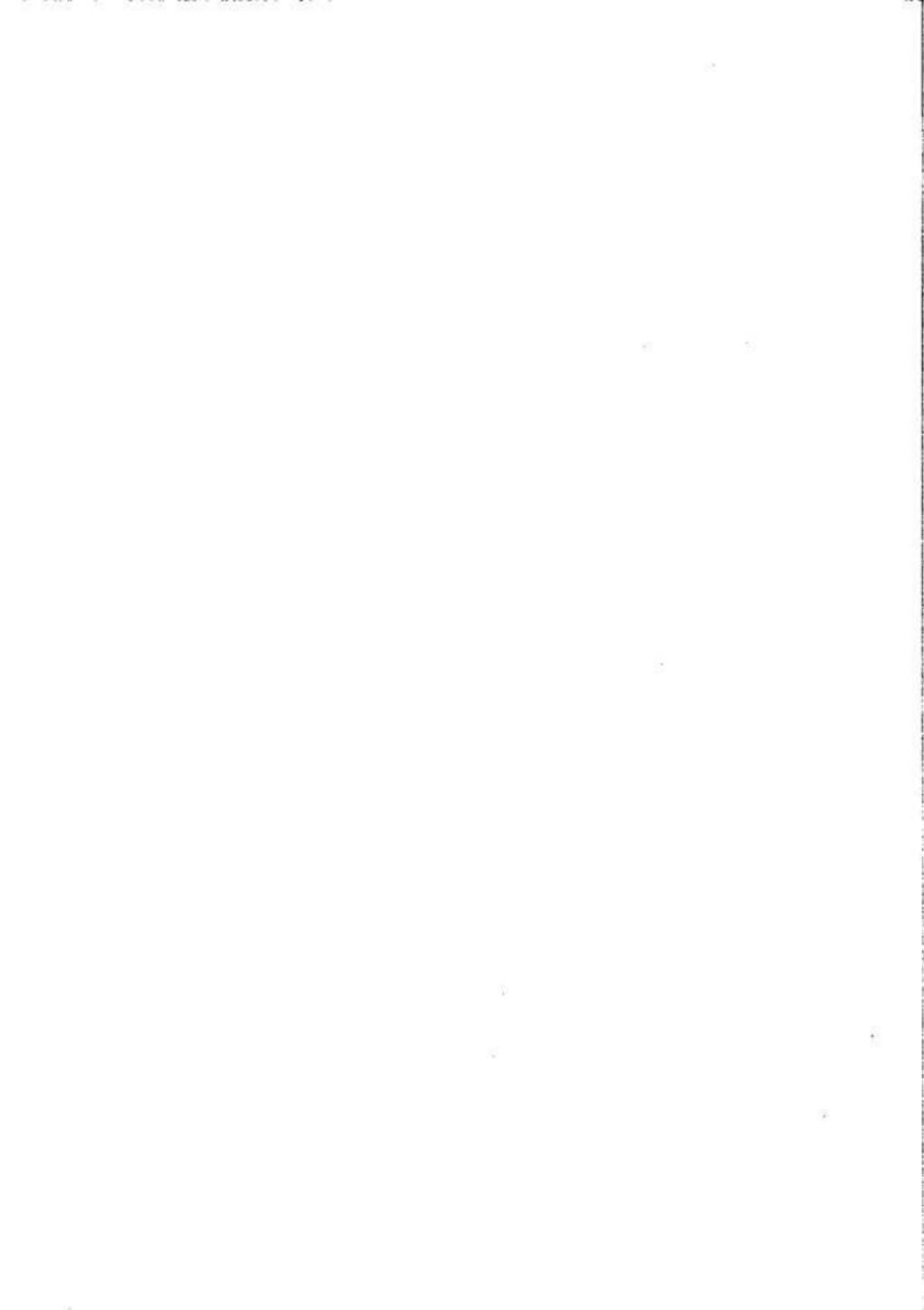
東トレンチ（28～30）、西トレンチ（37・40～43・48・49）出土遺物



東トレンチ出土 木簡



西トレンチ出土遺物



X III 跡部遺跡第6次調査 (A T91-6)

例　　言

1. 本書は、八尾市春日町1丁目で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第6次調査(AT91-6)の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年9月30日～10月4日（うち4日間）にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は16m²である。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物観察表－西岡、遺物写真・本書の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1.はじめに.....	133
2.調査概要.....	133
1) 調査方法と経過.....	133
2) 基本層序.....	135
3) 検出遺構と出土遺物.....	137
4) 遺構に伴わない出土遺物.....	138
5) 出土遺物観察表.....	140
3.まとめ.....	141

X III 跡部遺跡第6次調査 (AT91-6)

1. はじめに

跡部遺跡は、八尾市の西部に位置する跡部本町・春日町・太子堂・東太子にあたり。旧地形では旧大和川の主流であった長瀬川の左岸の沖積地にあたり、現在の標高は9.5m前後を測る。

当遺跡の周辺には東に植松遺跡、南に太子堂遺跡、西に龜井遺跡、北に久宝寺遺跡がある。また調査地は渋川廃寺推定地の南端にもあたるところである。

調査地の周辺では第1表に掲載した発掘調査が過去に行われている。今回の調査地は平成元年度に銅鋳埋納壙が発見された調査地点より東へ70mのところにあたる。

跡部遺跡発掘調査一覧表

年度 (西暦)	調査地	以 内	調査期間	調査面積 (m ²)	主な検出遺物・出土遺物	調査主体
S. 53 (1978)	春日町1丁目	同敷設公会	-	-	弥生前期-豪、鍛冶-瓦	八尾市
S. 56 (1981)	春日町1丁目37	マンション	11月9日～ 11月19日	92	弥生中期-上坑1・溝3 (弥生式土器)、古墳前期-方形溝窓? (庄内式土器)	八尾市
S. 57 (1982)	跡部本町1丁目3	冷蔵庫建設	10月1日～ 10月5日	50	古墳時代-包合層確認	調査研究会
S. 58 (1983)	跡部本町2丁目46	社員寮	58年3月1日～ 3月31日	500	鍛冶-羽釜・戸井2・上坑19・溝2・小穴群 (多量の上層器皿と瓦器)	調査研究会
S. 59 (1984)	跡部本町2丁目44-1、 45-1	浄化槽	5月10日～ 5月22日	56	鍛冶-上坑1・小穴1・上層1 (土師小皿・中皿・瓦器)	八尾市
S. 60 (1985)	安中町3丁目52-2	ビジネスホテル	6月18日～ 7月2日	69	古墳後期-上坑1、遺物-V様式-庄内式・須恵器・土器・製造	八尾市
S. 62 (1987)	安中町3丁目36、39-5	集合住宅	4月6日～ 5月18日	1,150	長谷川左岸確認	調査研究会
S. 63 (1988)	跡部本町2丁目47-1	共同住宅	3月17日～ 3月31日	16	古墳後期-遺跡、平安末期 (9.1～9.2) 上坑2・土器窓2	八尾市
H. 元年 (1989)	春日町1丁目	公共下水道工事の 工場	10月16日～ 10月26日	100	弥生前期-遺物、弥生後期-銅鋳埋納壙、古墳前期-堅穴住居、平安末期-土坑	調査研究会

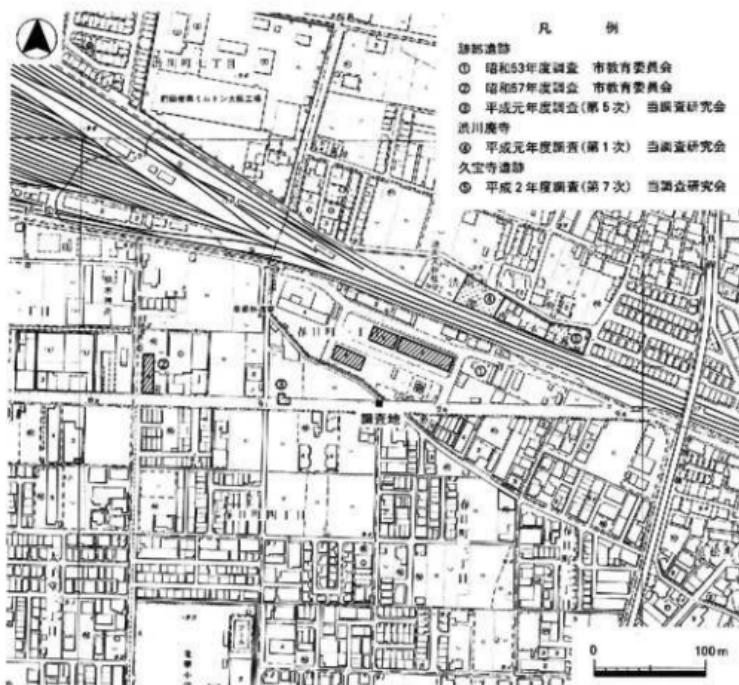
2. 調査の概要

1) 調査方法と経過

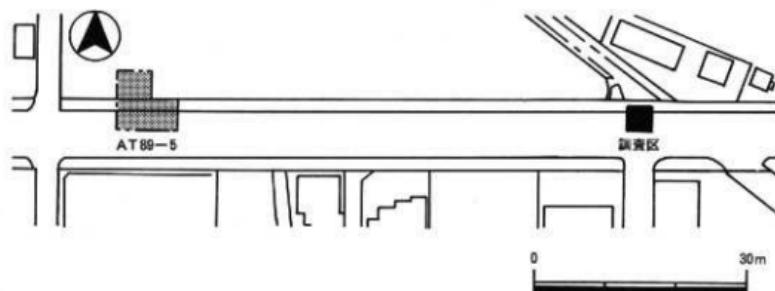
今回の発掘調査は公共下水道工事に伴うもので、八尾市と八尾市教育委員会及び(財)八尾市文化財調査研究会が協定書を締結して調査を実施した。調査期間は平成3年9月30日～10月4日である。調査面積は16m²を測る。当調査研究会が当遺跡で実施した第6次調査である。

調査地は、渋川廃寺の南端にあたり、西へ70mの所では古墳時代初頭以前の銅鋳埋納壙や古墳時代前期の堅穴住居が発見されている。

調査区は、道路面下の下水道工事の立坑部分 (4 × 4 m) である。掘削は現地表下約1.7m



第1図 調査地周辺図及び位置図



第2図 調査区位置図

までを機械で行い、以下1mの土層については入力掘削によって実施した。

2) 基本層序

調査区の基本層序は、第2図に示すとおりである。

第1層 搬乱。層厚1.5cm。現在の道路部分（アスファルト等）及び近世までの土層で、ほとんどが擾乱されており、詳細な遺構の状態を掘むことができなかった。

第2層 茶灰色粘砂。層厚10cm以上。上面には飛鳥から奈良時代の包含層が若干残存していた。またこの面から切り込む溝を検出した。ベース面は標高8.0mを測る。

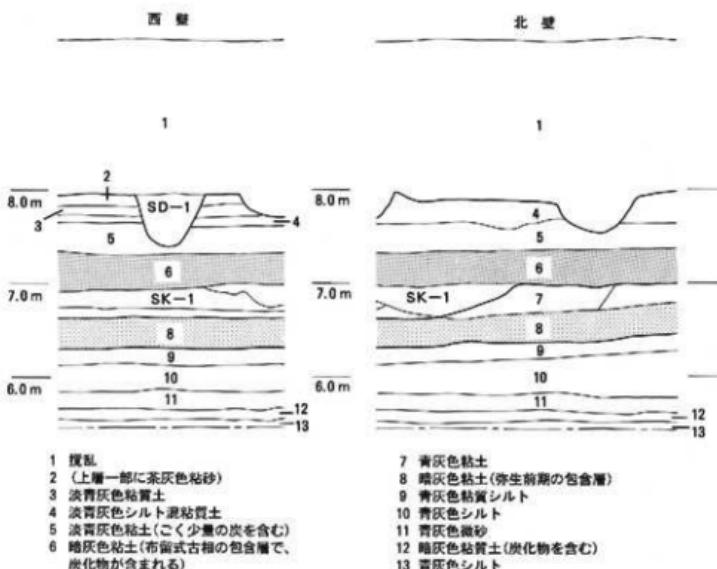
第3層 淡青灰色粘質土。層厚10cm。

第4層 淡青灰色シルト混粘質土。層厚10~20cm。

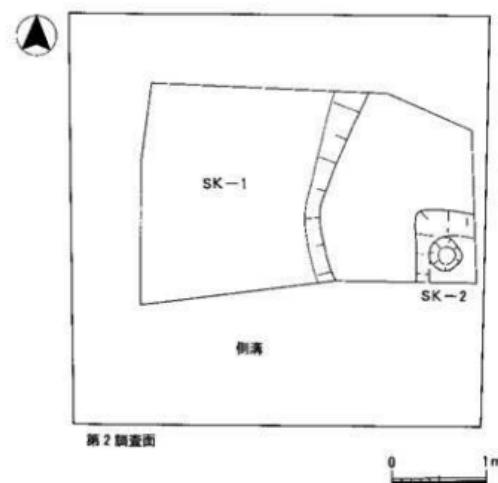
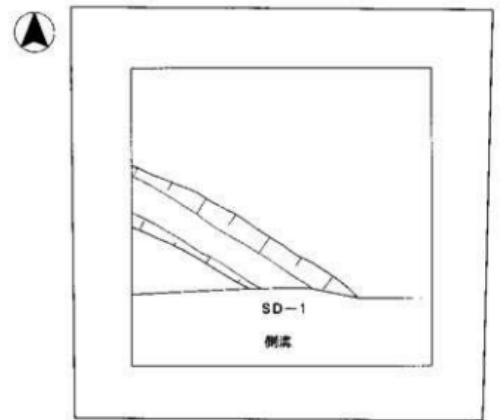
第5層 淡青灰色粘土。層厚20~25cm。ごく少量の炭が含まれる。

第6層 喰灰色粘土。層厚25~30cm。古墳時代前期の包含層（AT789-5調査の第VI層・第VII層に対応する層）である。層厚35cmを測り、色調は上部ほど濃くなる。

第7層 青灰色粘土。層厚10~20cm。上面では古墳時代前期（布留式古相）に比定される遺



第3図 断面図



第4図 造模平面図

- 構を検出した。標高は7.0mを測る。
- 第8層 暗灰色粘土。層厚20~25cm。弥生時代前期の包含層（AT89-5調査のX1層に対応する層）である。
- 第9層 青灰色粘土。層厚10cm。
- 第10層 青灰色シルト。層厚15~25cm。上面（T.P. 6.3~6.4m）では東が低く傾斜しており、調査区内では高低差約10cmを測る。遺構はなかったが、周辺には遺構の存在が考えられる。
- 第11層 青灰色微砂。層厚10cm。
- 第12層 晴灰色粘質土。層厚5~10cm。炭化物が少量含まれていたが、土器などの遺物はなかった。
- 第13層 青灰色シルト。層厚10cm以上。

3) 検出物と出土遺物

調査の結果、弥生時代から奈良時代に至る遺構・遺物を検出した（第3図）。第8層上面（第3調査面）では弥生時代前期に比定される包含層を検出した。第7層上面（第2調査面）では古墳時代前期（布留式古相）に比定される土坑2基（SK-1・SK-2）を検出した。出土層面（第1調査面）では飛鳥から奈良時代に至る建物がコンテナ箱にして1箱分出土した。以下、各調査面の遺構について記す。

• 第1調査面

溝（SD）

SD-1

調査区南西部で検出した。南東-北西の方向に伸びる溝である。幅0.5m、深さ0.5mを測り、断面形状は逆台形を呈する。堆積土は淡灰青色微砂である。遺物は出土していない。

• 第2調査面

土坑（SK）

SK-1

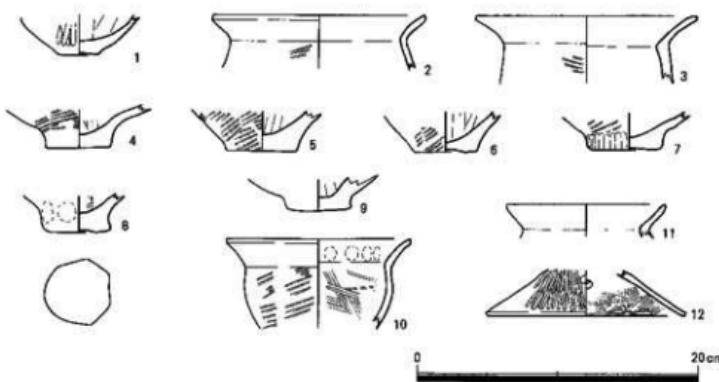
調査区西半部で検出した。西部・南北部は調査区外に至り、平面形状は不明である。規模は検出部で、東西2m以上、南北4m以上、深さ0.3mを測る。堆積土は暗灰色細砂混粘質土・晴灰色粘質土と青灰色粘質シルトのブロック土・暗灰色粘土の3層である。遺物は内部からV様式から布留古相に比定される土器の小片が少量出土している。

SK-2

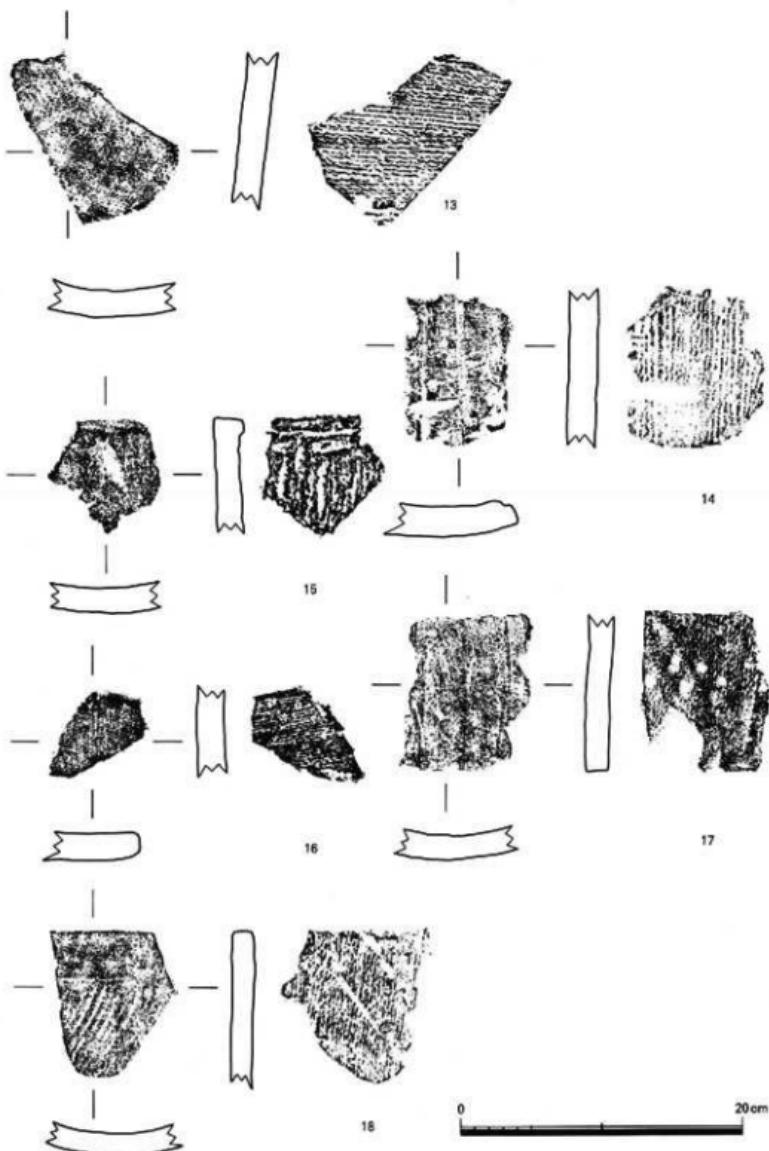
調査区南東部で検出した。東部は調査区外に至る。検出部で、平面隅丸方形を呈す。規模は東西1m以上、南北0.8m、深さ0.3mを測る。断面は逆凹形を呈し、底部では0.3mの円形の穴がある。堆積上は暗灰色粘土の1層で、底面付近には炭化物が含まれる。遺物は内部から布留古相の土器片が出土している。

4) 遺構に伴わない出土遺物

遺物は第1層と第6層と第8層の3層から出土している。時期は第8層が弥生時代前期に比定される第I様式の土器、第6層が古墳時代前期に比定される布留古相の土器、第1層の下部が奈良時代に比定される土器・瓦である。図化できたものについて記す。第6層ではV様の甕(2~9)・鉢(10)・布留式古相の鉢(1)・甕(11)・高杯(12)、第1層では奈良時代の平瓦(13~18)である。



第5図 遺構に伴わない出土遺物実測図1



第6図 出土遺物実測図

5) 出土遺物観察表

第6層出土遺物

遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 (cm)	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
1	壺 (土器)	底径 2.6	高さ 2.6	底部内面ヘラナゲ、外面ヘラミガキ、底面ナゲ。	外 淡灰茶色 内 乳灰茶色	3mm以下の砂粒を多 量に含む(長石・角 閃石)	良好	底部のみ	
2	壺 (陶生土器)	口径 16.0	高さ 16.0	口縁部内外面ヨコナギ、底部内面ナゲ、表面タキ。	淡墨灰色 赤褐色	3mm以下の砂粒を含 む(長石・雲母)	良好	口縁部 1/2	
3	壺上	底径 15.6	高さ 15.6	口縁部内外面ヨコナギ、外面ヘラナゲ、底面ナゲ。	淡墨灰色 赤褐色	2mm以下の砂粒を多 量に含む(長石・赤 褐色酸化鉄)	良好	口縁部 1/2	
4	壺上	底径 4.6	高さ 4.6	底部内面ヘラナゲ、外面タキ。	乳灰茶色	3mm以下の砂粒を多 量に含む(長石・雲 母)	良好	底部のみ	
5	壺上	底径 4.9	高さ 4.9	底部内面ヘラナゲ、外面タキ。	外 淡灰茶色 内 乳灰茶色	2mm以下の砂粒を少 量含む(長石・赤褐色 酸化鉄)	良好	底部のみ 黒斑あり	
6	壺上	底径 4.4	高さ 4.4	底部内面ヘラナゲ、外面タキ。	外 淡墨褐色 内 乳灰茶色	2mm以下の砂粒を少 量含む(長石・雲母)	良好	底部のみ	
7	壺上	底径 4.7	高さ 4.7	内面磨耗のため調整不良、外面タキ・ヘラナゲ。	淡墨茶色	4mm以下の砂粒を少 量含む(長石・雲母)	良好	底部のみ 黒斑あり 内面に炭化物	
8	壺上	底径 4.7	高さ 4.7	底部内面ハケナギ、外面タキ。	淡墨茶色～淡 灰茶色	3mm以下の砂粒を含 む(長石・雲母)	良好	底部のみ 黑斑あり	
9	壺上	底径 4.6	高さ 4.6	底部内面ヘラナギ、外面磨耗のため調 整不良。	外 乳灰茶色 内 乳灰茶色	3mm以下の砂粒を少 量含む(長石・雲母・ 角閃石)	良好	底部のみ	
10	錐 (陶生土器)	口径 13.0	高さ 13.0	口縁部内面ヨコナギ・指押さえ、外面 ヨコナギ、底部内面ハケナギ、外面タ キ。	外 乳灰茶色 内 乳灰茶色 ～灰茶色	2mm以下の砂粒を少 量含む(長石・雲母)	良好	口縁部 1/2	黒斑あり
11	壺 (土器)	口径 11.2	高さ 11.2	口縁部内外面ヨコナギ。	外 乳灰茶色 内 乳灰茶色	1mm以下の砂粒を少 量含む(長石・雲母・ 赤褐色酸化鉄)	良好	口縁部 1/2	黒斑あり
12	高杯 (土器)	底径 14.0	高さ 14.0	底部内面ハケナギ、外面ヘラミガキ。	外 乳灰茶色 内 乳灰茶色 ～淡墨灰色	3mm以下の砂粒を含 む(長石・雲母)	良好	底部のみ 黑斑あり	

第1層出土遺物

遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 (cm)	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
13	半丸 (土器)	全長 9.0	布目・繩目 幅 厚み 2.1		外 淡墨灰色 内 淡灰茶色	2mm以下の砂粒を少 量含む(長石)	良好	破片	
14	同上	全長 9.5	布目・繩目 幅 厚み 2.1		乳灰褐色	3mm以下の砂粒を少 量含む(長石・赤褐色 酸化鉄)	良好	破片	
15	同上	全長 8.0	布目・繩目 幅 厚み 2.2		乳灰褐色	4mm以下の砂粒を少 量含む(長石・赤褐色 酸化鉄)	良好	破片	
16	同上	全長 6.5	布目・繩目 幅 厚み 2.0		外 淡墨灰色 内 淡灰茶色	4mm以下の砂粒を少 量含む(長石・角閃 石・赤褐色酸化鉄)	良好	破片	
17	同上	全長 8.7	布目・繩目 幅 厚み 1.8		淡墨灰色	4mm以下の砂粒を少 量含む(長石)	良好	破片	
18	同上	全長 9.7	布目・繩目 幅 厚み 1.6		淡灰茶色	3mm以下の砂粒を少 量含む(長石・赤褐色 酸化鉄)	良好	破片	

3.まとめ

今回の調査は、古墳時代初頭以前の銅鐸埋納塙が検出された公共下水道工事に伴う調査（A T98-5）の東方約70mの地点であり、同時期の遺構確認及び遺跡の広がりを摸索する目的で実施した。その結果、弥生時代前期・古墳時代前期・奈良時代の包含層及び遺構面を検出した。銅鐸埋納塙と同時期の遺構を確認することはできなかったが、同時期の上層が同レベルで堆積しており、遺構面が東側へ同様に拡がっていることは確実である。今後、周辺で発掘調査を実施することがある場合は慎重な調査が必要であろう。また、下層では弥生時代前期の包含層も検出しておらず、周辺に遺構の存在する可能性がある。

参考文献

- (財)八尾市文化財調査研究会「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査」「跡部遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告 1983
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 昭和59・60年度」「跡部遺跡」(財)八尾市文化財研究会報告2 1983
- (財)八尾市文化財調査研究会「昭和58年度事業概要報告」「跡部遺跡」(財)八尾市文化財調査報告5 1984
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度」「跡部遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告 1988
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度」「跡部遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告 1989
- (財)八尾市文化財調査研究会「八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度」「跡部遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告28 1990
- (財)八尾市文化財調査研究会「銅鐸講演会記録集」(財)八尾市文化財調査研究会報告27 1990
- (財)八尾市文化財調査研究会「跡部遺跡発掘調査報告書」-春日町1丁目出土銅鐸- (財)八尾市文化財調査研究会報告31 1990



第2調査面（南から）



第1調査面（北から）

XIV 木の本遺跡第5次調査（SK91-5）

文書文庫

例　　言

1. 本書は、八尾市南木の本3丁目40・70～74、4丁目22～30・45で実施した空港放水路改修工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する木の本遺跡第5次調査（SK91-5）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成3年12月2日～12月19日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は104m²をはかる。なお、調査においては垣内洋平・福島友香が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－北原清子、沢村妙子が行った。
1. 全体の編集は岡田が行った。

本 文 目 次

1.はじめに	143
2.調査概要	144
1) 調査方法と経過	144
2) 基本層序	144
3) 検出遺構と出土遺物	145
3.まとめ	147
4.出土遺物観察表	151

XIV 木の本遺跡第5次調査 (SK91-5)

1 はじめに

木の本遺跡は、八尾市南部の木の本1丁目、南木の本2~7丁目付近一帯に位置する。当遺跡周辺は、古大和川の本流である長瀬川の沖積作用によって形成された沖積地にあたる。当遺跡は昭和55年度に市教育委員会が南木の本4丁目において実施した調査によって、弥生時代中期から古墳時代中期に至る遺跡であることが判明した。特に弥生時代中期前半頃においては、柱穴・溝・井戸・土坑とともに壺・甕・鉢等の遺物が多量に出土している。また本遺跡の近隣には、西に八尾南遺跡、東に田井中遺跡、北に太子堂遺跡が存在する。

当調査研究会では現在までに4件の調査を実施している。第1次調査では昭和57~58度に八尾空港内で、平安時代の条里制構造（志紀郡条里）を検出している。さらに第2次調査として昭和57年度に実施された南木の本1丁目の調査においても平安時代の遺物として、土師器（壺・皿・羽釜）、黒色土器（椀）、綠釉（皿）が出土している。第3次調査では昭和58年度に南木の本3丁目で、古墳時代中期の掘立柱建物や製塙土器を検出しており、一部にはその胎土の特徴から紀の川流域を発祥とするものも含まれている。第4次調査では、平成3年度に南木の本1



第1図 調査地周辺図

丁目で、古墳時代中期の溝と土坑を検出しており、この時期の集落範囲を推定するうえで貴重な資料を得ている。

今回の発掘調査は、当調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したもので、調査地点は昭和55年度に市教委が実施した調査地の北西約100mの地点に位置する。本調査は当調査研究会が当遺跡内で実施した第5次にあたり、調査面積は104m²を測る。

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は空港放水路改修工事に伴うもので、河川底および南岸法（のり）面の工事部分を調査対象とした。調査では、東西に伸びる河川工事区域内に2.6m×10mのトレンチを計4箇所設定し、西から第1～第4トレンチと呼称した。各トレンチともに、機械により現河川上面へのドロを0.5～1.0m前後掘削した後、以下0.5m～0.9mについて人力掘削を行ない遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、第1トレンチでは第8層緑灰色シルト上面（T.P.+7.5m）で自然流路1条（NR-1）を検出した。第2トレンチでは第8層上面（T.P.+7.7m）で落ち込み状遺構1箇所（落ち込み）を検出した。第3トレンチでは第4層灰黒色粘土上面（T.P.+8.1m）で土坑1基（SK-101）、小穴14個（SP-101～114）を検出し、第8層上面（T.P.+7.8m）で溝1条（SD-201）を検出した。第4トレンチでは遺構は検出されなかった。遺物は遺構及び各包含層からコンテナ箱に約3箱出土した。

2) 基本層序

第1層 擾乱。現河川内堆積土。層厚0.4～1.0m。上面の標高はT.P.+8.6m前後。

第2層 淡茶灰色粘土。古墳時代中期包含層。層厚0.05～0.2m。

第3層 暗茶灰色粘土。炭化物を多量含む。土坑（SK-101）内埋土。

第4層 灰黒色粘土。上層が第1遺構検出面。古墳時代前期包含層（庄内式新相）層厚0.11～0.4m。

第5層 晴灰色粘土。落ち込み状遺構、溝（SD-201）内埋土。

第6層 灰色粗砂。ブロックで灰色粘質土が混入。

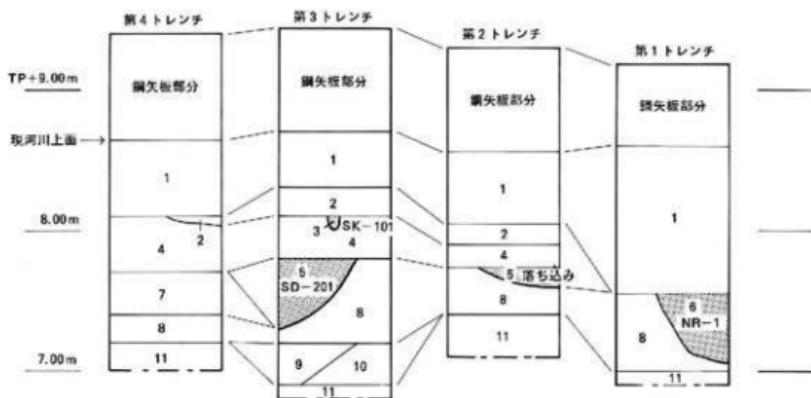
第7層 暗緑灰色粘質土。層厚0.3m前後。

第8層 緑灰色シルト。上層が第2遺構検出面。層厚0.3～0.6m。

第9層 灰茶色微砂混粘土。層厚0.3m前後。

第10層 青灰色微砂混粘土。層厚0.3m前後。

第11層 灰白色細砂～粗砂（涌水層）。層厚1.0m以上。全トレンチにおいて行った下層確認調査結果からみて河川跡と思われる。

第2図 基本層序模式図 ($S = 1/40$)

3) 検出遺構・出土遺物

<1トレンチ>

NR-1

調査区内では北肩を検出したが南肩は調査区外に至る。流路方向は平面的にみて、東から東西方向に伸びるものと考えられる。検出幅2.0m、深さ0.6m、埋土は灰色粗砂でブロックで灰色粘質土が混入する。埋土内から遺物が出土しなかった為、時期は不明である。

<第2トレンチ>

落ち込み

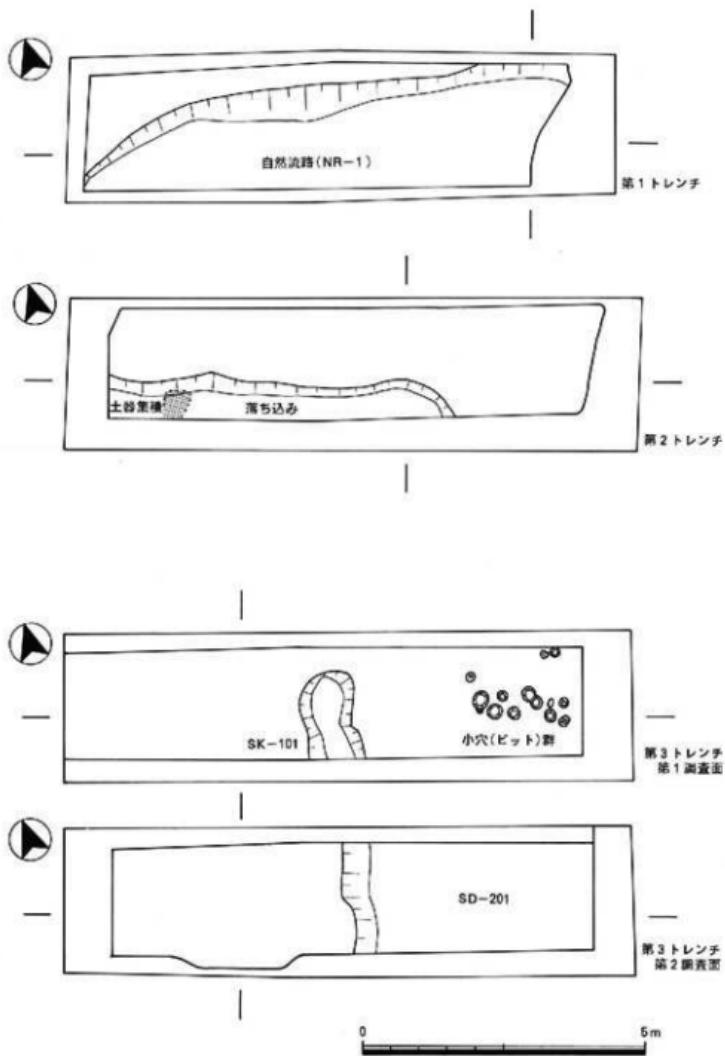
大半が調査区外のため全容は不明であるが、調査区中央より南に向かって緩やかに落ち込む形状で、検出の南北幅0.8m、東西幅6.3mを測る。埋土は暗灰色粘土で、遺物は古墳時代前期(庄内式新相)に比定される壺(1)が出土している。

<第3トレンチ>

・第1調査面

SK-101

調査区のほぼ中央に位置し、南部分は調査区外のため全容は不明であるが、検出部分からみて長楕円形を呈すると推定される。検出部分の東西幅1.0m、南北幅1.5m、深さ0.15mを測る。埋土は暗茶灰色粘土で炭化物を多量に含む。遺物は時期決定できる明瞭なものはみられなかつたが、上層の包含層内遺物(初期須恵器、及び韓式土器の細片を含む)からみて、古墳時代中期前葉と考えられる。



第3図 検出遺構平面図 ($S = 1/100$)

小穴 (SP-101~SP-114)

調査区東部に集中して認められたが、建物を構成すると考えられる柱穴はなかった。形状は大半が円形であり、規模は径0.15~0.2m、深さ0.05~0.15mを測る。埋土は淡茶灰色粘土で、遺物はSP-103、SP-109、SP-113から土器の小片が少量出土したが、明確に時期決定できるものはなかった。しかし、遺構の検出状況からみてSK-101と同一時期（古墳時代中期前葉頃）と考えられる。

・第2調査面

SD-201

調査区中央から東側にかけて確認できたもので、東の肩は平面的には検出できなかったが、北壁及び南壁の観察から南北に伸びると思われる。規模は幅4.0m、深さ0.3mを測る。埋土は暗灰色粘土で、遺物は下層から古墳時代前期（庄内式新相）に比定される壺の破片が数点出土したが、図化できるものはなかった。

・遺構に伴わない出土遺物

第3トレンチでは第4層内から主に出土した（第4~6図）。出土量はコンテナにして約2箱分を数える。遺物は時期別すると弥生時代後期末~古墳時代前期に至るものである。

弥生時代後期末に比定されるものとしては、畿内第V様式の壺（12~17）・小型鉢（18）がある。古墳時代前期（庄内式新相）に比定されるものとしては、庄内式壺（19~30）、古墳時代前期（布留式期）では、短頸壺（2）・複合口縁壺（3~7）・大型壺（8）・小型丸底壺（9~10）・高杯（32~37）・鉢（38~40）がある。ほかに山陰地方の特徴をもつ鼓型器台の一部（41）・敲石（42）がある。

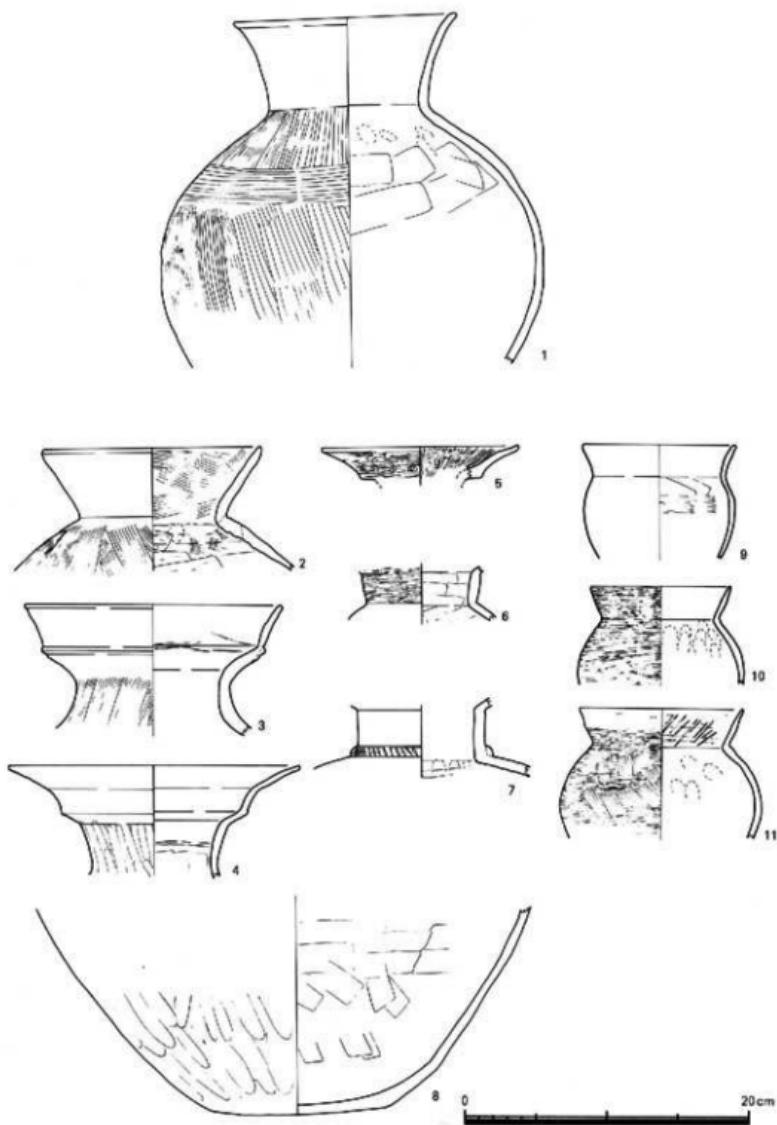
<第4トレンチ>

この調査区内では遺構は検出されなかったが、第2層の淡茶灰色粘土内（T.P.+8.1~8.0m）で古墳時代中期前葉に比定される十師器の壺（43）・須恵器杯身（44）・および韓式土器（45）の破片を検出した。この上層は調査区の西端部のみ存在し、ほとんどが上層の近世河川によって削平されている。次の第4層の灰黒色粘土内からは、庄内式新相に比定される壺・壺の破片が少量出土したが、図化できるものはなかった。

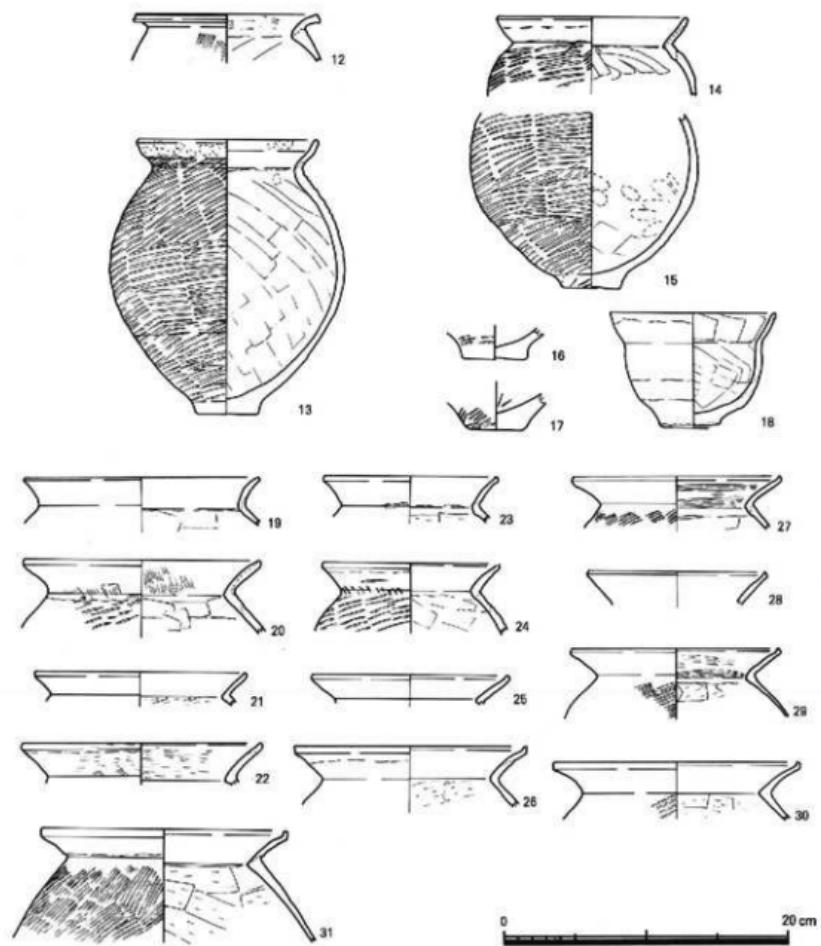
3. まとめ

今回の調査は、河川内の調査という惡条件ではあったが古墳時代中期（前葉）の遺物包含層及び古墳時代前期（庄内式新相）の遺構・遺物を検出することができた。

古墳時代中期（前葉）については、第4トレンチの東側付近で、八尾市教育委員会が遺構確認調査を行った結果、初期須恵器・韓式土器を検出している。これまでの調査結果を照合すると、同時期の遺構がさらに西へ広がることが窺える。古墳時代前期（庄内式新相）については、

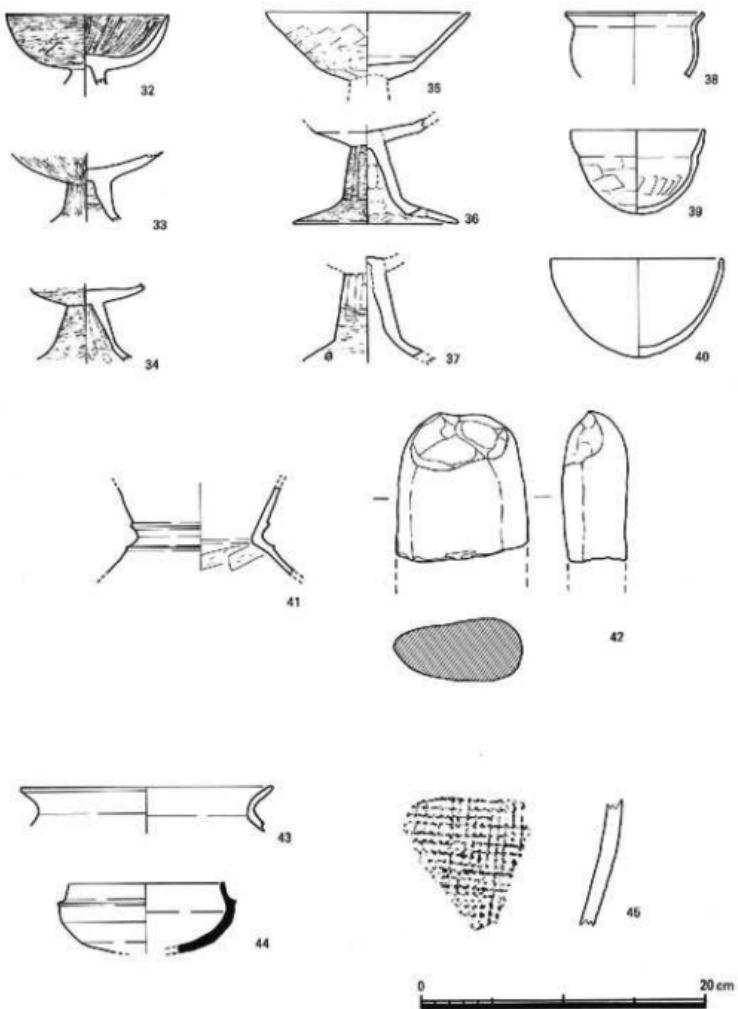


第4図 第2トレンチ・落ち込み（1）、第3トレンチ・包含層（2～11）出土遺物実測図



第5図 第3トレンチ・包含層出土遺物（12～31）実測図

今までの数次にわたる調査結果において、遺物は多量に出土しているが、遺構が検出されたのは今回の調査がはじめてであり、貴重な成果といえよう。



第6図 第3トレンチ・包含層（32～42）、第4トレンチ・包含層（43～45）出土遺物実測図

4 出土遺物観察表

第2トレンチ 落ち込み

遺物番号 図版番号	器種	法盤 口径 (cm) 器高	調査・技法等の特徴	色調	胎土	被成	備考 遺存状況
1 四	盃 (土器)	口径 15.9 最大径 27.2	口縁部外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ(10本)、内面背面指明瞭、中位以下ヘラナデ、底部は欠損。	淡黄色	長石等の細砂粒を少量含む	良好	%

第3トレンチ 包含層

遺物番号 図版番号	器種	法盤 口径 (cm) 器高	調査・技法等の特徴	色調	胎土	被成	備考 遺存状況
2 四	盃 (土器)	口径 15.8	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ハケナデ(10本)、体部外面ハケナデ(12本)、内面ヘラナデ(10本)、内面背面指明瞭、中位以下ヘラナデ、底部は欠損。	黒褐色	長石・石英等の細砂粒を少量含む	良好	口縫部分
3 四	同上	口径 18.2	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後一部ヘラナデ、体部外面ハケナデ(13本)、内面ヘラナデ(10本)。体部内面上位に接合痕2本を有する。体部は欠損。	乳灰色	長石等の細砂粒を少量含む	良好	口縫部分
4 四	同上	口径 20.8	口縁部外面ヨコナデ、頭部の外面へラナデ、体部は欠損。	暗茶褐色	長石・石英・雲母等の細砂粒を少量含む	良	口縫部分
5 四	同上	口径 14.0	口縁部内外面ヘラナデ。外面上に円形竹管文を施す。体部は欠損。	黒褐色	長石等の細砂粒を含む	良好	口縫部分
6 四	同上	口径 9.8	腹部外面ハラミガキ、内面ヘラナデ、体部外面ナデ、内面ヘラナデ。口縫部及び体部は欠損。	外 淡黄色 内 黒褐色	長石・石英等の細砂粒を含む	良	腹部分
7 四	同上	瓶径 9.6	爾部外面ヨコナデ、頸部外面下位突部1割口、口縫部外面ナデ、内面上面指明瞭、下位ヘラナデ。口縫部及び体部は欠損。	赤茶色	長石等の細砂粒を含む	良好	頸部分
8 四	同上	瓶径 11.9	体部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。体部上位は欠損。	淡茶灰色	長石・石英・角閃石等の細砂粒を含む	良	腹部分 裏面有
9 四	同上	口径 10.8	口縫部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面上位ヘラナデ後ハケナデ、中位ナデ。底部は欠損。	褐色	長石・石英・雲母等の細砂粒を含む	良	%
10 四	同上	口径 9.9	口縫部内外面ヘラミガキ。体部外面ヘラミガキ、内面上位指明瞭、中位ナデ。口縫部外面上位に1本の接合痕を有す。底部は欠損。	淡黄褐色	長石等の細砂粒を含む	良好	%
11 四	同上	口径 11.6	口縫部内外面ヘラミガキ。体部外面ヘラミガキ、中位ヘラナデ(10本)、内面上位指明瞭、中位ナデ。底部は欠損。	淡黄色	1mm以下の微砂粒を少量含む	良好	%
12 四 (弥生式上器)	口径 12.9	口縫部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ハケナデ(7本)、体部外面ハケナデ、内面ヘラナデ。瓶部内面上に1本の接合痕を有す。体部は欠損。	赤茶色	長石等の細砂粒を含む	良好	口縫部分	
13 四	同上	口径 12.6 器高 19.5 底径 4.4	口縫部外面指明瞭、体部外面タキ(5本)、内面ヘラナデ。瓶部内外面に各々1本ずつ、体部外面下位に1本の接合痕を有す。口縫部欠損。	淡青色-褐色	長石・角閃石等の細砂粒を含む	良好	瓶付有
14 四	同上	口径 13.2	口縫部外面ヨコナデ、体部外面タキ(5本)、内面ヘラナデ。口縫部外面に1本、内面外面に1本、瓶部内面上に1本それぞれ接合痕を有す。体部小孔と下欠損。	淡青茶色	長石等の細砂粒を含む	良好	口縫部分
15 四	同上	底径 4.1	体部外面タキ(6本)、内面指明瞭・ヘラナデ。体部外面下位に1本接合痕を有す。口縫部欠損。	黒褐色	長石・石英等の細砂粒を含む	良好	腹部分 裏面有
16 四	同上	底径 4.6	底部外面ナデ後タキ、内面ナデ。口縫部・体部は欠損。	赤茶色	精良	良好	底部%
17 四	同上	底径 3.7	底部外面タキ、内面ヘラナデ。口縫部・体部は欠損。	淡青茶色	長石等の細砂粒を少量含む	良好	底部%
18 四 (弥生式上器)	口径 11.8 器高 8.1 底径 4.2	口縫部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ、体部外面ナデ、内面ヘラナデ。口縫部外面上に1本、体部外面下位に2本それぞれ接合痕を有す。	灰白色	長石・石英等の細砂粒を含む	良	腹部分 裏面有	

遺物番号 図版番号	器種	法星・口径 (mm) 厚さ	測定・核法等の特徴	色調	精上	焼成	備考 遺存状況
19 要 (土器)	口径 16.8	口縁部内外面ヨコナデ、両部外面ハケナデ、内面ヘラナデ。頭部内面に1本の接合痕を有す。体部は欠損。	淡黄灰白色	長石・石英・角閃石・雲母等の細砂粒を含む	良	口縁部分	
20 同上	口径 16.8	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、体部外 面ハケナデ(5本)。タキキ、内面ヘラナデ。 頭部外面に1本の接合痕を有す。体部は欠損。	淡褐灰色	長石・石英等 の細砂粒を少 量含む	良	口縁部分	
21 同上	口径 15.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面 ヘラ削り。体部は欠損。	暗褐色	長石・石英・ 雲母等の細砂 粒を含む	良	口縁部分	
22 同上	口径 17.6	口縁部外面ヨコナデ。一部ハケナデ(5本)、 内面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラ削り。 11縦部外面に1本の接合痕を有す。体部は欠 損。	黒褐色	長石等の細砂 粒を少量含む	良好	口縁部分 保有者	
23 同上	口径 12.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラナデ、 内面ヘラ削り。頭部内面に1本の接合痕を有す。 体部は欠損。	暗褐色	長石・石英・ 雲母等の細砂 粒を含む	良	口縁部分	
24 同上	口径 12.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラナデ(5 本)、内面ヘラナデ。口縁部外面に1本、背 部内面に2本それぞれ接合痕を有す。体部は欠 損。	乳桜灰白色	長石・角閃石 等の細砂粒を含む	良好	口縁部分	
25 同上	口径 14.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部は欠損。	黒褐色	長石等の細砂 粒を少 量含む	良好	口縁部分	
26 同上	口径 16.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面 ヘラ削り。口縁部外面に1本の接合痕を有す。 体部は欠損。	乳灰灰色	長石・石英等 の細砂粒を含む	良	口縁部分	
27 同上	口径 14.7	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ(5本)、 体部外曲タキキ(5本)、内面ヘラ削り。	淡黄茶色	角閃石等の細 砂粒を少量含 む	良好	口縁部分	
28 同上	口径 12.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部は欠損。	淡黄色	長石等の細砂 粒を少 量含む	良好	口縁部分	
29 同上	口径 14.8	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ(5本)、 体部外曲タキキ、内面ヘラ削り。体部は欠損。	にぼい黄褐色	長石等の細砂 粒を少 量含む	良好	口縁部分 保有者	
30 同上	口径 17.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外曲ナデ、一部 タキキ、内面ヘラ削り。体部は欠損。	淡灰色~暗褐 色	長石・石英・ 雲母等の細砂 粒を含む	良	口縁部分	
31 同上	口径 17.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部外曲タキキ(7 木)、内面ヘラ削り。頭部外面に1本の接合 痕を有す。体部は以下は欠損。	白灰色~黒褐色	長石・角閃石 等の細砂粒を含 む	良好	口縁部分	
32 五	杯 (土器)	口径 11.6	杯部外表面ヘラミガキ。脚部は欠損。	淡青色	青銅等の細砂 粒を含む	良好	杯部分
33 五	同上	-	杯部外表面ヘラミガキ、内面ナデ、頭部外面ヘ ラミガキ、内面ヘラ削り。杯部の口縁部、脚 部は欠損。	にぼい褐色	長石等の砂粒 を多量含む	良好	杯状部完存
34 同上	-	杯部外表面ヘラミガキ、内面ナデ、頭部外面ヘ ラミガキ、内面しづり目、指頭痕。杯部の口 縁部、脚部は欠損。	淡褐色	長石・石英・ 雲母等の細砂 粒を含む	良	杯状部完存	
35 五	同上	口径 14.5	杯部外表面ヘラ削り、内面ナデ。脚部は欠損。	淡褐色	長石・石英・ 雲母等の細砂 粒を含む	良	杯部分
36 五	同上	解説 11.8	杯部外表面ナデ、内面ヘラミガキ、柱状部外 面ヘラミガキ、内面ナデ、瓶部外表面ヘラミガキ、 内面ハケナデ。瓶部に三方の穿孔を有す。杯 部は欠損。	淡青茶色	精良	良好	柱状部完存
37 同上	-	柱丈大外面上位ヘラ削り、下位ヘラミガキ、 内面ナデ、瓶部外表面ヘラミガキ、内面ナデ。 瓶部に三方の穿孔を有す。杯部、脚部は欠損。	淡褐色	長石・雲母等 の細砂粒を含む		柱状部完存	
38 体 (土器)	口径 9.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ヘラナデ。 底部は欠損。	淡青灰白色	長石・石英・ 雲母等の細砂 粒を含む	良	%	
39 同上	口径 9.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ヘラナデ。	淡褐色	長石・石英・ 雲母等の細砂 粒を含む	良	%	

遺物番号 図版番号	器種	底量 口径 (cm) 器高	調査・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
45 五	鉢 (土師器)	口径 12.3	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外曲ナデ。	外 に深い黄 褐色 内 明黄褐色	長石・石英等 の細砂粒を多 量含む	良	% 黑斑有
41 五	鼓腹器台 (土師器)	从部径 7.2	受部・从部内外面ヨコナデ、脚部外側ナデ内 面ヘラ削り。基部下部に凸唇が一帯ずつ連る。 口縁部・脚部は火痕。	淡黄色	長石・角閃石 等の粗砂粒を少 量含む	良好	基部%

第4トレンチ 包含層

遺物番号 図版番号	器種	底量 口径 (cm) 器高	調査・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	備考 遺存状況
43	壺 (土師器)	口径 18.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部は欠損。	灰黄色	長石・雲母等 の細砂粒を含 む	良好	LJ縫部%
44 五	杯身 (須恵器)	口径 11.0 立ち上がり 高 1.2 受部径 12.7	底体部外面ヨコナデヘラ削り、他は回転ナデ。 底部の一部は欠損。	青灰色	繊維	堅硬	ロクロ左方 向 %



第1 トレンチ全景（西から）



第2 トレンチ全景（西から）



第3 トレンチ全景（東から）



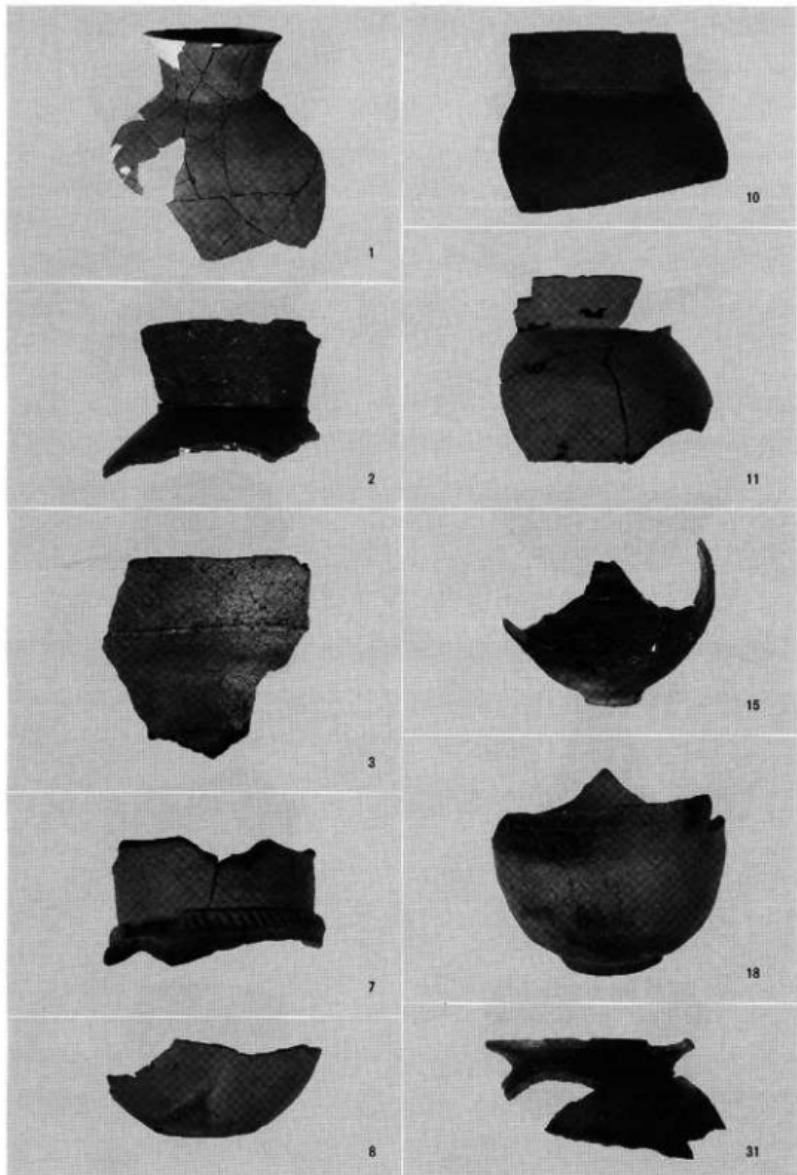
第4 トレンチ全景（東から）



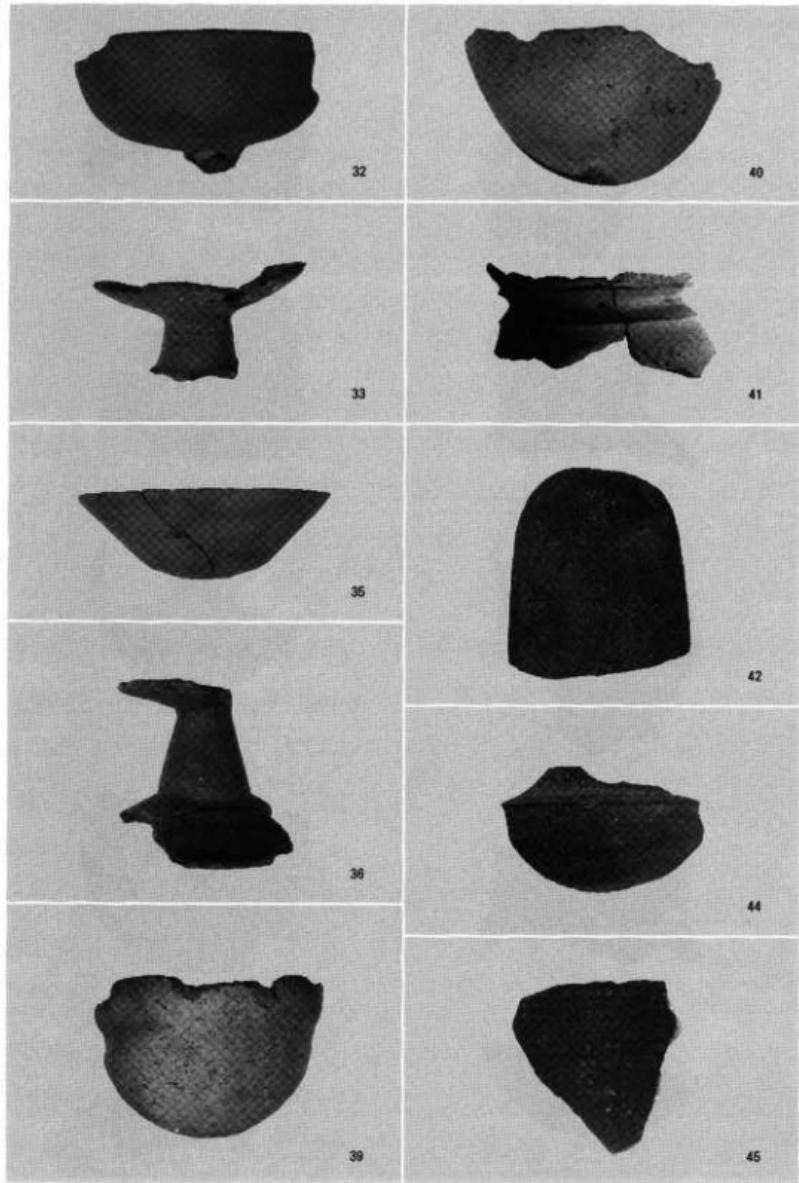
第3トレンチ 落ち込み内遺物出土状況（西から）



第3トレンチ 第2調査面遺物出土状況（東から）



第2トレンチ・落ち込み（1）、第3トレンチ・包含層



第3トレンチ・包含層、第4トレンチ・包含層（44、45）

(財)八尾市文化財調査研究会報告34

八尾市埋蔵文化財発掘調査報告

- | | |
|-------------------|------------------|
| I 久宝寺遺跡（第10次調査） | VIII 水越遺跡（第4次調査） |
| II 久宝寺遺跡（第11次調査） | IX 舌振遺跡（第11次調査） |
| III 久宝寺遺跡（第12次調査） | X 大竹西遺跡（第2次調査） |
| IV 恩智遺跡（第5次調査） | XI 東郷遺跡（第38次調査） |
| V 恩智遺跡（第6次調査） | XII 竜華寺跡（第2次調査） |
| VI 中出遺跡（第7次調査） | XIII 跡部遺跡（第6次調査） |
| VII 中田遺跡（第9次調査） | XIV 木の本遺跡（第5次調査） |

発行 平成4年9月

編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市清水町1丁目2番1号
TEL 0729-94-4700

印刷 明新印刷株式会社

表紙 レザック66 〈260kg〉
本文 マットアート 〈90kg〉
見返し 上質 〈90kg〉
色トピラ 色上質 厚11

